

徳光

—県営ほ場整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書—

1992

石川県立埋蔵文化財センター

徳光

—県営ほ場整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書—

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

- 1 本書は石川県松任市徳光町に所在する徳光古屋敷遺跡、徳光聖光寺遺跡、徳光ジョウガチ・シロド遺跡、平木D遺跡、北安田北遺跡の5遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は石川県農林水産部耕地整備課施行の県営ほ場整備事業御手洗・出城地区徳光工区と高度利用集積事業徳光地区に起因し、同課の依頼をうけた石川県立埋蔵文化財センターが排水路予定地に係る埋蔵文化財の調査を実施した。
調査の費用は県耕地整備課の負担と県教育委員会の文化庁補助事業として実施した。
- 3 発掘調査は県立埋蔵文化財センター職員が担当し、調査の実施にあたっては、松任市徳光町・相川町・相川新町・宮保町の有志の協力を得た。
徳光古屋敷遺跡、徳光ジョウガチ遺跡・徳光シロド遺跡…………湯尻修平
徳光聖光寺遺跡…………越坂一也・宮本直哉
平木D遺跡…………垣内光次郎
北安田北遺跡…………川畑　誠
- 4 発掘調査および本報告書の作成にあたって当センター職員の他に下記の各位より御協力・御教示を得ている。特に宮本直哉氏には徳光周辺の地理的・歴史的環境についてまとめていただき、また、越坂一也氏には徳光聖光寺遺跡の報告をまとめるにあたり、多大な御協力を得た。
芳名を記して深甚の謝意を表したい。
安宅　務、大藤雅男、広岡吉紀、藤重 啓、横山貴広
- 5 本書の執筆は以下のとおり分担した。編集は各担当者との協議にもとづき垣内光次郎が行なった。
第1章……………宮本直哉
第2章……………垣内光次郎・湯尻修平
第3章・第5章…………湯尻
第4章……………越坂一也・湯尻・丸山郭子
第6章……………垣内
第7章……………川畑　誠
- 6 本書で用いる方位はすべて座標北で、水平基準は海拔高である。第4章第2節の遺構実測図に付した断面図の土色は「標準土色帖」の色調に依っている。また、写真図版に付した番号は挿図番号および遺物番号である。

目 次

	頁
第1章 遺跡の立地と環境	1
第1節 位置と地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第2章 調査に至る経緯と調査の実績	7
第3章 昭和61年度の調査（徳光古屋敷遺跡）	12
第1節 調査の概要	12
第2節 遺構	12
第3節 遺物	16
第4章 昭和62年度の調査Ⅰ（徳光聖光寺遺跡）	26
第1節 調査の概要	26
第2節 遺構	26
第3節 遺物	36
第5章 昭和62年度の調査Ⅱ（徳光ジョウガチ遺跡・徳光シロド遺跡）	50
第1節 調査の概要	50
第2節 遺構	51
第3節 遺物	55
第6章 昭和63年度の調査（平木D遺跡）	59
第1節 調査の概要	59
第2節 遺跡の位置と層序	59
第3節 遺構と遺物	61
第7章 平成元年度の調査（北安田北遺跡）	70
第1節 調査の概要	70
第2節 遺構	70
第3節 遺物	75
第4節 小結	75

第1章 遺跡の立地と環境

第1節 位置と地理的環境

靈峰白山を源流とする手取川は、標高約90mの石川県石川郡鶴来町を扇頂とし、北西方向に110度・半径約12kmの手取川扇状地を形成して日本海に注ぐ。この扇状地内には、松任市をはじめ1市7町が位置している。本書において報告する諸遺跡は、松任市徳光町（旧御手洗村）・平木町（旧出城村）に所在する。この辺りは、手取川扇状地の扇央稜線が日本海に接する扇端部に該当し、豊富な伏流水を求めて各種工場が扇状地内に進出する以前は、地下水自噴地帯であった。現在、松任市は田園都市構想を描き、農村部を開発して工業団地・住宅団地を造成して都市化を推し進め、一方で大規模圃場整備も推進している。しかし、現実は金沢市のベッドタウンとして位置づけられるにすぎない。

手取川は「その水路を七度変えた」との如く、暴れ川として知られ、現存する限られた文献からだけでも、松任市徳光町付近から現在の手取川の間を激しく変遷した様子がわかる。現在、手取川扇状地内に網の目のようにはり巡らされている手取川七ヶ用水（富樺、中村、郷、山島、大慶寺、中島、新砂川）とその支流は、手取川の旧河道といわれ、扇状地内をいまも潤し続けている。

この地域の地形の様相は、明治から大正にかけて行われた耕地整理事業や本遺跡の調査原因となった県営圃場整備事業などのため、平坦でかつ整然とした水田が一望できる状況になっている。しかし、近年の発掘調査の所見からも、細かな谷と微高地とが検出される事例が報告されており、本来は、大小さまざまな河川によってくぎられた帆立貝の貝殻状の細長い微高地地形が形成されていたと考えられる。これは、手取川扇状地では「島」とよばれ、確認されているほとんどの遺跡は、この上のものである。その集落のありようも、発掘調査の所見からは現在の様な集村ではなく、小ブロックごとの散村形態が多く確認されている。

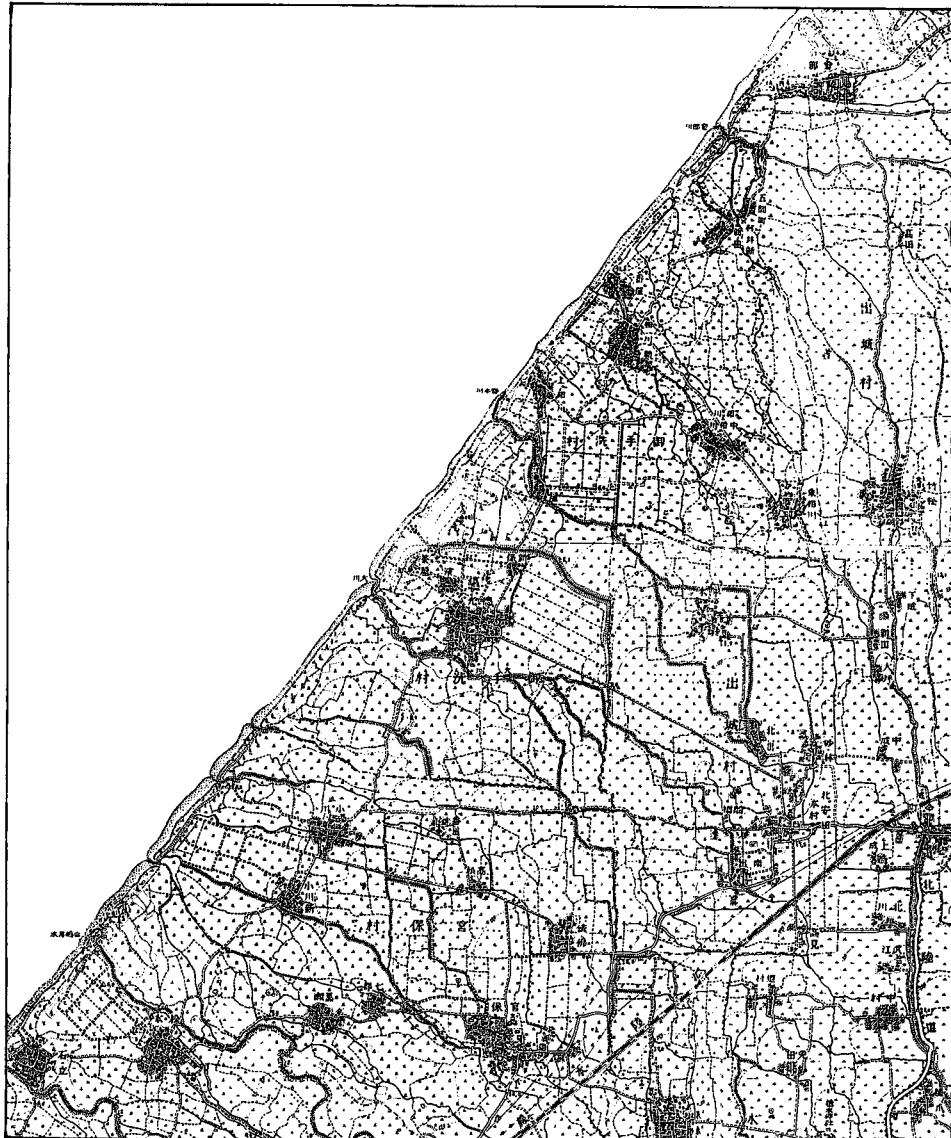
第2節 歴史的環境

縄文時代

本遺跡の付近の縄文時代の遺跡は、ほとんど確認されていない。わずかに、海岸線に徳光遺跡が散布地として知られるのみであり、北東約5kmの旭遺跡群にいたるまで、当該期の遺跡の展



第1図 松任市の位置



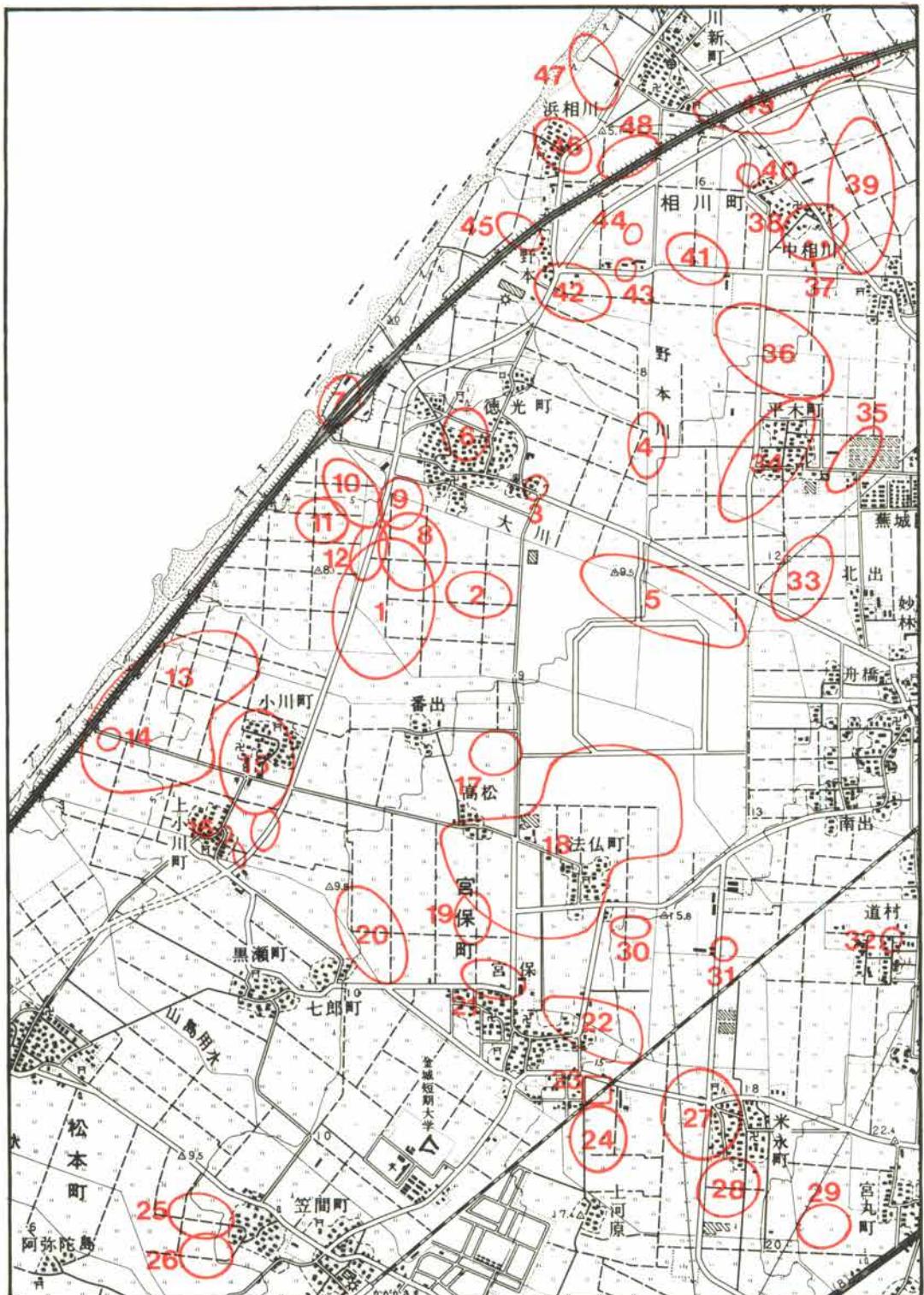
第2図 松任市徳光町周辺の地形(明治42年測図 1/4,000)

開が確認されていない。

弥生時代～古墳時代

弥生時代に入ても、出土遺物に前期の土器を含んでいる遺跡はあるが、その継続性は認められない。中期の遺跡も少なく、僅かに野本遺跡において中期後半の多量の土器と木製品、植物遺体とともに櫛が出土しているだけである。

弥生時代後期になると、人々の開発の手が急激に本遺跡付近まで伸び、確認できる遺跡数も飛躍的にのびる。その内海岸線沿いでは、松任市徳光町を南限とする泥炭層（ボカ層）に当該期遺跡が集中し、泥炭層遺跡と呼ばれる。このような遺跡には、浜相川C遺跡、浜相川D遺跡、浜相



第3図 徳光町周辺の遺跡(1/2,500)

第3図 遺跡名一覧（本書報告遺跡は1～5である。）

1徳光聖興寺遺跡 2徳光古屋敷遺跡 3徳光ジョウガチ遺跡 4平木D遺跡 5北安田北遺跡 6大和隼人館跡
7徳光遺跡（縄文） 8アベノ願証寺跡 9徳光館跡 10徳光C遺跡 11徳光B遺跡 12徳光ヨノキヤマ遺跡（弥生・中世） 13小川新遺跡（弥生～奈良・中近世） 14小川小白山神社遺跡（中世） 15・16小川遺跡（中世） 17番田・高松遺跡（平安～中世） 18法仏遺跡（弥生～平安） 19鶴丸館跡 20宮保C遺跡（奈良？・中世） 21宮保遺跡（弥生） 22宮保光明寺遺跡（弥生・安土桃山）・赤松郎宮保本陣跡（室町） 23宮保館跡（中世） 24宮保B遺跡 25賢徳寺跡（中世） 26笠間兵衛家次館跡（室町） 27北出遺跡（平安・中世・近世） 28米永古屋敷遺跡（古墳～中世） 29宮丸遺跡（奈良・平安）・岡本四位館跡（中世） 30法仏南遺跡（弥生） 31米永シキシロ遺跡（平安） 32道村遺跡（弥生～平安） 33平木B遺跡（奈良・平安） 34平木A遺跡（弥生） 35平木C遺跡 36中相川遺跡（弥生） 37中相川1・2号墳（古墳） 38相川館跡（室町） 39東相川遺跡（古墳・中世） 40御手洗川遺跡（古墳） 41御手洗川B遺跡（弥生） 42野本遺跡（弥生） 43浜相川D遺跡（弥生後期） 44浜相川C遺跡（弥生） 45浜相川E遺跡（弥生後期） 46浜相川遺跡（不詳） 47浜相川相川新遺跡（弥生～古墳） 48浜相川B遺跡（弥生・古墳） 49相川新遺跡（弥生・古墳・中世）

川E遺跡、浜相川遺跡などがあげられ、古墳時代前期まで集落の継続性が認められる。また、水利の良い、砂丘地の内側に広がる低湿地や扇端部の開発が急速に進行するのも、この時期である。本遺跡付近では、^{みたらし}御手洗川B遺跡、^{なかそらご}中相川遺跡、平木A遺跡などがあげられよう。さらに本遺跡の南に位置する法仏遺跡の調査では、この時期の大規模集落が確認されるとともに、法仏式土器は当該期の標識土器にされている。

古墳時代になると、安原海岸砂丘の形成で前期以後の泥炭層遺跡は消滅する⁽¹⁾。一方で、砂丘地の後背低湿地や扇端部の遺跡は継続して確認できる。^{ひがしきうち}東相川遺跡、^{みたらしがわ}御手洗川遺跡などが、それに該当する。しかし、古墳の検出例は少なく、中相川古墳が知られているにすぎない。この古墳は、松任市中相川の加茂神社境内にあった径10～15mの2基の円墳で、古墳の主体部は失われたが、その出土遺物から古墳時代中・後期のものと考えられている。

ところで、弥生時代から古墳時代までの遺跡分布を概観すると、水利の便にしたがって徐々に開発が進行してはいるが、手取川扇状地の扇央稜線（松任市徳光町と扇頂とを結ぶライン）付近以南の地域の遺跡分布はほとんど見られない。以後の手取川の河道変遷等が急であり、継続して生活の拠点を営むことが不可能であったのだろう。

古代

弘仁14（823）年6月に加賀国が立国されると、石川郡と能美郡とが手取川扇状地地域の管郡として成立する。所属していた郷に関しては、本遺跡付近は「^{のみ}和名類聚抄」記載郷のうち笠間郷・棕部郷・中村郷の中間に位置するとみられるため、明確な郷比定は不可能である。なお、近辺の式内社には、松任市笠間町の笠間神社、同市村井町の本村井神社があてられている。

本遺跡付近の奈良・平安時代の遺跡としては、北安田北遺跡・法仏遺跡があげられる。この両遺跡とも、奈良時代の竪穴住居、平安時代の掘立柱建物が多数検出されており、県内有数の集落遺跡である。一部未報告があるが、両遺跡の建物跡の総数は約200棟にも及び、この近辺の基幹集

落と位置づけられている。また、その付近には、ほぼ同時期の平木B遺跡、源波遺跡、道村遺跡、中村ゴウデン遺跡があつて、小規模な集落跡として確認されている。

8世紀後半になると様々な要因で農民の階層分化が生じ、班田制の崩壊とともに富裕農民が没落農民の労働力を吸収して、墾田を拡大し中央貴族と結ぶものさえ現れる。国司も官物の中央納付の請負う立場に過ぎなくなる。この時期になると一般に国家的勧農は終局を迎える。在地諸階層による比較的小規模な再開発に移行する段階に入る。そして国家機構に依存して開発経営を行ってきた初期荘園も、この時期に衰退している。ただ、上記遺跡の集落の盛衰が、そうした文献史学の一般的な成果といかなる関係となるかは、今後の検討課題となろう。また、文献史料が少ないため、発掘調査で検出した集落の位置づけを「和名類聚抄」の郷記載に依拠して行う場合が多いが、その編纂時期は10世紀前葉であり、無批判に利用すべきでないと思う。

中世

平安時代に入ると、国司として地方に下った中央貴族は、国司権能を生かし、あるいは地方豪族との婚姻を通して、武力・経済力を結集して在地に勢力を張るようになる。所謂、武士団の形成である。これらの階層が、荒廃した耕地を再開発する強力な担い手になる傾向が強い。浅香年木も、手取川扇状地では、一旦荒廃した条里制施行地区内の水田を在庁・郡司層が再開発し、私領化したケースとしている^②。こうした領主には、「芋粥」の説話で知られる藤原利仁の後裔と称する加賀斎藤氏があげられる。斎藤氏は林氏と富樫氏とに分流して特に加賀国内で発展を遂げる。徳光遺跡付近では前者の一族の相河氏・安田氏が確認できる。このほか、道君の系譜を引き、白山社神主の上道氏一族である宮保・米永・笠間・柏野氏が、近辺で勢力を有していたようである。宮保館跡の調査では、方形の堀で区画された館跡を検出しており、その時期が13世紀であることから、宮保氏の館の可能性を有する。手取川扇状地内には、こうした中世前期の氏族の館跡の伝承地はかなり存在するが、その多くは考古学上の実態が明らかでない。

中世前期の加賀で、白山社加賀馬場勢力は、特に比叡山勢力をその背景に得たことも手伝って、国司解任に及ぶことであった^③。したがって、加賀国内の有力氏族はその一族を白山社に入れて関係強化を図ったほどである。本遺跡の南は、前述の上道氏の一族の名字の地が集中し、白山社領が散在している。また、『白山之記』には小河に小白山社があつて「国之八社」の一つとして白山「惣門」の所在地であったという^④。このほか、近年発見された「医心方紙背文書」には、大治2(1127)年に「小川津」の存在が確認できる^⑤。小川遺跡・小川新遺跡の調査では、主として15世紀後半から16世紀にかけての遺構遺物が確認され、小白山社旧跡の伝承地も現存している。このほか12世紀前半の遺物も検出しており、文献上の「小川津」が、この遺跡近辺に位置しているであろうことは、充分うかがえる。

延徳3(1491)年、冷泉為広は越後への途中、徳光遺跡付近を通過している。その旅程は「ミナト河—テフヤーエナミヂーカサバ—宮ノホウ—ヤスダ—マツタウ」^⑥である。この経路は通称木曽街道にほぼ合致する。宮保光明寺遺跡の調査では、存続時期が明確でないが、その道が伝承通り確認されている。中世の道の本格的検討は、これまでなされていないが、手取川扇状地においては、河口部にて旧手取川を渡る木曽街道と、河口部より約3km上流で渡り近世に本格的

に整備される北国街道ほっこくかいどうとが、主たる道であったと考えられている。このほか、鎌倉時代後期の正応4(1291)年の一遍の旅路は、今湊(石川郡美川町湊に比定)・藤塚(美川町中心部に比定)を経て、「小川といふ名のミにして岩高く瀬早き大河」を渡って宮腰(金沢市金石町に比定)に至っている^⑦。『源平盛衰記』などが同様の経路を記しており、海岸線沿いが道として意識されていたようである。さらに日本海への窓は、いずれも文献上確認できる手取川の旧河道、すなわち小川・大慶寺河・湊河の河口に形成されていたであろうと考えられる。そのうち港の名称が確認できるのは、今湊・藤塚と小川であるが、その実態に関しては文献上も考古学上も明確でない。

長享2(1488)年、守護富樫政親を倒した一向一揆は、室町後期から戦国時代の加賀では欠かせない要素である。その背景には、在地土豪層の地縁的結合である「組(与)」とその郡単位の連合体たる「郡」の実力向上があった。さて、中世の徳光聖光寺遺跡遺跡付近は、石川郡のうち西縁(松本)組か松任組の領域であったと考えられるが、明確にはどちらとも判断しかねる。西縁組の旗本の館の伝承地が笠間兵衛家次館跡であるが、考古学上は不明である。このほか一向一揆関係では宮保聖興寺が16世紀から文献上確認できる。この寺の伝承地が本書の徳光聖興寺遺跡であるが、伝承の基礎となつた寺伝は「天文日記」(本願寺法主証如の日記)などと矛盾する点も多く、その内容を単純に充てることはできない。

この他の中世遺跡には宮保光明寺遺跡や賢徳寺跡などがあげられる。宮保光明寺遺跡は、発掘調査で、土坑から16世紀代の瀬戸・美濃焼や越前焼などが出土しており、「北越太平記」に天正5(1577)年上杉謙信によって焼払われた南禅寺末寺の光明寺との関係が注目される。また、その地から明治初め頃に仏具等が発見され、明治末の耕地整理の際に多くの灯籠などが出土したといわれる^⑧。賢徳寺跡は発掘調査によって堀跡が検出されている。

註

- (1) 藤則雄「砂丘・埋没林」『金沢周辺の第四系と遺跡』北陸第四紀研究グループ1975。
- (2) 浅香年木「古代における手取川扇状地の開発」『古代地域史の研究』法政大学出版局 1978。
- (3) 安元2(1176)年国司目代が白山社中宮八院の鴨川湧泉寺を焼打ちにした事件が発端となり、ついには、比叡山延暦寺の強訴によって国司解任にまで及んだ。
- (4) 金沢大学日本海文化研究所『白山史料集 上』石川県図書館協会 1979。
- (5) 加能史料編纂委員会『加能史料 平安Ⅳ』石川史書刊行会 1989。
- (6) 小葉田淳「冷泉為広卿『越後下向日記』と加賀の旅路」『日本歴史』472 1987。この記録は地名等の錯綜のほか、通過したのか遠望したのか判別不能な部分があるが、中世の代表的交通路を示すものであろう。
- (7) 「遊行上人縁起絵」『新集日本絵巻物全集 23巻』角川書店 1979。
- (8) 『宮保の歴史』松任市宮保公民館 1971。

参考文献

- 角川日本地名大辞典編集委員会『角川日本地名大辞典 17石川県』角川書店 1981。
手取川七ヶ用水誌編纂委員会『手取川七ヶ用水誌 上巻』手取川七ヶ用水土地改良区 1982。
なお、このほかに多数の発掘調査報告書を参考にしたが、紙幅の都合でその書名を記すことができなかった。

第2章 調査に至る経緯と調査の実績

松任市は金沢市西方のベッドタウンとして人口増加が続いているが、徳光町は松任市街地の北東、日本海に臨む戸数約150戸の農村である。最近は温泉等も掘削されて新たな姿を現しつつある。

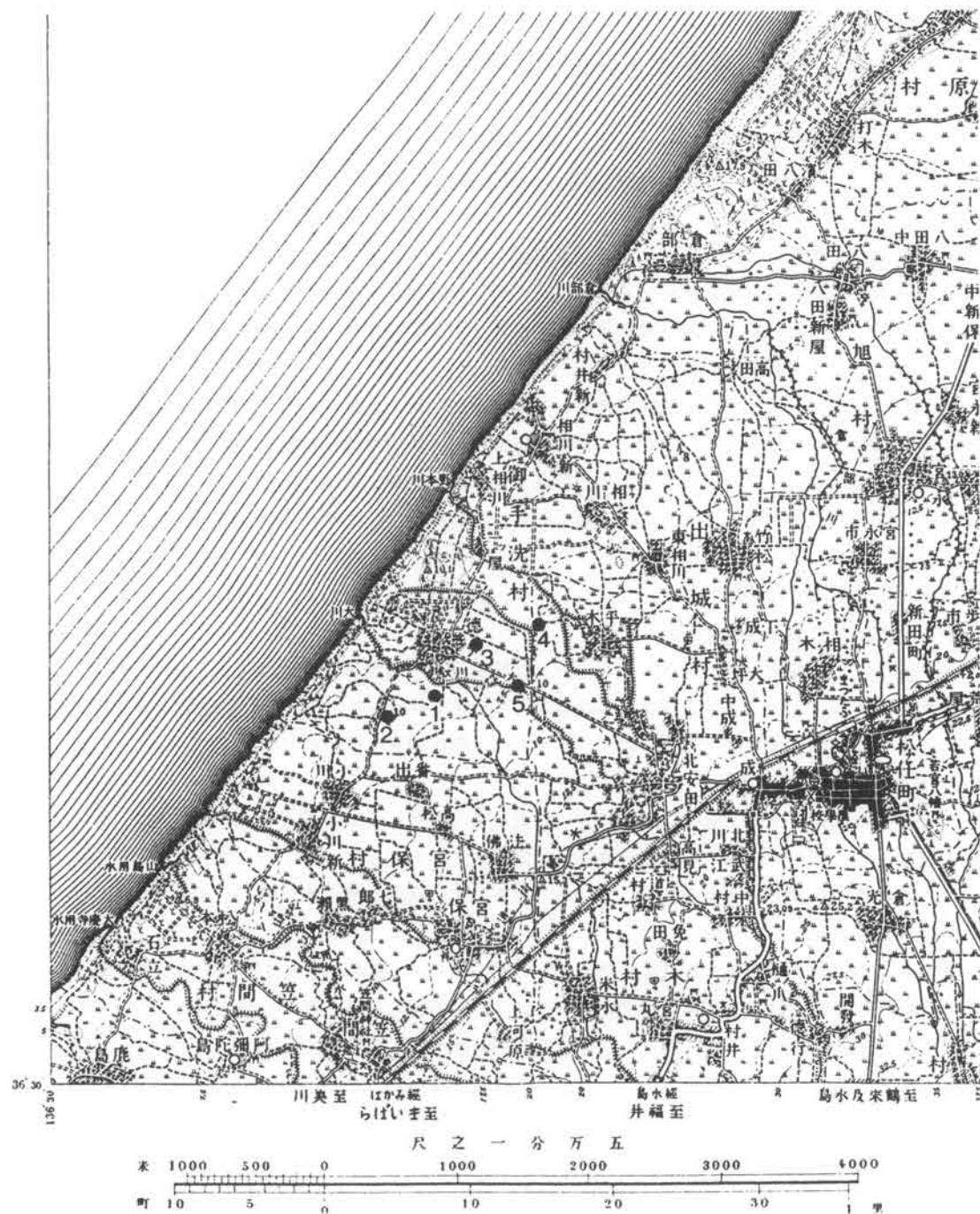
徳光町地内で約73戸を対象とした農業基盤整備事業が具体化してきたのは昭和58年度からである。事業は石川県農林水産部耕地整備課施行の県営ほ場整備事業御手洗・出城地区徳光工区として採択されたが、石川広域農道から海岸砂丘までの間の地域では一部高度利用集積事業徳光地区としての基盤整備も並行して進められた。

徳光町周辺には石川広域農道建設に關係して発掘調査が行なわれた徳光ヨノキヤマ遺跡など多くの遺跡の所在が知られていたため、県耕地整備課・松任土地改良事務所の依頼を受けた石川県立埋蔵文化財センターは事業予定地の埋蔵文化財分布調査を前年度に実施して遺跡の所在とその分布範囲を把握するとともに、遺跡が存在する田面については分布調査結果をもとに盛土工法を取って、取り合えず地下に埋没させる形で保存することとした。しかし、止むを得ず埋蔵文化財が影響を受ける排水路予定地については、他地域でも実施していると同じように原則として幅約2mで発掘調査を実施した。

昭和60～62度に最も工事が進行したが、石川広域農道から海側の工事区域では明瞭な遺跡の存在を確認することができず、調査は広域農道から東側に限られていた。NTT株売却益等の投入もあって当初計画より早く進行したが、分布調査と発掘調査に忙殺される日々であった事が思い出される。

分布調査と発掘調査の一覧については10・11頁にまとめたが、分布調査の結果と工事計画のすり合わせの結果、排水路予定地を対象に発掘調査を実施することとなり、昭和61年度から平成元年度にかけて5遺跡の調査を行なっている。調査費用は県耕地整備課の負担と県教育委員会の文化庁補助事業として実施した。

徳光古屋敷遺跡、徳光聖光寺遺跡、徳光ジョウガチ・シロド遺跡、平木D遺跡、北安田北遺跡の5遺跡の調査成果は第3章以下に詳述されているが、何れも遺跡の極く一部を垣間見た程度であり、将来的には地下に埋もれている遺跡の調査を進めることができれば、更に大きな成果を得られるに違いない。その意味でわずか2m幅の調査とはいえ、調査の資料を生かして生けるものと思われる。調査の実施にあたっては、県松任土地改良事務所、徳光工区長浜野久司氏、松任市徳光町・相川町・相川新町・宮保町の有志の協力を得ている。記して感謝したい。



第4図 遺跡の位置(1/5,000)

- | | |
|-------------|----------|
| 1 德光古屋敷遺跡 | 4 平木D遺跡 |
| 2 德光聖興寺遺跡 | 5 北安田北遺跡 |
| 3 德光ジョウガチ遺跡 | |



第5図 調査区の位置

分布調査の一覧

No.	1	箇所	松任市徳光町地内	原因	県営は場整備事業
関係機関	耕地整備課	調査対象面積	150,000m ²	調査方法	試掘
調査期間	昭和59年12月5日	遺跡の有無	無	推定される遺跡の面積	0 m ²
主な確認事項	予想される時期と性格		依頼者への回答要旨		
調査対象区域内には埋蔵文化財は確認されなかった。				事業予定区域内に埋蔵文化財は確認されなかったので、計画通り工事を実施しても差しつかえない。	

No.	2	箇所	松任市徳光町地内	原因	県営は場整備事業
関係機関	耕地整備課	調査対象面積	180,000m ²	調査方法	表面観察と試掘
調査期間	昭和60年10月7日～60年10月11日	遺跡の有無	無	推定される遺跡の面積	40,000m ²
主な確認事項	予想される時期と性格		依頼者への回答要旨		
調査対象区の一部で遺物包含物・遺構を確認した。		古墳時代～中世の集落遺跡。		事業予定区域内に埋蔵文化財が存在しており、遺跡の保護について協議されたい。	

No.	3	箇所	松任市徳光町地内	原因	県営は場整備事業
関係機関	耕地整備課	調査対象面積	350,000m ²	調査方法	試掘
調査期間	昭和61年9月30日～61年10月9日	遺跡の有無	有	推定される遺跡の面積	約20,000m ²
主な確認事項	予想される時期と性格		依頼者への回答要旨		
徳光聖興寺遺跡を確認。		古墳時代と中世の集落跡。		事業予定区域内に埋蔵文化財が存在しており、遺跡の保護について埋蔵文化財センターと協議されたい。	

No.	4	場所	松任市徳光町地内	原因	県営は場整備事業
関係機関	耕地整備課	調査対象面積	50,000m ²	調査方法	試掘
調査期間	昭和62年8月3日～62年9月21日	遺跡の有無	有	推定される遺跡の面積	約27,000m ²
主な確認事項	予想される時期と性格		依頼者への回答要旨		
調査対象区域の東側で遺物包含層の広がりが確認された。		弥生・奈良時代の集落跡		埋蔵文化財が存在するため工事計画等について埋蔵文化財センターと協議されたい。	

発掘調査の一覧

No.	1	遺跡名	徳光古屋敷遺跡	所在地	松任市徳光町地内				
原因	県営ほ場整備事業		関係機関	耕地整備課	面積	約500m ²	経費		
調査期間	昭和61年5月6日～7月5日		担当者	湯尻 修平	時期	古墳・平安			
主要 遺構		主要 遺物			遺跡の性格				
古墳時代後期の竪穴住居跡2棟、溝2		須恵器、土師器、土師質土器、中世陶器			古墳時代後期の集落跡。凹部地形に投棄された須恵器壺は県内でも古式の部類に入る。竪穴住居跡も一部の調査にとどまるが、当該期の住居跡としては希少な調査例である。				

No.	2	遺跡名	徳光聖興寺遺跡	所在地	松任市徳光町地内				
原因	県営ほ場整備事業		関係機関	耕地整備課	面積	1,200m ²	経費		
調査期間	昭和62年10月16日～12月15日		担当者	越坂 一也	時期	中世			
主要 遺構		主要 遺物			遺跡の性格				
中世の柱穴群、井戸、土坑、溝などを検出。これらの遺構は約200m離れて確認された幅3mの堀の区画内に存在する。		中世陶磁器（白磁、青磁、瀬戸、美濃、越前、珠洲など）井戸枠、折敷、漆器、箸			中世の集落遺跡。集落の周囲に堀をめぐらしており、中世有力者の居館跡あるいは伝承にある聖興寺に関係した遺跡と推定される。				

No.	3	遺跡名	徳光ジョウガチ・シロド遺跡	所在地	松任市徳光町地内				
原因	県営ほ場整備事業		関係機関	耕地整備課	面積	300m ²	経費		
調査期間	昭和62年10月30日～12月18日		担当者	湯尻 修平	時期	弥生・中世			
主要 遺構		主要 遺物			遺跡の性格				
中世の溝と水田跡の一部、弥生時代前期の溝1条と土坑6基		土師質土器、弥生土器			中世の水田跡と弥生時代前期の集落跡。弥生の資料は貴重なものである。				

No.	4	遺跡名	徳光遺跡(平木D遺跡に包括)	所在地	松任市徳光町地内				
原因	県営ほ場整備事業		関係機関	耕地整備課	面積	700m ²	経費		
調査期間	昭和63年7月7日～7月26日		担当者	垣内光次郎	時期	弥生時代			
主要 遺構		主要 遺物			遺跡の性格				
土坑3基、溝14条、ピット数。		弥生土器、石器。			弥生時代の小規模な集落遺跡の周辺部域に該当するものと考えられる。				

No.	5	遺跡名	徳光遺跡(北安田北遺跡)	所在地	松任市徳光町地内				
原因	県営ほ場整備事業		関係機関	耕地整備課	面積	480m ²	経費		
調査期間	平成元年9月22日～10月31日		担当者	川畠 誠	時期	古墳・平安時代			
主要 遺物		主要 遺物			遺跡の性格				
掘立柱建物1棟、溝数条。		須恵器・土師器。			古墳時代前期・平安時代の集落址。				

第3章 昭和61年度の調査（徳光古屋敷遺跡）

第1節 調査の概要

県営は場整備事業御手洗・出城地区徳光工区にかかる埋蔵文化財発掘調査は、他の事業工区と同様に前年度に実施した分布調査の結果をもとに、田面は盛土施工とし、掘削によって埋蔵文化財に影響が生じる排水路に限定してその対象とした。県松任土地改良事務所と協議を進め、昭和61度事業地内では3箇所で発掘調査を実施した。調査地の通称名を取って古屋敷遺跡、ジョウガチ遺跡・シロド遺跡と呼称した。

徳光古屋敷遺跡は、千代野団地の西側に位置する古墳時代の集落遺跡で、調査区は幅2m延長250m、約500m²を対象に発掘調査を実施した。調査区割は大川から南へは場備工事前の水田ごとに1～13区の区画を設定し、5月6日から7月5日まで作業を実施した。作業は湯尻の担当のもと安宅 努・横山貴広両氏の援助を得た。実質作業期間は延べ32日間である。

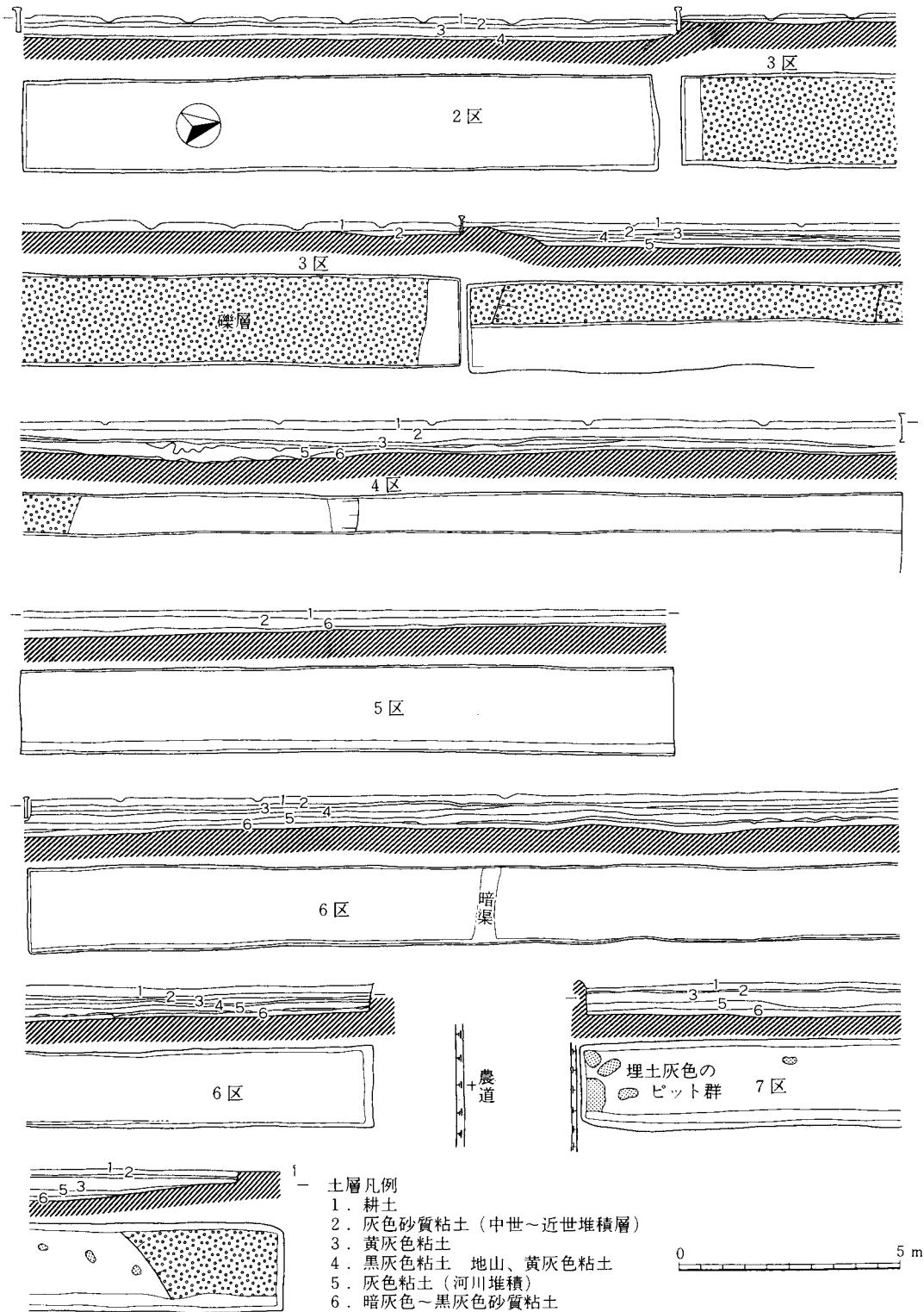
発掘作業は千代野団地から南側へ進行したが、キャベツが栽培されている畠があったため、その収穫にあわせて調査を追いかけざるを得ず、結果としてキャベツがあった場所で調査の後半に堅穴住居が確認されたことは皮肉なことであった。千代野団地に近い1～4区あたりは元の「大川」の河道跡で耕作土下の灰色～灰褐色をした粘土層からは中・近世の土器片が出土した。7区付近から基盤層も安定して、8区と9・10区で堅穴住居跡の一部を確認し、12区では幅約6mの河跡ないしは凹みに、古墳時代後期の須恵器がまとまって、廃棄されたような状態で出土している。13区から北側は、元の川跡である礫層となって遺跡は確認されていない。

第2節 遺構

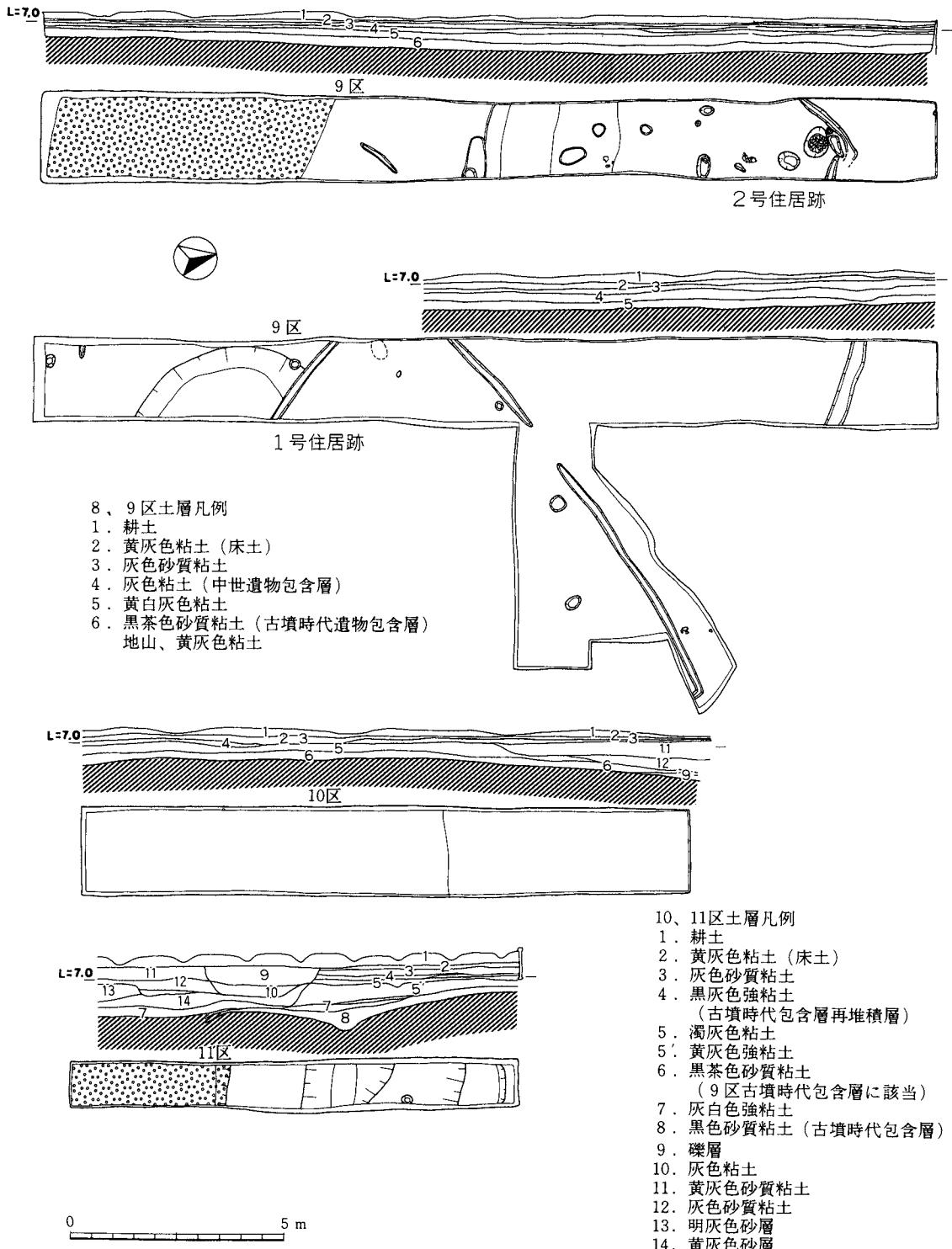
今回の調査は幅2mという狭い範囲での調査であったが、8区と9・10区で古墳時代後期の堅穴住居跡の一部を一箇所ずつ確認し、9・10区では一部拡張して堅穴規模の把握に努めた。12区では河跡ないしは凹みに廃棄された状態で古墳時代後期でも古い段階の須恵器がまとまって出土している。いずれもまだ県内で調査例の少ない時期の遺構であり、出土土器とともに良好な資料であると言えよう。（図版3～5参照）

7区より南側での基本的な層序は、①耕作土（約20cm前後）、②灰色砂質粘土（10～20cm中・近世堆積層）、③黄白灰色強粘質土（20～30cm）、④黒茶色砂質粘土（約20cm前後）、⑤黄灰色粘土（地山）となって地表から80～100cmに基盤層が存在している。12区では多くの土器が出土した川跡ないしは凹みは、古墳時代後期以降も凹み地形を維持していたと推定され、地表から約120cmで地山となって南側へ下がっていた。③黄白灰色強粘質土の上に灰褐色砂質粘土や礫層が堆積して凹みの痕跡を示していたのである。

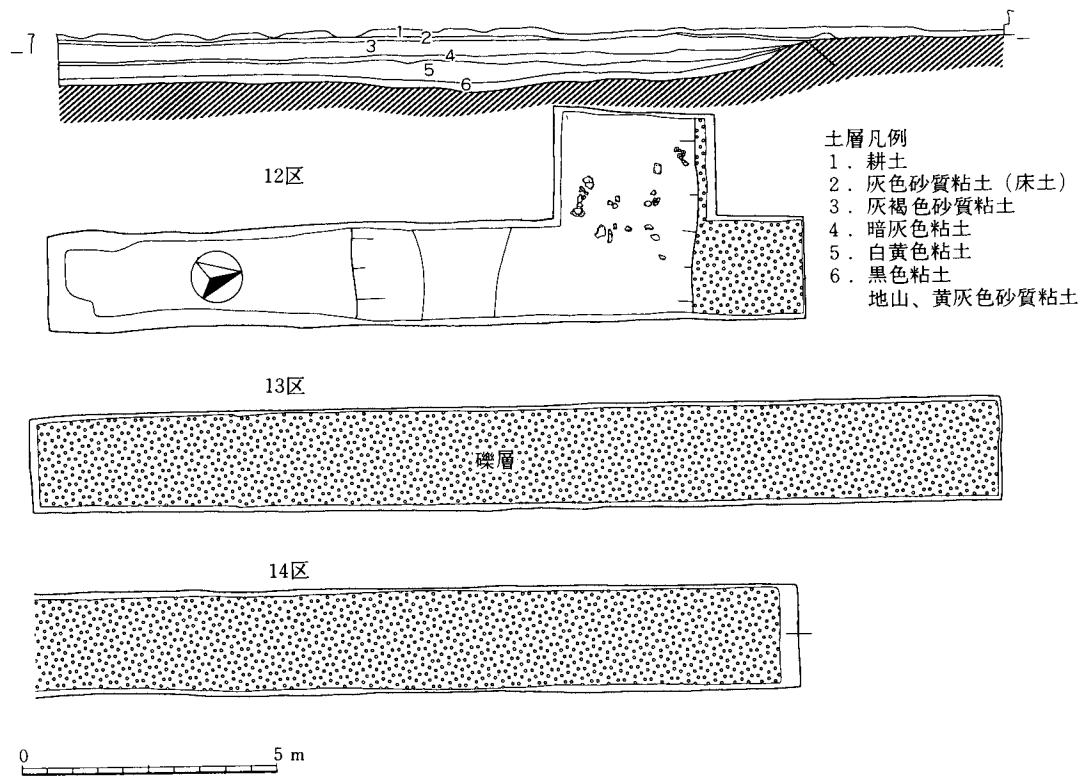
9・10区の堅穴住居跡は1号堅穴としたが、調査区でハの字型に広がる幅20cm前後、深さ約5cmの浅い溝2本が検出され、その周辺から土器が多く出土した。このため、地権者の了解を得て



第6図 德光古屋敷遺跡遺構実測図(1)



第7図 徳光古屋敷遺跡遺構実測図(2)



第8図 德光古屋敷遺跡遺構実測図(3)

一部西側へ拡張して一方の溝を追いかけて見たが、約10m伸びたところで北西に曲がって続いていた。溝の北西側の床面にあたる場所では多くの須恵器や土師器が出土し、第10～13図に掲載した。第1号竪穴住居跡を1棟の竪穴と判断して調査を進めたが、整理を進める段階で拡張区に伸びる溝が一部で途切れており、しかも溝の方向が若干ずれているように見えることと、一辺10mにも達することが古墳時代後期の竪穴住居跡としては大き過ぎるようで、ひょっとしたら偶然2棟の竪穴が重なって存在した可能性もあるのではないかと考えたが、これ以上の確証もなく1棟の住居跡として報告する次第である。

第2号竪穴住居跡は8区の南側で一部を確認したが、調査区の北1/3は中・近世の河川の氾濫によって攪乱されて不明であった。竪穴の周囲を巡る溝の一部がくの字形に検出され、近くの浅いピット内に第13図46に示した甕がつぶれた状態で出土し、第13図40の須恵器杯蓋（杯身になる可能性もあるが）がその下から出土した。いずれも住居跡の時期を示す資料である。付近から多くの炭層や焼土粒が点々と散布する状態で確認されており、近くの調査区域外に竈等の施設が存在していることを予測させた。

12区では川跡ないしは凹みに廃棄された状態で古墳時代後期でも古い段階の須恵器がまとまって出土している。幅約6m、基盤層から約80～1m下がる緩やかな凹みであるが、土層の堆積状況から古墳時代後期以降も凹み地形を維持していたと推定される。第8図に示したように凹みの北側斜面に捨てられたような状態で多くの須恵器・土師器が出土した。第9図1～6に示した土器が該当し、6はほぼ完形に復元することができた。同様な遺構は、本書第7章で川畑が報告する北安田北遺跡Bトレーナー10区沼状地形から須恵器甕が一括して出土しており、報告者は6世紀代の水辺祭祀に関係した行為を示す事例と見ている。その意味で12区の川跡ないしは凹みに廃棄された状態で出土した本例も同様な行為を示すものとして注目したい。調査区域外に広がる遺跡の調査が将来、行われるようなことがあれば、その実態もより鮮明に把握することができる遺跡であることは、言うまでもない。

第3節 遺物

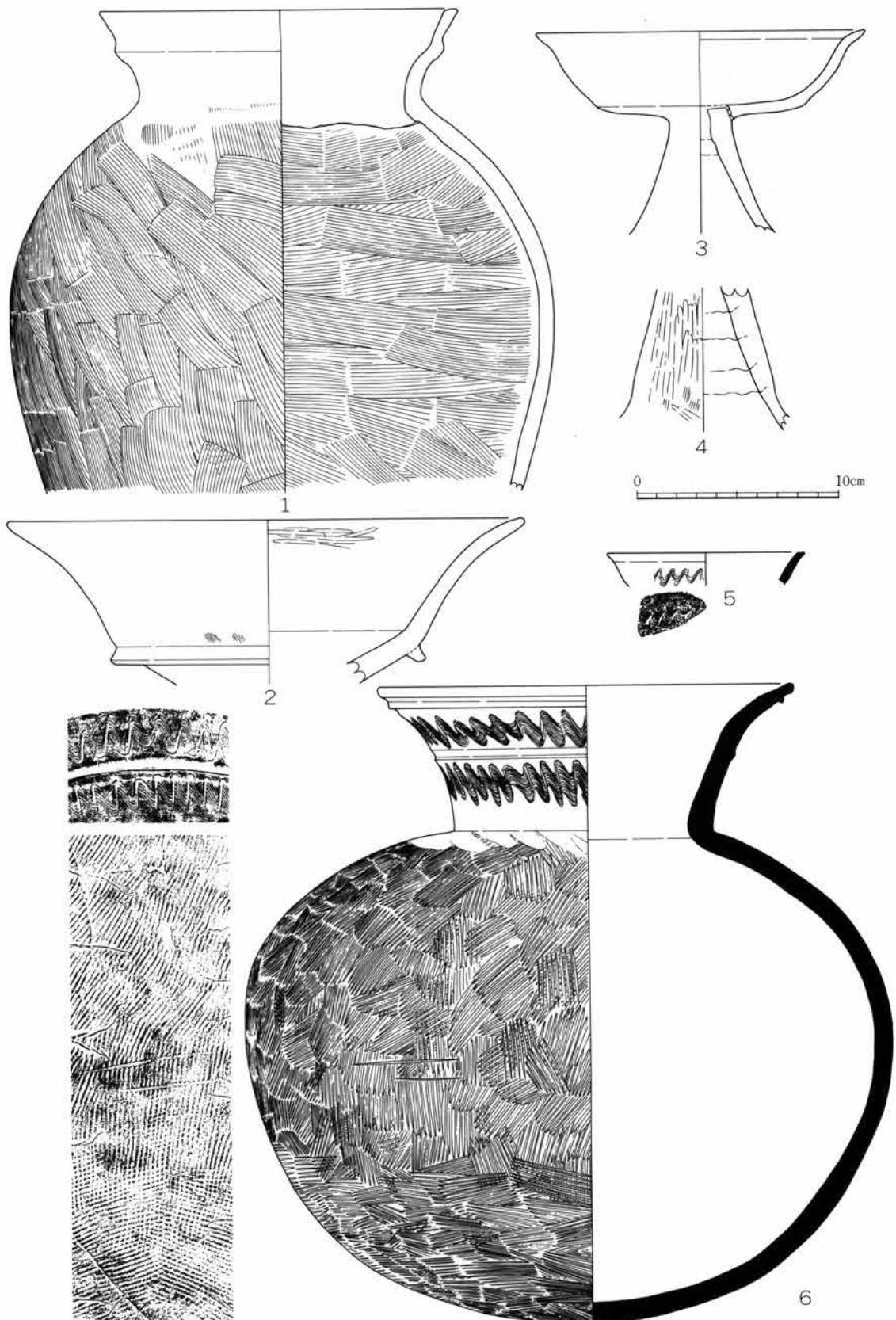
今回の調査によって出土した遺物は第9図～第16図に示した。狭い調査範囲の割りにはまとまった遺物が出土した。整理箱に12箱の遺物量となっている。第9図と第13図44・45は12区の川跡ないしは凹みの北側斜面に廃棄されたような状態でまとめて出土した土器である。第9図1は口径17.7cmの有段口縁の甕で、体部は荒い刷毛調整が行われている。2の高杯は外面に突起状の帯を貼っている。内面は研いて丁寧に作っている。3は杯部が緩やかに立ち上がる高杯で、口径約10cmを測る。5は口縁部に4条の波状文を描いた小型の壺類の口縁。6は斜面に分散して出土したが、ほぼ完形に復することができた須恵器の壺。口径20.7cm、器高32cmを測る。口縁部に11条単位の波状文を二段に付け、球胴部外面は細かい平行叩き、内面は叩きを丁寧に擦り消している。断面はセピア色を示し、古式須恵器の特徴を備えており、おそらく陶邑産の製品であろう。第13図44・45は高杯の脚部。45は底径14.8cmを測る。脚台は三角形に広がり、端部はハの字形を開いて、内面に積み上げの痕跡を残すが丁寧な整形をしている。第9図1の甕、2と13図45

の高杯、6の壺等は古い様相を示しており、5世紀末から6世紀初頭頃に比定されよう。3の高杯はこれよりも若干新しいと思われる。

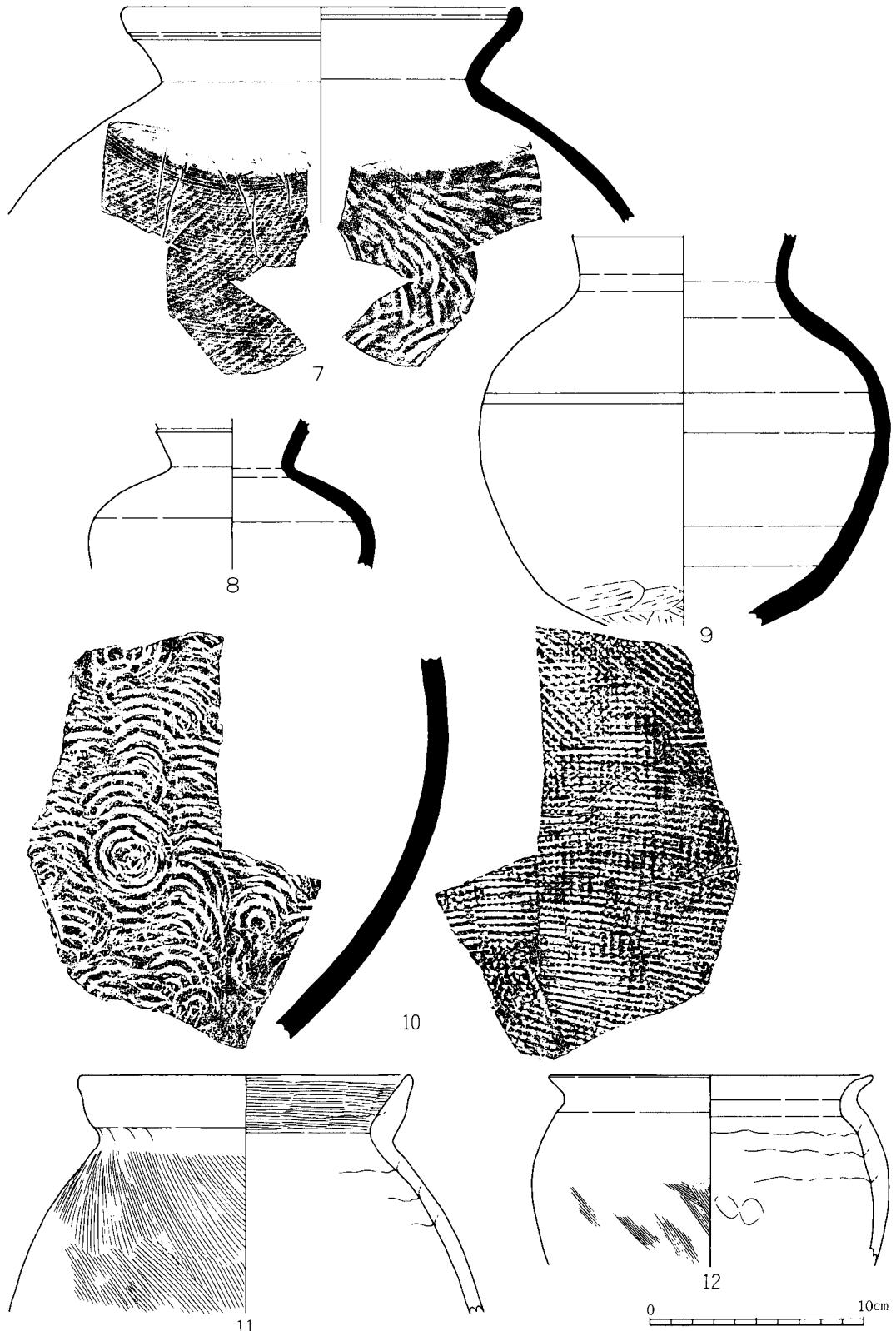
第10図7・12、第11図14・15～第13図38・39・46は9・10区の1号竪穴住居跡とその拡張区から出土した土器で、住居の床面や、地山直上から出土したものまとめた。第10図7は口径18.6cmを測る須恵器の壺で口縁は丸みをもって肥厚する。灰色で焼成はやや甘い。8は頸の破片で頸部細かい波状文がある。9は丸底の壺で口縁部を欠くが、器高20cm程度となろう。肩に自然釉が付着し、体部と頸部に1条ずつの弱い凹が巡る。11はくの字口縁の土師器壺。11は口径16.4cmを測り、体部外面は荒い刷毛調整がある。第12図17は口径19.6cmのゆるく開いたくの字形口縁の壺。肉厚の体部外面は下から描き上げた荒い刷毛調整が行われている。18～20、22～28はいずれもくの字に開く口縁をもつ壺の口縁部を集めたが、19、20、24、25のようにくの字形に折れて開くタイプと27のようにゆるく開くタイプ、22、28のように口縁端部を摘み上げて整形するタイプがある。第12図21、第13図38、39は平口縁の甌。21は14.9cm、38は32cm、39は24.6cmの口径を測る。第12図29～32は小型の碗。29・31のように口縁が開くものと、30・32のように内湾するものがある。29は口径10.6cm、器高約3.6cmを測り、内面は黒色処理がされている。33は丸く立ち上がる杯を持った高杯で、口径16.2cm、器高12.6cm、底径11.8cmを測る。胎土は良いが橙色をして柔らかく器面は磨耗している。34～37も高杯の脚部で、太めで36のように開脚するが、端部の開きは緩い。1号竪穴は6世紀後半頃の住居跡である。

第11図12・13と第13図42、43、46は8区の第2号竪穴住居跡床面からの出土。12は口縁が丸く外反する球胴タイプの壺。第11図13はほぼ完形に復元できた長胴壺で外面を細かい刷毛、内面を削って薄く仕上げている。口径19.4cm、器高33.8cmを測る。丸みのある底部底面に×印の範描きがある。また、珍しく火にかけた時の痕跡が丸く残っている。13は口径9.2cmの小型壺の口縁。16は口径約26cm、器高22.6cm以上の甌で底部を失っている。球状の体部に突出する把手が二方に付く。42は口径25.8cmを測る高杯の杯部。内面は丁寧に研かれ、黒色処理がされている。ピットからまとめて出土した。43もピットから纏まって出土したが、破片が揃わず大胆な復元となつた。口径18.8cmの口縁部はピットの中に逆さまになる状態で出土した。46は須恵器杯の破片で復元口径12cmを測る。43の壺の下から出土した。2号竪穴は7世紀前半の住居跡の一部である。

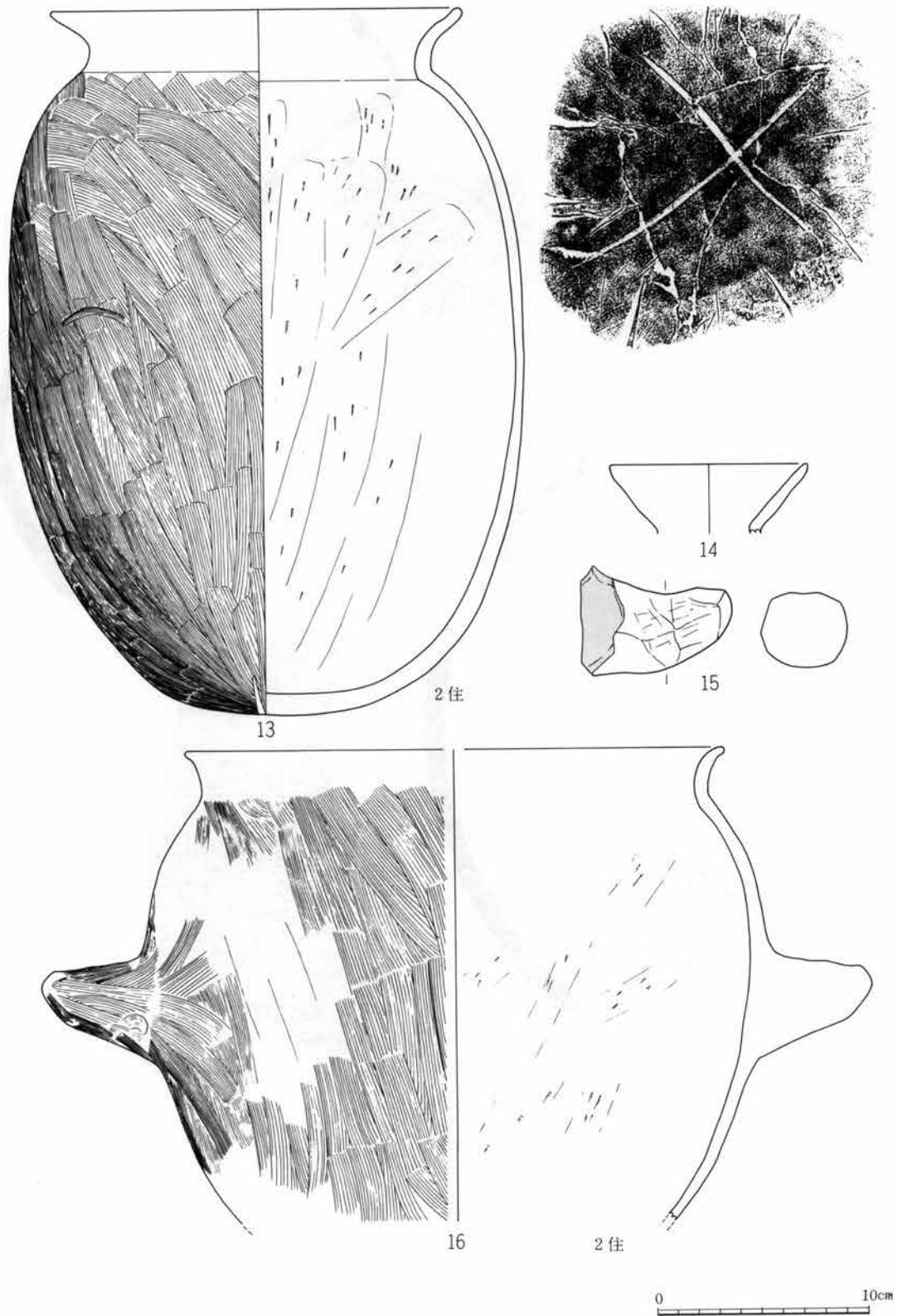
第13図41、43は6区でまとめて出土した土器の一部で、41は口径17.4cm、器高12.8cm、底径12.8cmの高杯で杯部は研ぎによる調整が行われている。43の高杯は杯部が丸く立ち上がり、口縁端部が肥厚する。口径14.6cm、器高11.6cm、底径11.5cmを測る。第14図47～56、第15図57～77、第16図78～82は7区～9区にかけての遺物包含層から出土した土器である。第14図47・48は須恵器の壺でも古式の様相を示す。47は8区北の礫層で出土し、復元口径25cmを測る。大きく外反する頸部には細かい波状文が突帯に挿まれて描かれている。体部の叩きは細く内面は消されている。48は9区の北端で出土。外反する口縁には1条の突帯が巡る。体部の叩きは内外面共に細く丁寧である。51の鉢または高杯の杯部と推定されるが、整形が丁寧でこれも古く感じられる。52～56は高杯の杯や脚部で、55は径7mmの円形の透しが有るがその数は不明（3方透しか？）。第15図57～70は土師器の壺で口縁部を中心を集めた。第1号住居跡の壺で見たように、くの字口



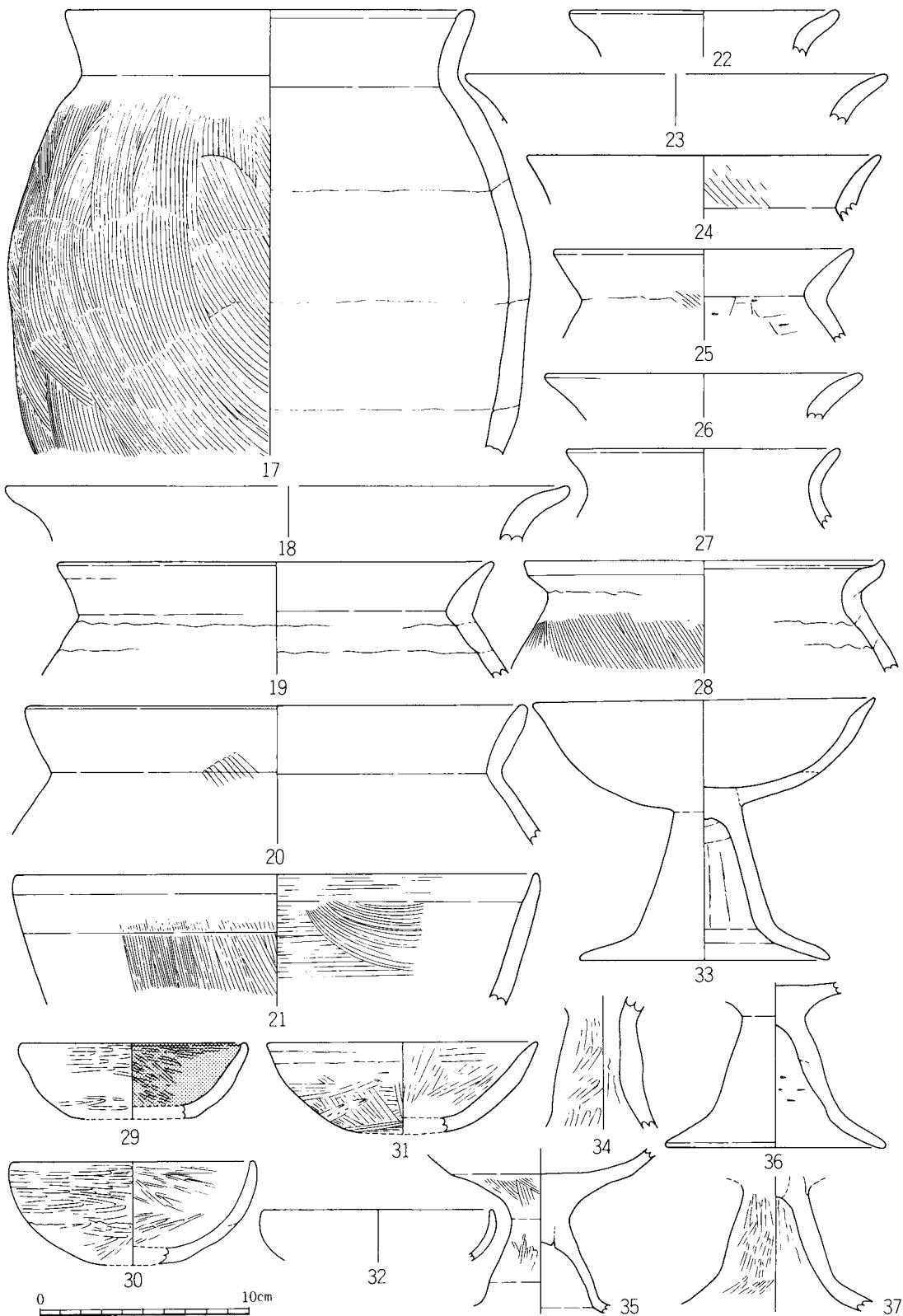
第9図 德光古屋敷遺跡出土遺物実測図(1)



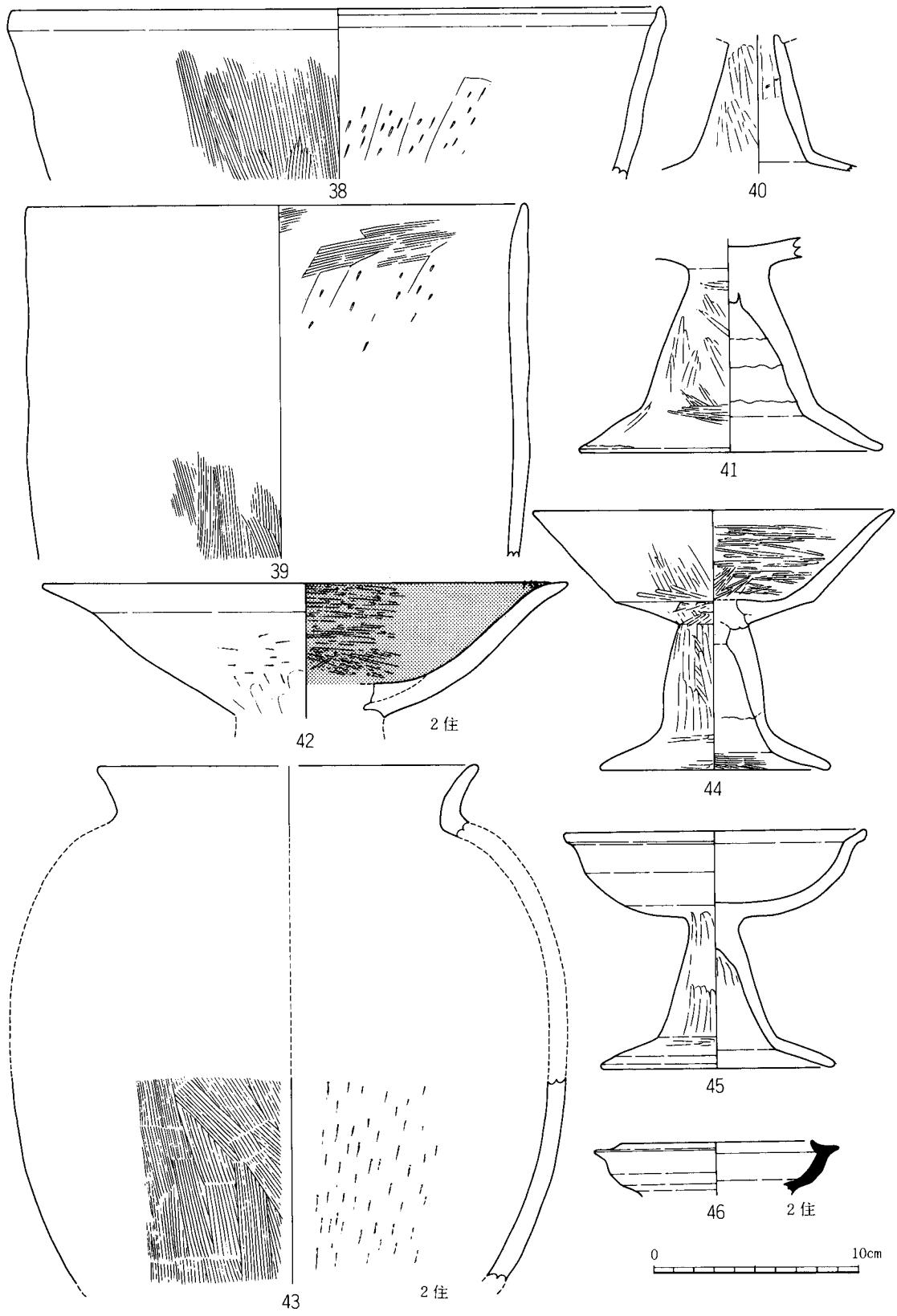
第10図 德光古屋敷遺跡出土遺物実測図(2)



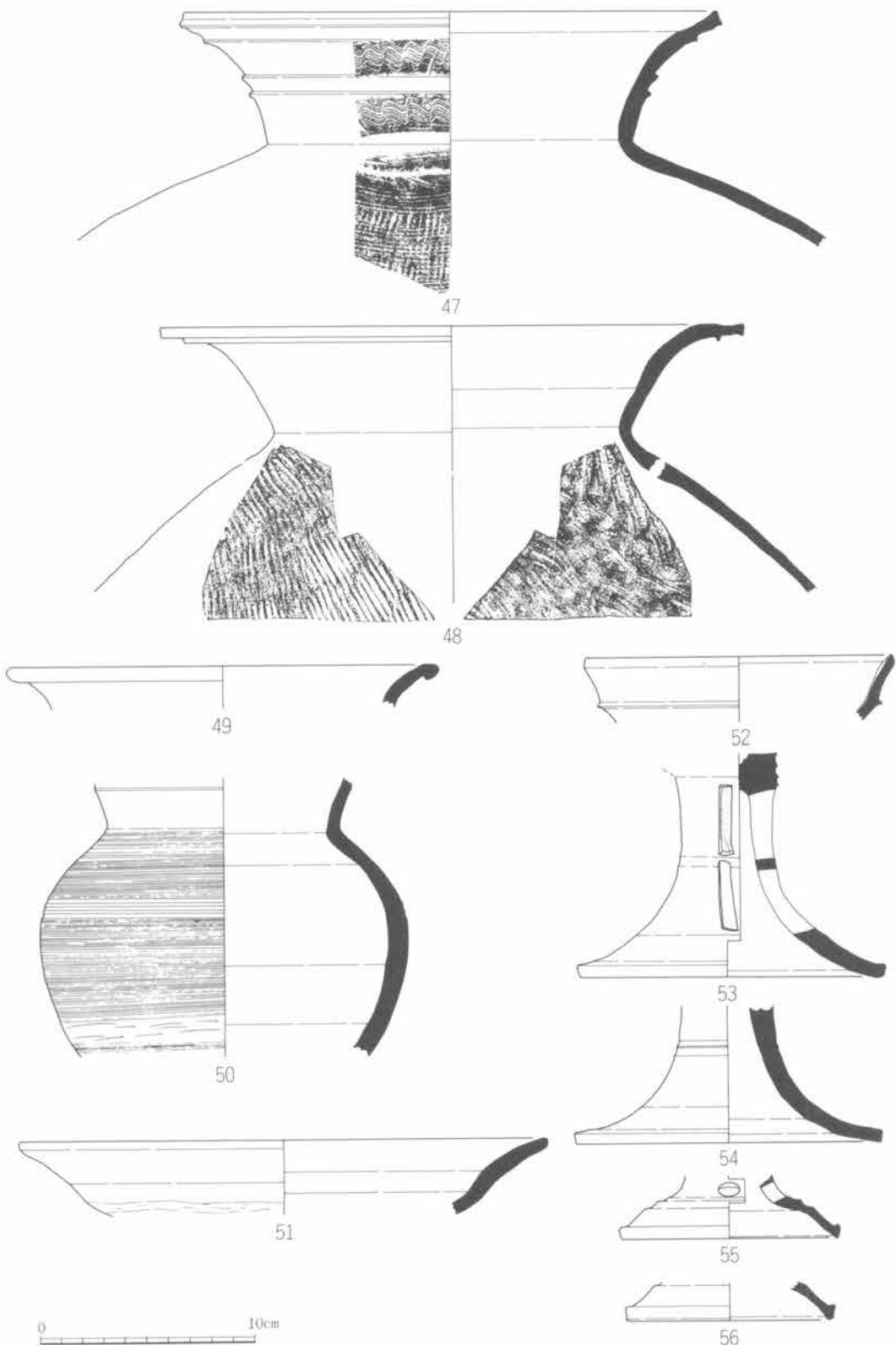
第11図 德光古屋敷遺跡出土遺物実測図(3)



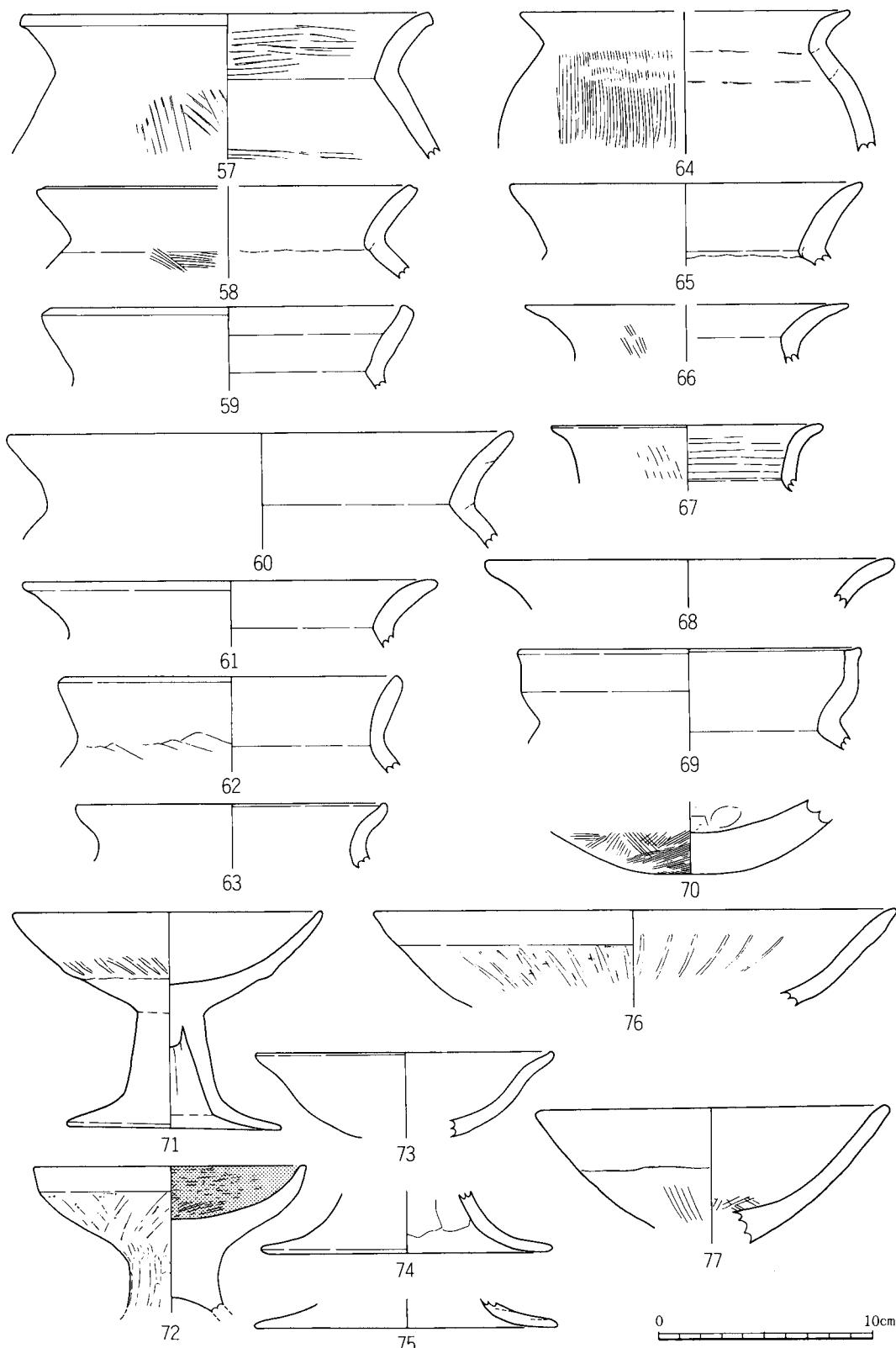
第12図 德光古屋敷遺跡出土遺物実測図(4)



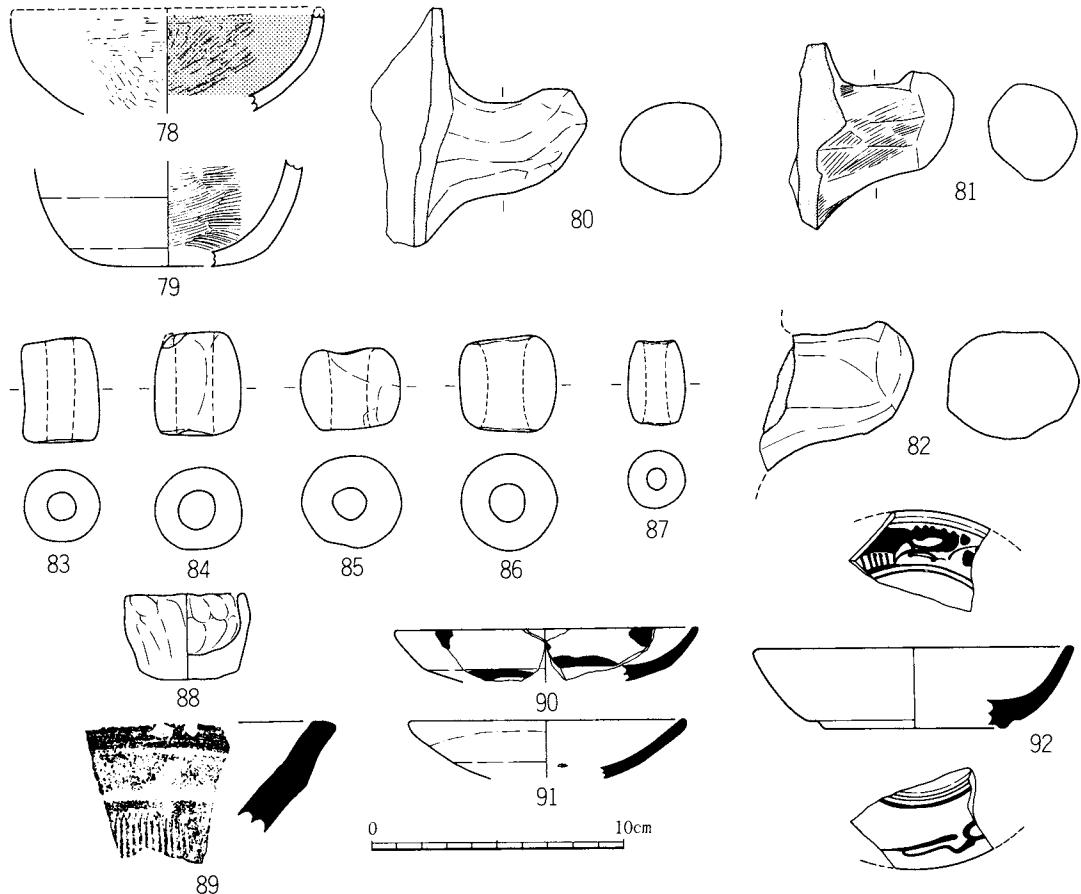
第13図 德光古屋敷遺跡出土遺物実測図(5)



第14図 德光古屋敷遺跡出土遺物実測図(6)



第15図 德光古屋敷遺跡出土遺物実測図(7)



第16図 德光古屋敷遺跡出土遺物実測図(8)

縁の甕も57～59のように端部に面を持つタイプと60・61・65のように端部を丸くするタイプがある。69は口径16cmを測る有段口縁の甕。71～77は土師器の高杯。71は杯部外面に接合の痕跡を止める。72は杯部内面は黒色処理がされ、76の杯部には暗文風の篦研ぎが行われいている。第16図80～83は甕の把手。88は土師器の手づくね土器で口径約4.8cm、器高3.4cm、底径3.6cmを測る。7区から出土。

以上の土器は、第14図47・48・51・55・56のように古式の様相を示し、6世紀初頭を下らない資料を含んでいるが、先述した住居跡から出土した土器群とともに、6世紀後半から7世紀初頭にかけての資料である。近接する松任市北安田北遺跡の調査によっても出土しているもの（松任市教育委員会『松任市北安田北遺跡Ⅱ』1990）、県内ではなお調査事例の少ない時期の資料である。

第16図83～87は土錘。80は34.9g、81は38.3g、82は34.4g、84は39.5g、87は13.7gを測る。89～92近世の陶磁器で、主に耕作土直下の灰色砂質粘土層から散発的に出土した。89は越前のすり鉢片。90・92は伊万里の染付けの小皿。

第4章 昭和61年度の調査Ⅰ（徳光聖光寺遺跡）

第1節 調査の概要

県営ほ場整備事業御手洗・出城地区徳光工区の昭和62年度施工予定地は、石川広域農道と徳光集落、千代野ニュータウンに囲まれた約35haを対象に計画が策定された。当該地に周知の遺跡である徳光聖光寺遺跡が所在ため、昭和61年9月30日から10月9日まで埋蔵文化財の分布状況を調べる分布調査を実施した。その結果、石川広域農道近くに中世の遺跡の存在が明らかとなつた。現在は枯れてしまつた一本の松が生えており、通称イッポンマツと呼ばれ、また以前から宮保にあったという聖光寺の跡であると言い伝えられてきた場所であった。分布調査の結果をもとに県松任土地改良事務所と協議し、2箇所の排水路予定地のうち掘削によって遺跡の保護に影響が生じる範囲、幅約2m、延長600m、延面積約1,200m²を対象に調査を実施することになった。発掘調査は当時県立埋蔵文化財センターに在職されていた越坂一也氏が担当者となり、宮本直哉氏が補助をした。発掘調査は、昭和62年10月16日に着手し、12月18日に完了した。遺跡の中心部に南北方向に長いトレンチを一本通した結果となり、溝や土坑、井戸などの遺構と多くの遺物が出土した。

調査区は石川広域農道に近い調査区を北から一本松横の農道までを第Ⅰ区、農道から南側を第Ⅱ調査区とし、約200m東離れてⅢ調査区を設定した（9頁第5図参照）。は中世の遺跡の密度の高い箇所に当たったが、第Ⅲ区はその東端にあたる箇所に位置し、第Ⅰ・Ⅱ区での所見から遺跡の中枢部は、第Ⅰ・Ⅱ区と第Ⅲ区の間に存在すると推定し、石川広域農道から海側にはそれほど広がらないと予測している。第Ⅰ調査区では次節で紹介する様に、I-14・15区で検出した堀とⅡ-8・9区の堀跡はおそらく、遺跡を方形に囲む堀の一部と推定された。この両方の堀の間では遺構密度が急に高くなり、遺物の量も増加することが明らかに認められている。なお、一本松から東西に伸びる道路が市道改良事業として整備されることを原因として、松任市教育委員会が実施した発掘調査は、第Ⅰ区と第Ⅱ区の間の道に該当し、Ⅰ・Ⅱ区とⅢ区をつないで聖光寺遺跡の中央部をT字形に発掘したことになる。（松任市教育委員会『松任市徳光聖光寺遺跡』1992）

第2節 遺構

先述のように徳光聖光寺遺跡の調査は第Ⅰ・Ⅱ区と第Ⅲ区の2地点の調査を実施したが、遺構密度の高かった第Ⅰ区を中心に第17図～第20図を参考しながら概説する。第Ⅰ区は、ほぼ南北方向に設定した調査区で、北側の約30m分が広域農道に接続する排水路として直角に左折し、西側に伸びる以外は、広域農道と平行する。北（徳光集落）から一本松までを第Ⅰ区、一本松から南を第Ⅱ区とし延長約500mを対象としたが、遺構検出や遺物の出土が見られなかったⅡ-21区から南側約100m分は遺構の確認作業は実施したものとの結果として本格的な調査の対象から省くこととした。

第Ⅰ調査区

調査区の中を更に10m単位で区切ってⅠ—〇区と言うように呼称したが、東西方向に設定したⅠ—0区～1区では南北に併走する1・2号溝と北西—南東に続く3号溝を調査した。1号溝はⅠ—0区で検出された幅1.7m、深さ17cmの溝で南北方向をさす。覆土は黒褐色粘質土と灰白色粘質土がブロック状に混じり合った粘性の強い土層である。遺物はほとんど認められず土師質土器の小片が出土したにすぎない。2号溝は1号溝の東を並走する浅い溝で、幅80を測る。覆土は器1号溝と同じ。3号溝のあるⅠ—2区から調査区は南へ直角に曲がり、Ⅰ—3区に続いている。Ⅰ—4・5区で東西に伸びる幅約5.5mの大溝を発掘した。検出面からの深さ約70cmを測り、覆土は13層に分けられる。この付近の地山面は地表から約90～100cmにあり、約150cmで礫層に達する場合がある。Ⅰ—8区で東西方向の4号溝（幅約2.2m、深さ10cm）を検出したが、これまでの1・2号溝、大溝、4号溝等の覆土が灰色～灰褐色を主体として類似し、いずれも東西方向に平行することは水田耕作に關係する水路として作られたものであろうか。

Ⅰ—10区の西壁に一部を検出した1号土坑は深さ20cmと浅く、覆土は褐灰色粘質土の单層で灰白色的粘土質ブロックを含む。Ⅰ—11区の西側でその1/2を調査した第2号土坑は、南北方向で約4mを測る。深さ32cmの浅い土坑で第22図6・13・14に図示した遺物が青磁、土錘が出土している。第5号土坑は、2号土坑の東南、東壁に検出した。南北1.2m、東西1.0m以上の不整形の土坑。11cmの浅い土坑であるが第22図3～5・7～11の遺物が出土している。3号土坑はⅠ—12区でそのほぼ全体を検出した。東西1.4m、南北約2mの隅円長方形の土坑で西側は5号溝と接する。深さ約17cmの浅い土坑であるが、第22図1・2・12の遺物が出土した。第5号溝は3号土坑の西から南東に調査区を斜めに横切る幅25～40cmの溝。延長で約12mを測る。第24図1・6・9に図示した遺物が出土している。

第6号溝は幅2.2m、深さ約30cmの東西溝で、覆土は2層に分かれ、褐灰色粘質土で地山質のブロックを含む層と、下層の褐灰色粘質土に分かれる。断面図を観察すると6号溝が埋まった後に、ほぼ同じ場所でまた溝が設けられたことが窺われる。

Ⅰ—14～16区で検出した堀は、当初、第7号溝として扱ったが、先述のようにこの堀が遺跡を取り囲む堀であった可能性が高く、その意味で本報告では「堀」として扱うことにした。幅約5m、深さ90cmを測るが、南北方向に続く堀がⅠ—14区で西に直角に曲がることが確実である。覆土は9層に分けることが可能であるが、最下層の9層は灰色腐植土で多量の木片、葉などの自然遺物を含み、腐植土特有の悪臭を放つ。しまりの無い粘土層で60cm程度厚く堆積する。第25・26図に示した遺物が出土したが、堀の西斜面から出土した白木の折敷のほか漆器椀や下駄など多種の木製遺物が第9層から土器とともに多く出土した。

Ⅰ—16区で検出した第7号土坑は第6号土坑と軸を一にする土坑で一部を調査したが、南北5.8mを測る浅い土坑で方形プランをとるものと思われる。第23図4の須恵器が出土している。Ⅰ—17区の第6号土坑も大半が調査区の東壁にかかるため一部を調査したに止まるが、南北4m以上の隅円方形をした土坑であると推定される。深さは約25cmを測り、覆土は7層に分けられる。2・4層と5層には炭化物を含み、特に第5層には多く含んでいる。第23図1～3・5・6

に図示した遺物が出土している。第8号土坑はI-17区で9号土坑、Pitと重複する。遺構の大半が調査区西壁にかかるため形状・規模等は不明、深さは21cmを測る。遺物は第23図8・9に示した炉縁と思われる加工石片が出土した。第9号土坑は調査区の西壁でその一部を調査した浅い土坑。南北4~4.8mの方形プランと推定される。覆土は5層に分けられ、4層の褐灰色粘質土は地山質のブロックを多く含み、木片も出土した。9号土坑は8号土坑よりも新しい。

第8号溝はI-18区で検出した東西方向の溝で幅約2m、深さ約50cmを測る。覆土は6層からなり、1層は灰色粘質土で厚くレンズ状に堆積する。川原石を多く含み、黒色や灰白色の粘土ブロック、炭化物、木片も多く含む。2~4層も炭化物を含む。9号溝と重複し、9号溝を切っていることが断面の観察から見て取れる。第24図5・10の遺物が出土している。第9号溝はI-18区で東半で検出した南北にのびる遺構で北側で大きく東に曲がる。遺構の大半が調査区外に伸びるため規模・形状等は不明で、検出面からの深さは70cmを測る。覆土は6層に分けられ、第24図2・4・11に示した遺物が出土した。

第10号土坑は8号溝に接して検出された径約1.2mの小型土坑で、円形になると思われる。第覆土は褐灰色粘質土の単層で礫が多量に検出された。遺物は第23図7の板状の木製品が出土している。第11号土坑は10号土坑の横にあり、長軸88cm、単軸64cmの円形をした小型の土坑で、深さ69cmを測る。覆土は第10号土坑と同じ褐灰色粘質土の単層で礫を含む。

第二調査区

一本松横の農道を含む約10mを挟んで、調査区名を第二調査区とした。農道の北半と調査区の約6mの計10mでII-0区とし、それから南側にII-20区までの発掘調査を実施した。

II-1区の第3号土坑は、調査区の東側でその1/2を調査したに過ぎないが、径約70cmの円形土坑の壁にそって板が検出され、曲物の残欠と考えられる。井戸枠として利用された曲物が残ったのであろうか。

II-2区北側で検出した第1号溝は幅約2.4m、深さ40cmの東西溝。土層断面観察から1~3号溝の他にも数条の溝の存在が確認されている。1号溝の土層は3層に分けられ、2層は褐灰色粘土で川原石を多く含み、その間から土器も数点出土している。第29図8・19に示した遺物が出土した。2号溝はII-2区南側で検出された1号溝と平行する溝で、幅約2.9m、深さ40cmを測る。覆土は3層に分けられたが、2層の暗灰黄色粘質土で川原石を多く含む。3層は褐灰色粘土で鉄分・川原石を多量に含み、第29図1・7・10~14・16・18・21など各種の陶磁器や漆器碗など多くの遺物が出土した。3号溝は2号溝に平行する幅1.5~2m、深さ約40cmの東西溝で、覆土は2層からなり、2号溝より古いと推定される。

II-3区3号溝の西側に石を組んだ第3号井戸が検出された。この付近では地表面から約70cmで灰黄色砂質粘土の地山となり、遺構の確認は比較的容易であるが、遺構が錯綜して分かりにくい状態であった。3号井戸の川原石を整理したところ、第20図下に示したように綺麗な円形に石が積まれていたことが判明した。堀方の長径は1.2m、井側上縁長径56cm、底面径46cm、深さ約1mを測る。積まれている石は20cm×10cm程度のもので、長軸方向を内側に向けてきちんと積

まれている。川原石は検出面から約1m、石は五段は積まれていたようで、下には曲物の一部が残っていた。

第2号井戸と第1号井戸は西壁に統いて検出され、第2号井戸の方が1号井戸より新しいことが、断面の観察から分かっている。第2号井戸は当初、第2号土坑として検出しており、結桶の堀方2.5cmの円形で径約30cmの結桶が井戸枠として転用されており、タガが残っていた。第28図1の砥石と4・5の土師質小皿が出土している。第1号井戸も井戸枠に曲物を使用しており、直径60~80cmの歪んだ曲物の残欠が残っていた。井戸の堀り方は径約2.5mと大きく、第20図の断面図に見るよう、曲物は砂層まで堀抜いてあり、底には小礫が敷きつめられていた。

第10号土坑はⅡ-4区に検出した南北2.6m、深さ47cmの隅円長方形の土坑で1/2程度を調査した。覆土は5層からなり、南から北へ流れ込むように堆積している。土坑の底には2か所で焼土ブロックが認められた。第11号土坑はⅡ-4区で4号溝と切り合った状態で検出された。深さ60cmを測るが規模・形態等の詳細は不明。覆土は黒褐色粘質土の単層で、鉄分を多量に含み、粘性も強くなる。

第4号溝はⅡ-4・5区で検出された大型の遺構で、当初土坑として扱っていたが、川原石が多量に出土し、土層の堆積状況の観察から溝に変更したものである。遺構の全体を把握していくためその規模は不明である。南側は第5号溝と重複しているが、覆土は11層からなり、遺物は5層の黄灰色粘質土を中心に出土している。青磁碗、珠洲焼すり鉢、土錘が出土している。第5号溝はⅡ-5区、4号溝の南側に接して検出された遺構で、深さ70cm、深さ25cmを測る。出土遺物として第30図4・6・9・10などがある。第13号土坑は南北約5.8m、深さ約70cmの大型土坑で多くの礫が入れられたような状態で出土した。

第7号溝は幅約1.2mを測る平行溝で北西—南東方向に伸びる。

第8号溝はⅡ-8区からⅡ-9区の南まで続く大型の溝で、1~3号溝と同じく東西方向に走る堀と推定される。全体の幅約11mであるが、北から5mの地点でさらに一段落ち込む。深さは北側の浅い部分で約40cm、深い部分で約110cmを測る。覆土は6層からなり、遺物は3・5層の褐灰色粘質土から多く出土しており、3層の下部には川原石が多く堆積していた。この溝は、先述したI-14~16区で検出した堀と同じく、遺跡の南側を取り囲む堀であった可能性が高く、同じ意味で本報告では「堀」としての性格を持つ遺構として扱いたい。本例の様な中世の集落を囲む「堀」の存在は、松任市宮保館跡でも確認されているが（石川県立埋蔵文化財センター『宮保遺跡群』1991）、徳光聖光寺遺跡においても15~16世紀頃の集落に同様な「堀」を持っていると推定したい。堀からは第30図1~3・7・11~13の遺物が出土したが、土器の他に漆器の盤や鳥帽子側縁の断片と推定される漆片が出土し、注目される。

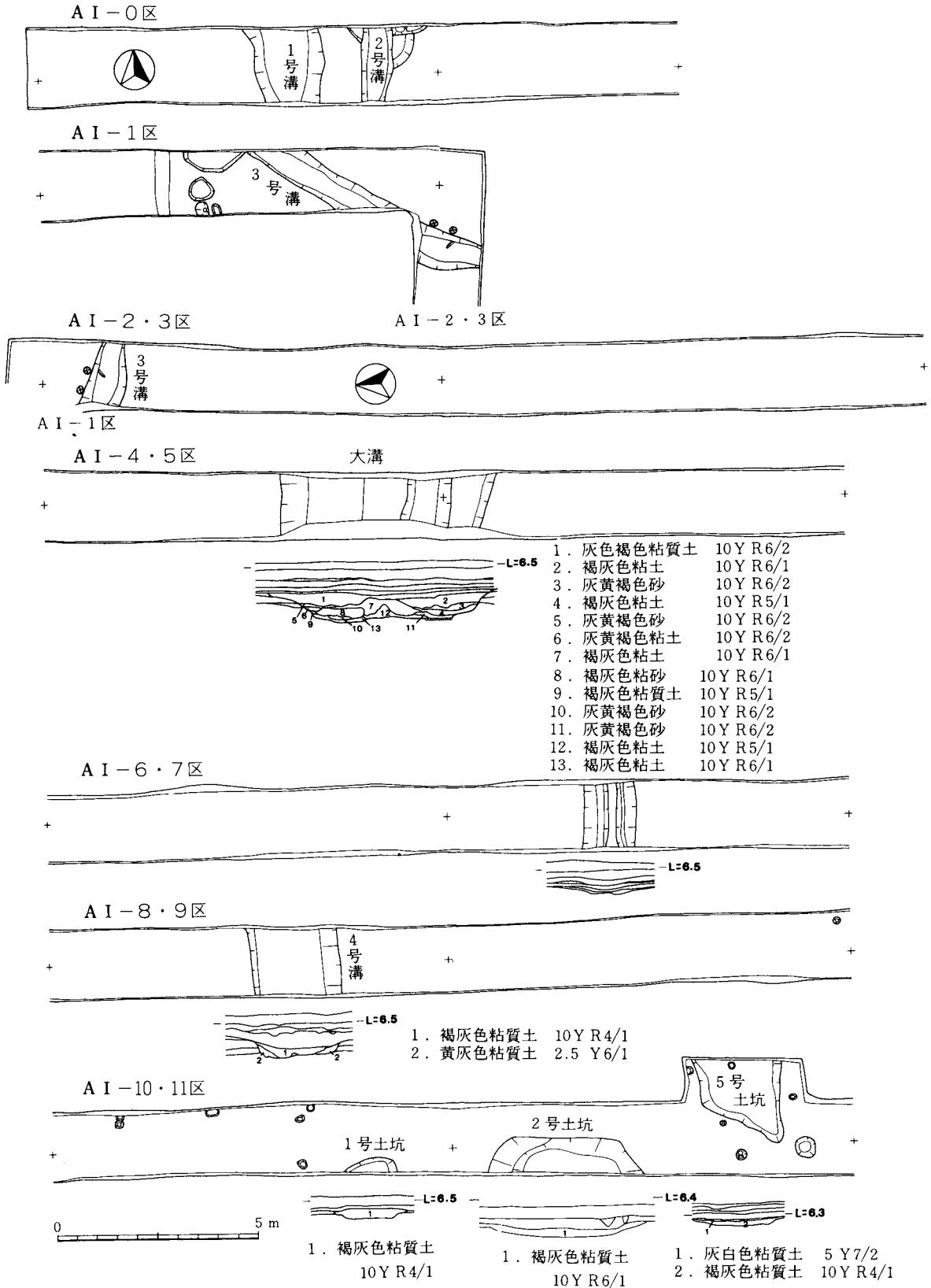
第9号溝はⅡ-10区で、南から北北西に走る小規模な溝。幅約30cmの浅い溝で北側は第12土坑と重複し、その南側では1m近くまで広がっている。暗渠排水により一部搅乱を受けているが、第30図5・8の陶器片が出土している。

第Ⅲ調査区

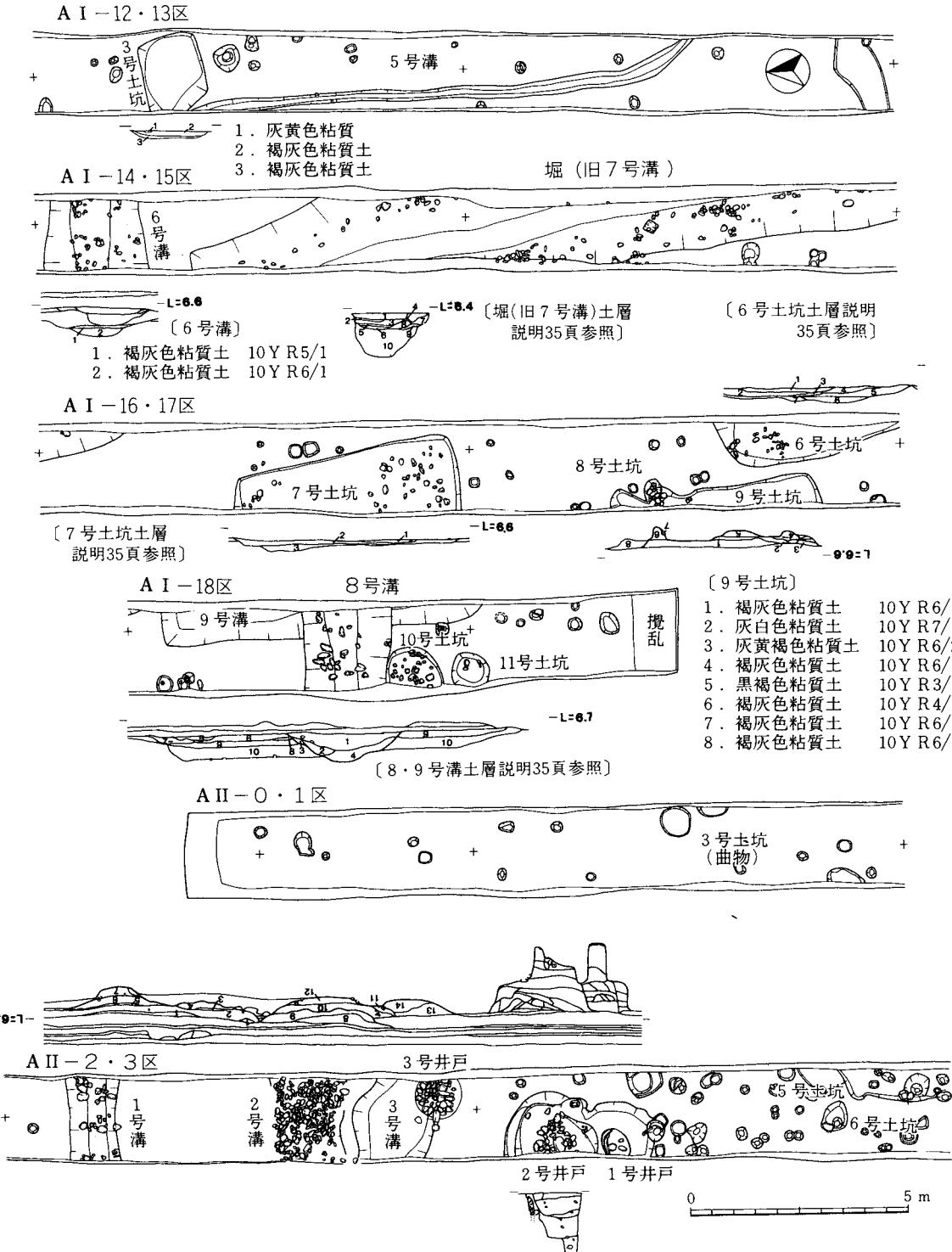
第Ⅲ調査区では調査区南側でPit群と溝1本が検出されたものの、かなり攪乱を受けており、北に行くにつれて礫層へと変わっていた。遺物は全く見られず、Pit群と溝の時期等については不明である。

第1表 德光聖興寺遺跡出土土器一覧

製品・ 器種 出土 地区	土 須 惠 器 器	中 国 製 品				瀬 戸 ・ 美 濃								信 楽		越 前		珠 洲			加 賀			瓦 質 土 器	土 師 質 土 器	近 世 陶 器	合 計					
		青 磁				白 磁																										
		碗	鉢	香 炉	皿	坏	小 壺	不 明	平 碗	丸 碗	天 目	盤	鉢	皿	卸 皿	花 瓶	香 炉	壺	擂 鉢	擂 鉢	壺	擂 鉢	壺	甕	火 炉	皿	鍋					
I 区	11	2	7	1		1	1	1	1	5	1	1	2	1	1	3		1	1	6	10	3	5	1	1	28	5	326	1	7	434	
II 区	7	6	10		1	4				2		4	2	1	4		1		2	5	13	9	1	2	2		8	10	164		4	262
合計	18	8	17	1	1	5	1	1	1	7	1	5	4	2	5	3	1	1	2	6	19	19	4	7	3	1	36	15	490	1	11	696



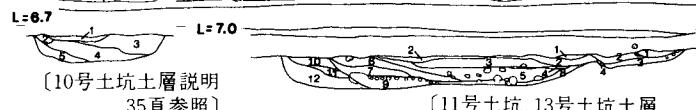
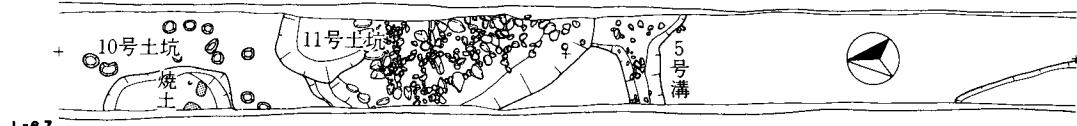
第17図 德光聖光寺遺跡遺構実測図(1)



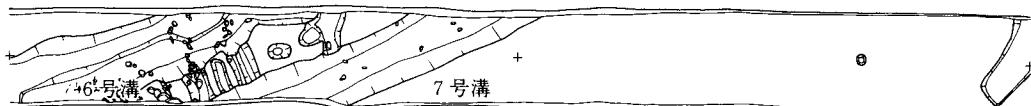
第18図 德光聖光寺遺跡遺構実測図(2)

A II-4・5区

13号土坑



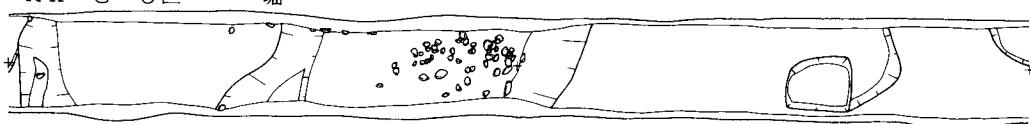
A II-6・7区



A II-8・9区

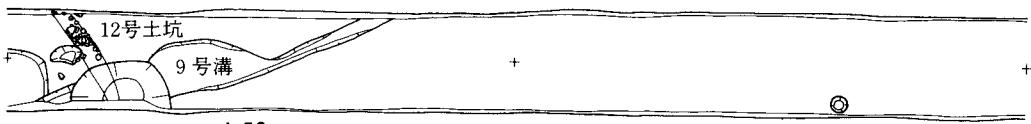
堀

0 5 m



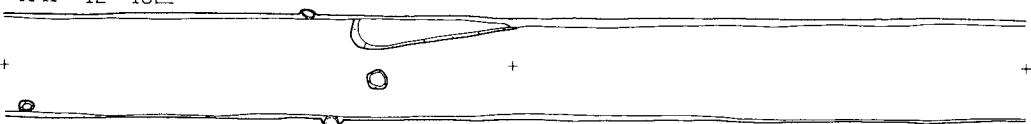
[堀土層説明 35頁参照]

A II-10・11区

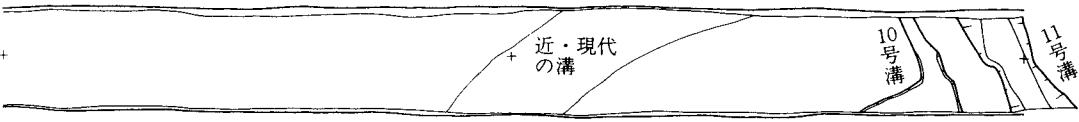


[12号土坑土層説明 35頁参照]

A II-12・13区



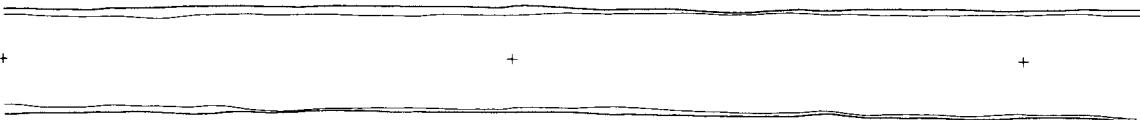
A II-14・15区



A II-16・17区



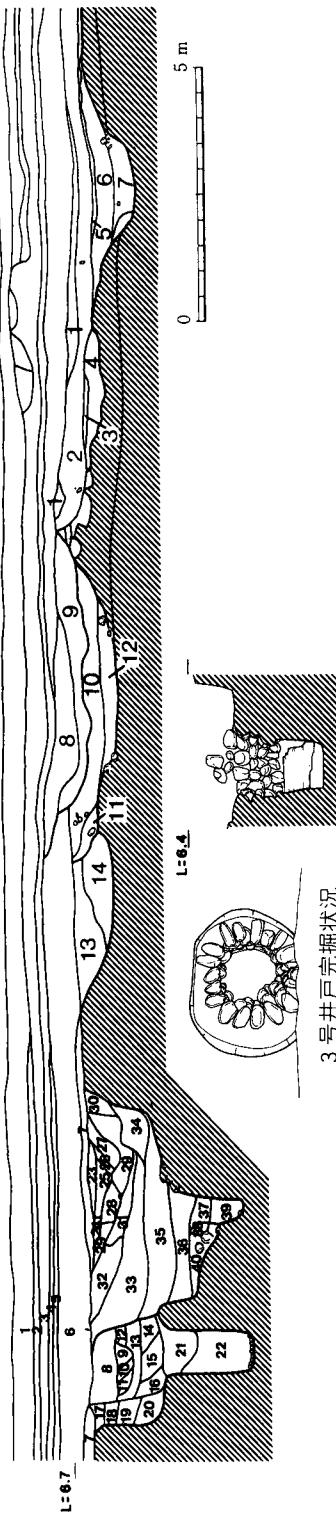
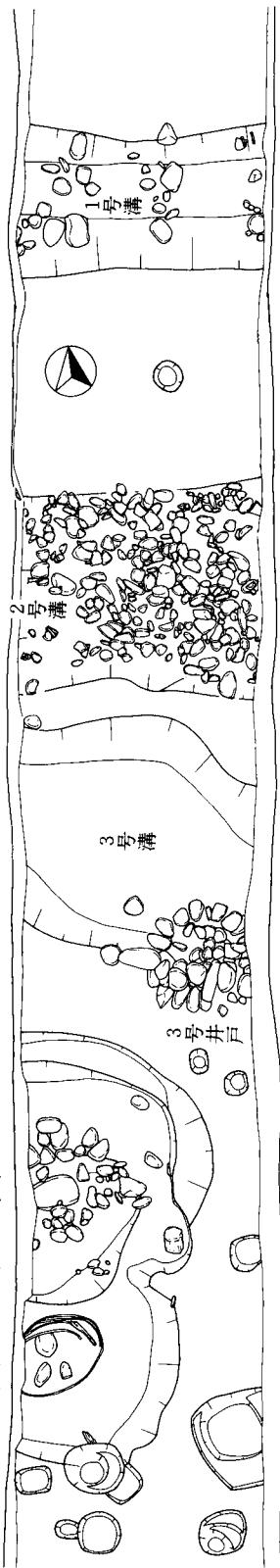
A II-18~20区



第19図 德光聖光寺遺跡遺構実測図(3)

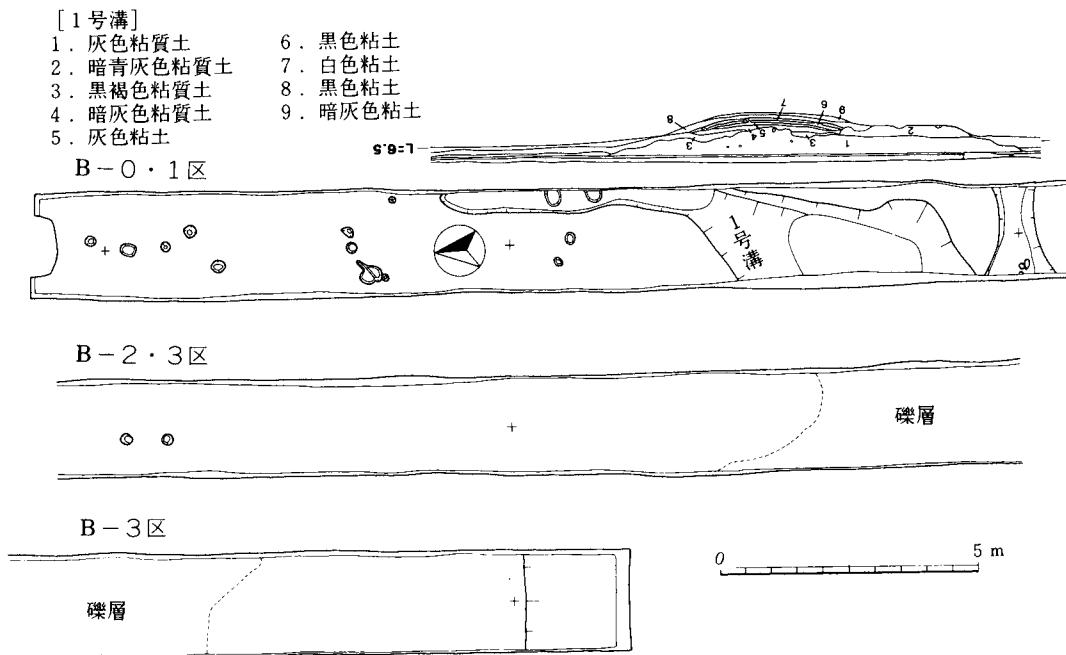
1号井戸（曲物）

2号井戸



第20図 德光聖光寺遺跡(4)

1. 黒色粘砂	2.5 Y 4/1	[1号井戸]	8. 黄灰色粘質土	2.5 Y 5/1	[1号溝]	1. 黄灰色粗砂	2.5 Y 5/1
2. 黑褐色粘土	2.5 Y 7/2	9. 灰黑色粘質土	10 Y R 5/1	2. 黑褐色粘土	2.5 Y 5/2	2. 黑褐色粘質土	10 Y R 6/1
3. 灰黄色粘砂	2.5 Y 6/2	10. 灰黑色粘質土	10 Y R 5/1	3. 黑褐色粘土	10 Y R 5/1	3. 横灰色粘砂	10 Y R 5/1
4. にふい黄色粘砂	2.5 Y 6/3	11. 灰黑色粘質土	10 Y R 4/1	4. 黑褐色粘土	10 Y R 5/1	4. 黑褐色粘質土	10 Y R 5/1
5. 黑褐色粘砂	2.5 Y 6/2	12. 灰黑色粘質土	10 Y R 4/1	5. 黑褐色粘砂	10 Y R 5/1	5. 黑褐色粘質土	10 Y R 4/1
6. 暗灰黄色粘砂	2.5 Y 5/2	13. 灰黑色粘質土	10 Y R 5/1	6. 暗灰黄色粗砂	2.5 Y 6/2	6. 黑灰色粘砂	2.5 Y 6/1
7. 黄灰色粘砂	2.5 Y 5/1	14. 灰黑色粘質土	10 Y R 4/1	7. [2号溝新]	10 Y R 5/1	7. 黄灰色粘土	10 Y R 5/1
8. 黄灰色粘土	2.5 Y 6/2	15. 黑褐色粘質土	10 Y R 5/1	8. 暗灰黄色粘質土	2.5 Y 5/2	8. 黑褐色粘土	10 Y R 5/1
9. 黑褐色粘砂	2.5 Y 6/3	16. 黑褐色粘質土	10 Y R 4/1	9. 灰黄色粗砂	2.5 Y 6/2	9. 黑褐色粘土	10 Y R 4/1
10. 黑褐色粘砂	2.5 Y 6/2	17. 黑褐色粘質土	10 Y R 3/1	10. 黑褐色粘土	10 Y R 5/1	10. 黑褐色粘土	10 Y R 4/1
11. 黑褐色粘砂	2.5 Y 6/2	18. 灰黄色粘質土	10 Y R 4/1	11. 黑褐色粘土	10 Y R 5/1	11. 黑褐色粘土	10 Y R 5/1
12. 黑褐色粘砂	2.5 Y 6/2	19. 黑褐色粘質土	10 Y R 5/1	12. 黑褐色粘土	10 Y R 5/1	12. 黑褐色粘土	10 Y R 5/1
13. 黑褐色粘砂	2.5 Y 5/2	20. 黑白色粘質土	5 Y 7/2	13. 黑褐色粘土	7.5 Y 5/1	13. 黑褐色粘土	7.5 Y 5/1
14. 黑褐色粘土	2.5 Y 5/1	21. 黑色粘土	7.5 Y 5/1	14. 暗灰黄色粘土	10 Y R 5/2	14. 暗灰黄色粘質土	10 Y R 5/2
15. 黑褐色粘砂	2.5 Y 5/1	22. 明綠灰色粘土	7.5 Y 7/1	15. 黑褐色粘土	10 Y R 5/1	15. 黑褐色粘土	10 Y R 5/1
16. 黑褐色粘土	2.5 Y 5/1	23. 黑褐色粘土	10 Y R 5/1	16. 黑褐色粘土	10 Y R 5/1	16. 黑褐色粘土	10 Y R 5/1
17. 黑褐色粘砂	2.5 Y 5/1	24. 黑褐色粘土	10 Y R 5/1	17. 黑褐色粘土	10 Y R 5/1	17. 黑褐色粘土	10 Y R 5/1
18. 灰黄色粘質土	2.5 Y 7/2	25. 黑褐色粘土	10 Y R 5/1	18. 黑褐色粘土	10 Y R 5/1	18. 黑褐色粘土	10 Y R 5/1
19. 黑褐色粘質土	2.5 Y 7/2	26. 黑褐色粘土	10 Y R 5/1	19. 黑褐色粘土	10 Y R 5/1	19. 黑褐色粘土	10 Y R 5/1
20. 黑褐色粘質土	5 Y 7/2	27. 黑褐色粘土	10 Y R 5/1	20. 黑褐色粘土	10 Y R 5/1	20. 黑褐色粘土	10 Y R 5/1
21. 黑色粘土	7.5 Y 5/1	28. 黑褐色粘土	10 Y R 5/1	21. 黑色粘土	7.5 Y 5/1	21. 黑色粘土	7.5 Y 5/1
22. 明綠灰色粘土	7.5 Y 7/1	29. 黑褐色粘土	10 Y R 5/1	22. 明綠灰色粘土	7.5 Y 4/1	22. 明綠灰色粘土	7.5 Y 4/1



第21図 德光聖光寺遺跡遺構実測図(5)

土層説明

〔堀(旧7号溝)〕 第18図

- | | | | |
|------------|----------|-----------|----------|
| 1. 褐灰色粘質土 | 10Y R5/1 | 6. 青灰色粘質土 | 5B G6/1 |
| 2. 褐灰色粘質土 | 10Y R4/1 | 7. 褐灰色粘質土 | 10Y R4/1 |
| 3. a 灰色粘質土 | 5 Y5/1 | 8. 灰色粘質土 | 7.5 Y5/1 |
| 4. b 灰色粘質土 | 5 Y4/1 | 9. 青灰色粘質土 | 5 B G6/1 |
| 5. 褐灰色粘質土 | 10Y R4/1 | 10. 灰色腐植土 | 7.5 Y4/1 |

〔6号土坑〕 第18図

- | | | | |
|------------|----------|-----------|----------|
| 1. 灰白色粘質土 | 10Y R7/1 | 5. 褐灰色粘質土 | 10Y R6/1 |
| 2. 褐灰色粘質土 | 10Y R6/1 | 6. 褐灰色粘質土 | 10Y R6/1 |
| 3. 褐灰色粘質土 | 10Y R5/1 | 7. 褐灰色粘質土 | 10Y R4/1 |
| 4. 灰黃褐色粘質土 | 10Y R6/2 | | |

〔7号土坑〕 第18図

- | | |
|-----------|----------|
| 1. 褐灰色粘質土 | 10Y R6/1 |
| 2. 褐灰色粘質土 | 10Y R5/1 |
| 3. 褐灰色粘質土 | 10Y R6/1 |

〔8・9号溝〕 第18図

- | | | | |
|-------------|----------|------------|----------|
| 1. 灰色粘質土 | 7.5 Y5/1 | 6. 浅黄色粘土 | 5 Y7/3 |
| 2. 灰色粘質土 | 7.5 Y5/1 | 7. 褐灰色粘質土 | 10Y R5/1 |
| 3. オリーブ灰色粘砂 | | 8. 褐灰色粘質土 | 10Y R4/1 |
| 4. 灰色粘質土 | 7.5 Y5/1 | 9. 黄灰色粘砂 | 2.5 Y5/1 |
| 5. 褐灰色粘質土 | 10Y R5/1 | 10. 黄灰色粘質土 | 2.5 Y4/1 |

〔1・2・3号溝〕 第18図

- | | | | |
|-----------|----------|-------------|----------|
| 1. 黄灰色粗砂 | 2.5 Y5/1 | 8. 暗灰黄色粘質土 | 2.5 Y5/2 |
| 2. 褐灰色粘質土 | 10Y R6/1 | 9. 灰黄色粗砂 | 2.5 Y6/2 |
| 3. 褐灰色粘砂 | 10Y R5/1 | 10. 黄灰色粘質土 | 2.5 Y5/1 |
| 4. 褐灰色粘質土 | 10Y R5/1 | 11. 暗灰黄色粘質土 | 2.5 Y5/2 |
| 5. 褐灰色粘砂 | 10Y R5/1 | 12. 褐灰色粘土 | 10Y R5/1 |
| 6. 褐灰色粘質土 | 10Y R4/1 | 13. 褐灰色粘質土 | 10Y R5/1 |
| 7. 黄灰色粘砂 | 2.5 Y6/1 | 14. 暗灰黄色粘質土 | 2.5 Y5/2 |

〔10号土坑〕 第19図

- | | |
|------------|----------|
| 1. 浅黄色粘質土 | 2.5 Y7/3 |
| 2. 灰黃褐色粘質土 | 10Y R6/2 |
| 3. 灰黃褐色粘質土 | 10Y R6/2 |
| 4. 褐灰色粘質土 | 10Y R5/1 |
| 5. 褐灰色粘質土 | 10Y R5/1 |

〔13号土坑〕・〔11号土坑〕 第19図

- | | |
|------------|----------|
| 1. 灰黄褐色粘質土 | 10Y R5/2 |
| 2. 灰黄褐色粘質土 | 10Y R6/2 |
| 3. 黄褐色粘質土 | 2.5 Y6/1 |
| 4. 黄褐色砂 | 2.5 Y5/3 |
| 5. 黄灰色粘質土 | 2.5 Y6/1 |
| 6. 褐灰色粘質土 | 10Y R6/1 |
| 7. 黑褐色粘質土 | 10Y R3/1 |
| 8. 黄灰色粘質土 | 2.5 Y5/1 |
| 9. 褐灰色粘質土 | 10Y R5/1 |
| 10. 褐灰色粘質土 | 10Y R6/1 |
| 11. 褐灰色粘質土 | 10Y R5/1 |
| 12. 黑褐色粘質土 | 10Y R3/1 |

〔5号溝〕 第19図

- | | |
|--------------|----------|
| 1. にぶい黄橙色粘質土 | 10Y R6/3 |
| 2. 灰黄褐色粘質土 | 10Y R6/2 |
| 3. 灰黄褐色粘質土 | 10Y R4/2 |
| 4. 黑褐色粘質土 | 10Y R3/1 |

〔堀〕 第19図

- | | |
|------------|----------|
| 1. 浅黄色粘質土 | 5 Y7/4 |
| 2. 褐黄灰色粘質土 | 10Y R6/2 |
| 3. 灰黄褐色粘質土 | 10Y R5/2 |
| 4. 黑褐色粘質土 | 10Y R3/1 |
| 5. 褐灰色粘質土 | 10Y R5/1 |
| 6. 褐灰色粘質土 | 10Y R6/1 |
| 7. 褐灰色粘質土 | 10Y R5/1 |
| 8. 褐灰色粘質土 | 10Y R4/1 |

〔12号土坑〕 第19図

- | | |
|------------|----------|
| 1. 褐灰色粘質土 | 10Y R6/1 |
| 2. 灰黄褐色粘質土 | 10Y R6/2 |
| 3. 褐灰色粘質土 | 10Y R6/1 |
| 4. 灰白色砂 | 10Y R7/1 |
| 5. 灰白色粘質土 | 10Y R7/1 |

第3節 遺物

1、I区土坑出土遺物（第22・23図、図版12） I区で検出された11基の土坑のうち、中世の遺物が主に出土した第2・3・5・6・7・8・10号土坑を報告する。

第2号土坑（第22図—6・13・14）

6は青磁鉢である。釉は器面全体に厚く施され明緑灰色を呈して貫入は内外面に荒く入る。素地は灰白色で緻密である。14世紀前半と考えられる。13・14は単孔管状土錐である。13は小型のもので一部欠損し、直径0.7cm、孔径0.2cm、重量1.5gを測る。胎土は淡赤橙色を呈し、砂粒を含まず密である。14は推定径4.6cm、孔径1.7cmを測り、胎土は灰白色を呈し砂粒を含んでやや荒い。

第3号土坑（第22図—1・2・12）

1・2は土師質土器である。1は口径8.8cmを測り、体部が横ナデによりやや外反する。胎土は灰白色を呈し密である。2は器壁が厚く、体部下半に弱い横ナデによる稜を残す。胎土は浅黄色を呈し密である。12は土師質の小型の土錐で、直径1.0cm、孔径0.4cmを測る。

第5号土坑（第22図—3～5・7～11）

3～5は土師質土器である。3は口径7.8cmを測り、胎土は淡橙色を呈する。4は器高が低く、口縁端部が断面三角形を呈し、体部下半に横ナデによる稜線を残す。胎土は淡橙色を呈する。5は比較的大型で口径13.7cmを測り、体部は外反する。胎土は淡橙色を呈し密である。

7は青磁の碗で、荒い鎬蓮弁をつくり出す。釉は灰オリーブ色を呈し、素地は灰白色で緻密である。14世紀前半のものと思われる。8は珠洲焼の捏鉢である。口径21.6cmで、口縁外端は面取りをしている。胎土は灰色を呈し緻密で、焼成は良い。9～11は加賀焼の甕の肩部片である。9は胎土はにぶい赤褐色を呈し、砂粒を含むが密である。外面に花文に斜格子をくみあわせたスタンプを施文する。9・10のスタンプは那谷コテンノウダニ窯Ⅱ101類に比定される。11はにぶい赤褐色を呈するが、内面は自然釉が付着し暗オリーブ灰色となっている。焼成は良い。

第6号土坑（第23図—1～3・5・6）

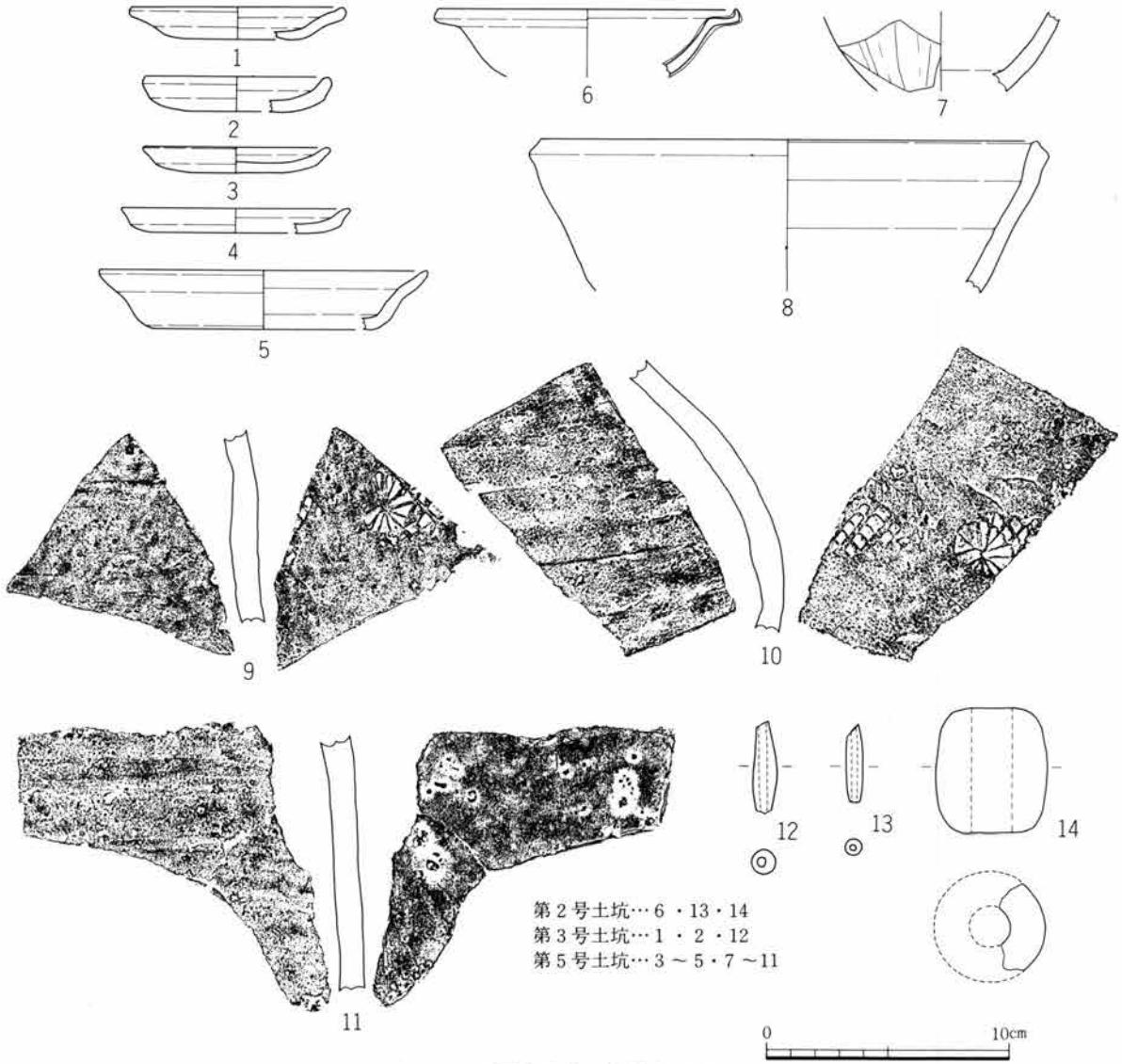
1は土師質土器である。外面に一段の横ナデを施す。胎土はにぶい黄褐色を呈し、焼成はあまり。口縁部に灯芯油痕を残す。2は瀬戸の灰釉平碗である。ハケ塗りの釉はオリーブ黄色を呈し、内面には目痕が残る。3は瀬戸の灰釉皿で、釉はオリーブ黄色を呈する。素地は灰色で緻密である。5は珠洲焼の擂鉢で、口縁端部に波状文が施される。胎土は黒灰色を呈するが、焼成はややあまり。珠洲焼編年のⅣ期に比定されよう。6は瀬戸系の壺の口縁部片と考えられる。釉は全面にかかり黒褐色を呈するが、内面は二次加熱で退色している。素地は灰白色で緻密である。

第7号土坑（第23図—4）

4は須恵器の壺の頸部片である。外面及び内面上部に黒灰色の自然釉がかかる。胎土は灰色を呈し緻密である。焼成は良い。

第8号土坑（第23図—8・9）

8・9はともに炉縁の石片と推定される。8は不整形な柱状をなし、上面にノミ痕を残す。側面にススが付着している。9は上部にノミ痕を残し、側面の大部分に被熱のあとが認められる。



第22図 I区土坑出土遺物実測図1

両者とも石質は軽石凝灰岩と同定され、産地は小松市観音山西麓に比定される。

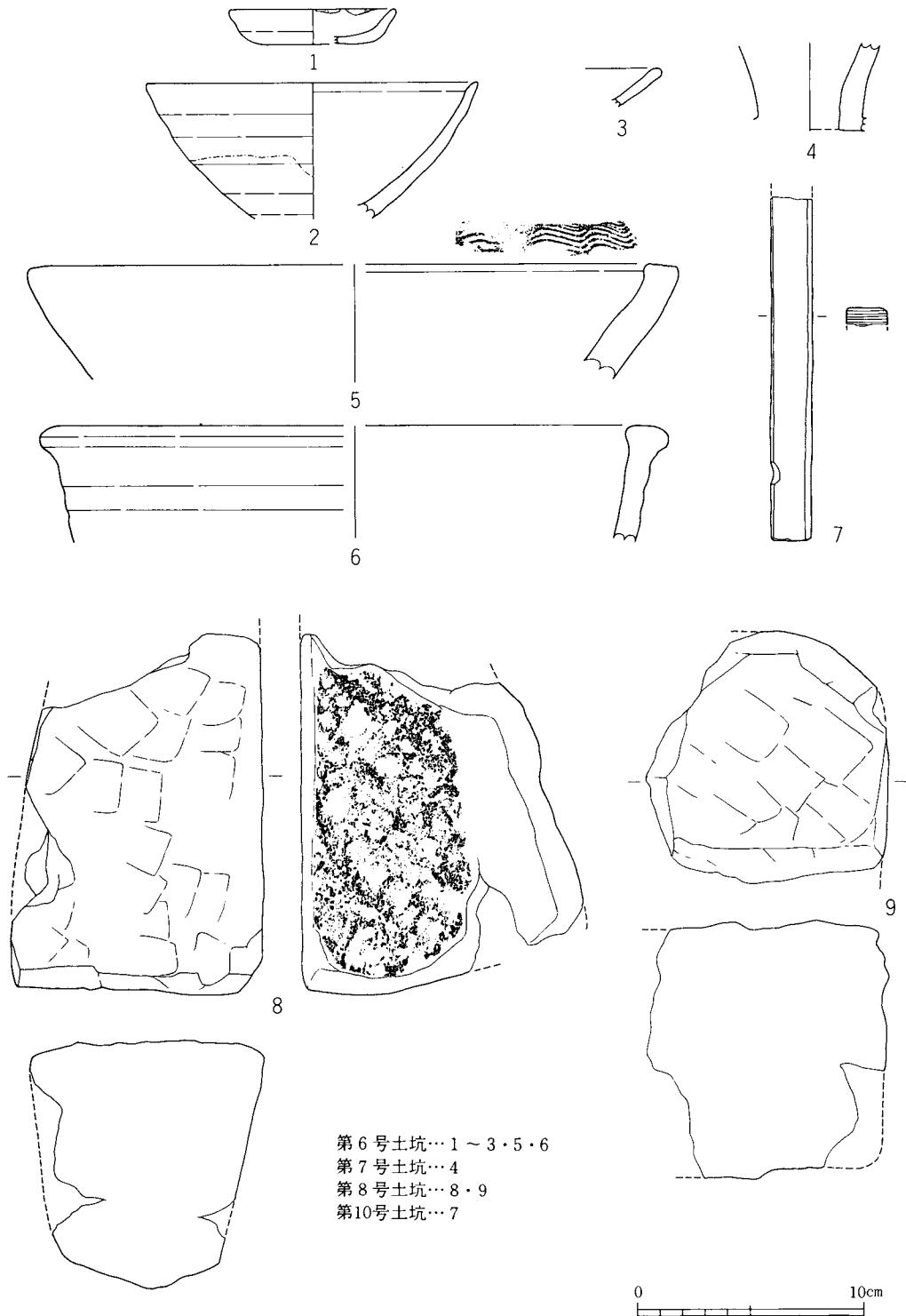
第10号土坑（第23図-7）

7は長方形の木製品で、上端と裏面を欠損する。幅は1.7cmを測り、下端に鋸目が残る。用材はスギである。

2、I区溝出土遺物（第24図、図版） I区で検出された8条の溝状遺構の中で、報告可能な遺物が出土した第5・6・8・9号溝の4条について報告をする。

第5号溝（第24図-1・6・9）

1は土師質土器である。器壁が一定で、胎土は灰白色を呈する。6は越前焼の擂鉢である。胎土は赤褐色を呈し、砂粒を含むが密である。焼成は良い。9は加賀焼の甕の体部片である。胎土はにぶい赤褐色を呈し、小礫を含んでやや粗い。



第23図 I区土坑出土遺物実測図2

第6号溝（第24図—7・8）

7は珠洲焼の擂鉢である。胎土は灰色を呈し、砂粒を含むが密である。焼成はややあまい。おろし目は幅2.1cmに7条である。8は加賀焼の甕で、口径33.0cmを測る。口縁は外反し、口唇部内面が凹む。胎土はにぶい赤褐色を呈し焼成は良い。器面調整は内外面とも横ナデによる。なお、同溝からは松カサが出土している。

第8号溝（第24図—5・10）

5は青磁の碗で、口縁が外反するタイプのものである。釉はオリーブ灰色を呈し高台外面まで施されるが、畳付の部分は軽くかきとられている。貫入は内外面に細く入る。焼成はややあまい。10は完形の土師質管状土錘で、直径3.9cm、孔径1.5cm、重量56.2gを測る。

第9号溝（第24図—2～4・11）

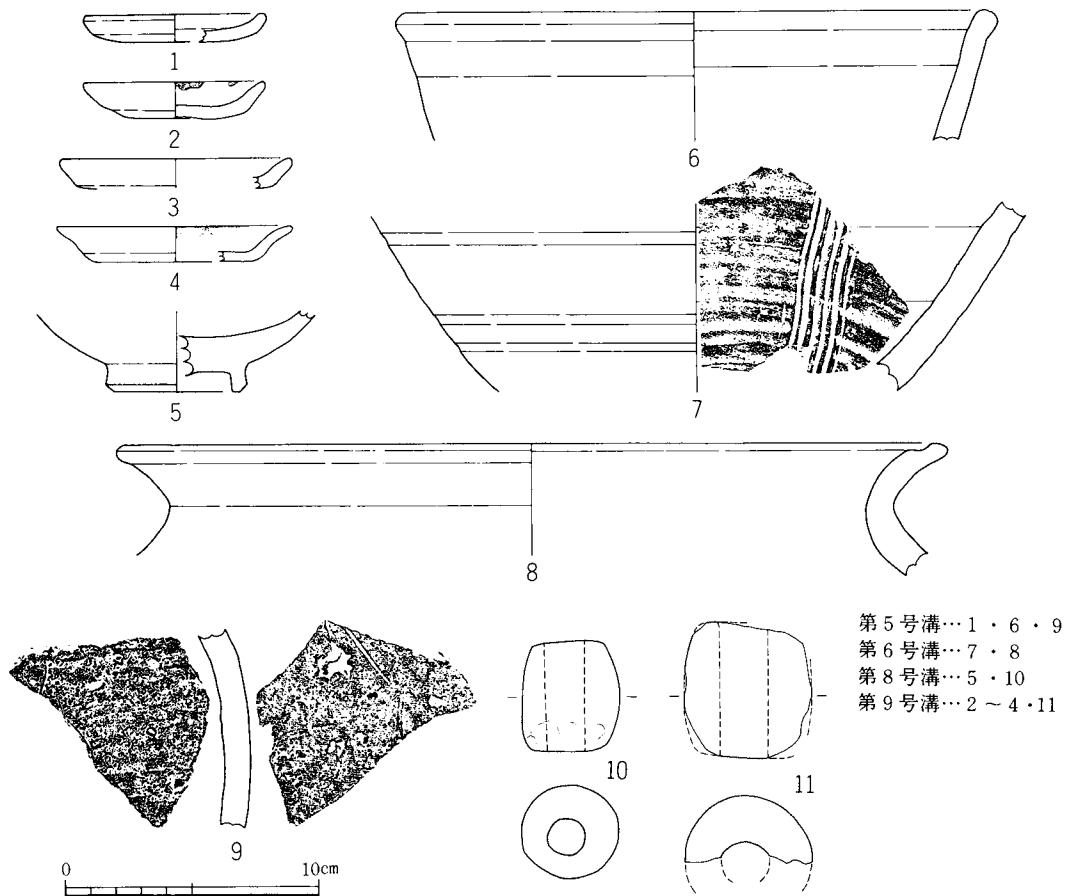
2～4は土師質である。2は体部に一段の横ナデを施す。3は器高が低く、体部は横ナデを施す。4は口縁部が外反し、体部下半に横ナデによる稜が認められる。3点はいずれも胎土はにぶい黄橙色を呈し、砂粒をほとんど含まない。11は土師質の管状土錘である。胎土はにぶい黄褐色を呈し密である。なお、同溝からは不明木製品2点とクルミが出土している。

3、I区堀出土遺物（第25・26図、図版12）

1は土師質土器である。口縁は内湾して立ち上がる。胎土は明褐灰色を呈しやや粗い。2は白磁皿の底部片で、釉が外面体部下半で止まるタイプのものである。釉は透明感のある白色を呈する。内底面には3ヶ所の目痕が残る。3は青磁の碗で、外面にヘラ描き蓮弁文が施文されている。釉は二次加熱を受け透明感のないオリーブ灰色を呈する。素地は灰白色を呈し堅緻である。

4・5は珠洲焼の擂鉢である。4の胎土は灰色を呈し緻密であるが、焼成はあまい。おろし目は幅2.4cmに18条である。5は口径31.8cmを測り、口縁端部に波状文が施される。胎土は灰色を呈し緻密で、焼成は良い。おろし目は幅2.5cmに9条で、断面には漆による補修痕が残る。6は越前焼の擂鉢である。胎土はにぶい灰褐色を呈し、砂粒の含みが多く粗い。7は珠洲焼の甕の体部片である。胎土は灰色を呈し緻密である。焼成は良い。タタキ目は幅3cmで9本である。8は中砥石である。幅4.9cmを測り、断面長方形を呈する。四側面が使用され平滑となっている。石質は白色の凝灰岩で、うすい黄茶褐色の縞が入っている。

9・10・12～17は木製品である。9は下駄の歯で、左右の側面は丸みをもち、上端は鋸目が残る。ヒノキの柾目材を用いている。10は円盤上の製品で、径6.4cm、厚さ1.8cmを測り、中央部に径0.4cmの孔が穿たれている。四方の小孔は不釘状の痕である。ヒノキの柾目材を用いているが、用途は不明である。11は漆器の碗である。内外面は黒漆塗りで、内面見込みと外側面に扇状の文様を朱漆で描き、外底には「一」の字が入る。内側面に漆状の付着物が残る。横木取りであるが用材は不明である。12は両端には鋸目が残る。13は長方形の薄板片で、側縁中ほどに結び紐の樹皮が残る。内面上下には2条の刻み目がある。14は刃物類の柄を思わせるもので、上端を欠損する。握り手部分とみられる大きさは長さ9.8cm、幅2.4cm、厚さ1.4cmを測る。断面はややだ円形を呈する。15は箸片である。16は中ほどに釘跡が残る。用材は杉の柾目板である。17の板は釘跡と思われる小孔がある。両端は荒い鋸目で、裏面には細い鉈目がみられるが、表面は平滑である。



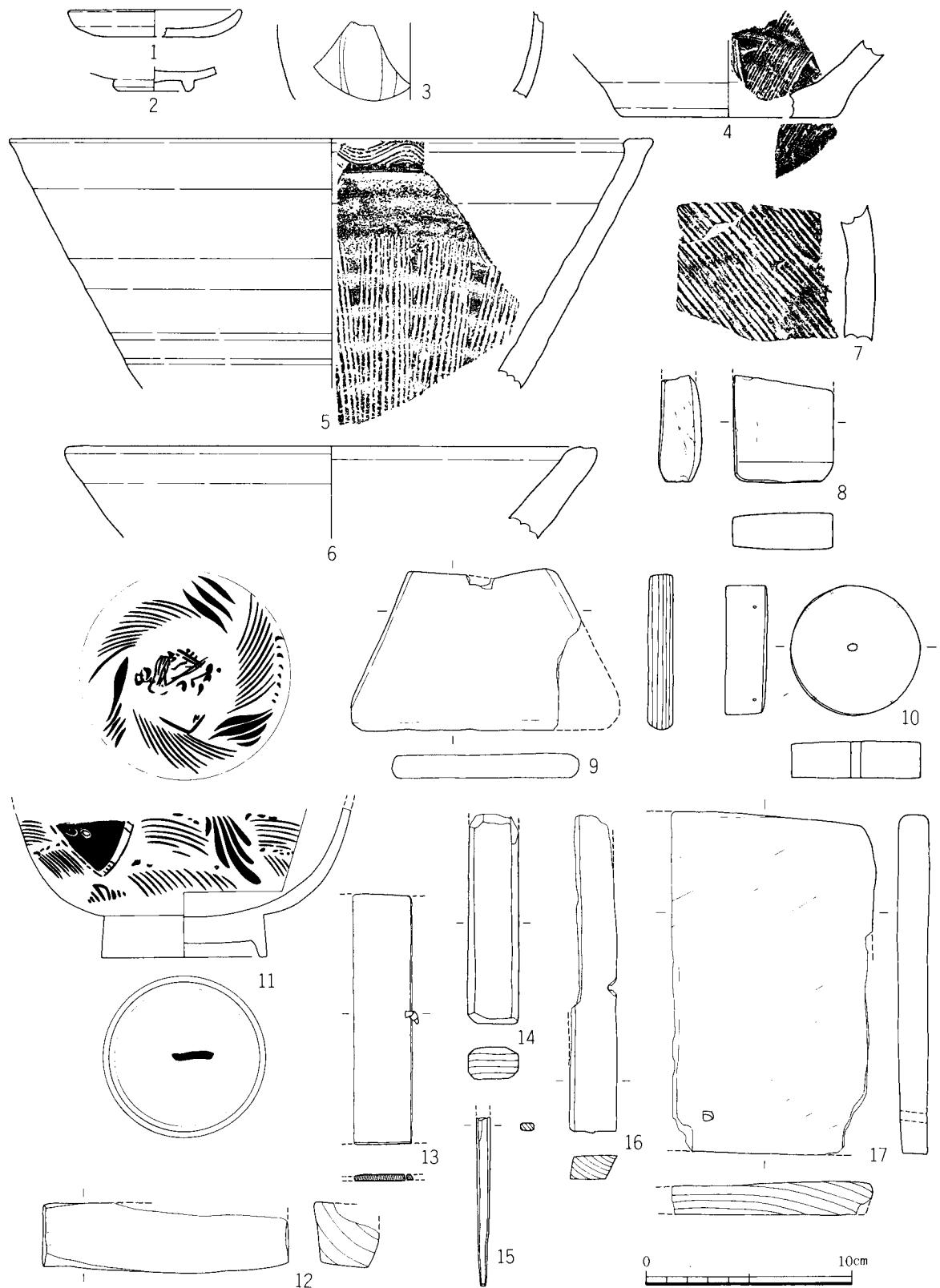
第24図 I区溝出土遺物実測図

第26図は折敷である。底板は縦29.1cm、横28.1cmを測り、大きく6片に割れている。側板は高さ1.4cmを測り、一辺には抉りが入る。底板と側板のつなぎは樹皮の二重巻きで、各辺四ヶ所ずつをとめている。用材はヒノキで柾目取りである。

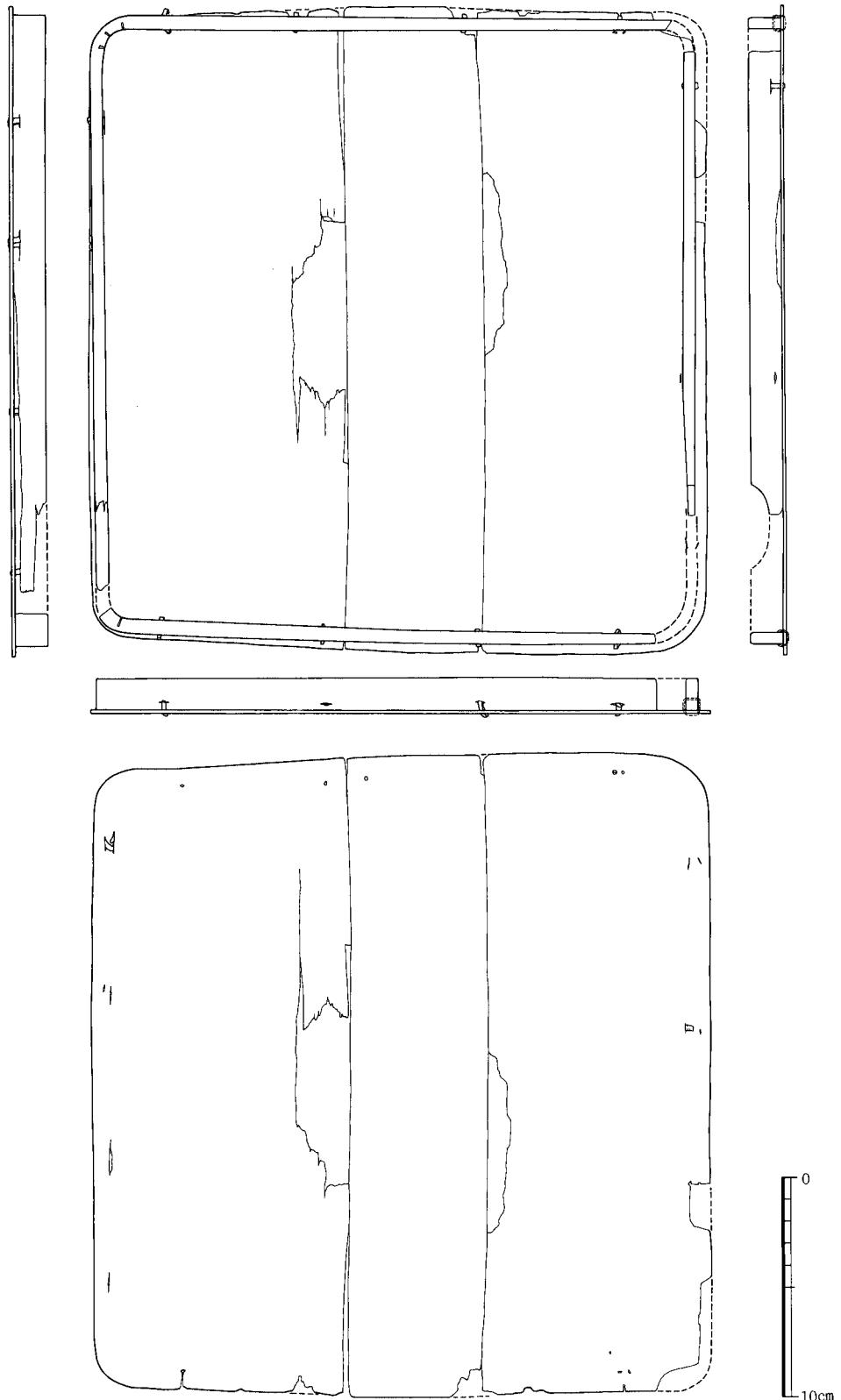
4、I区包含層出土遺物（第27図、図版12）

1～4は土師質土器である。1は外面に一段の横ナデを施す。胎土は浅黄橙色を呈し、口縁部に灯芯油痕を残す。2はやや外反する。胎土は浅黄橙色を呈し砂粒を少し含む。3は口縁部に二段の横ナデを施し、底部が薄い。胎土は浅黄橙色を呈し密である。4の胎土は淡黄色を呈し密である。

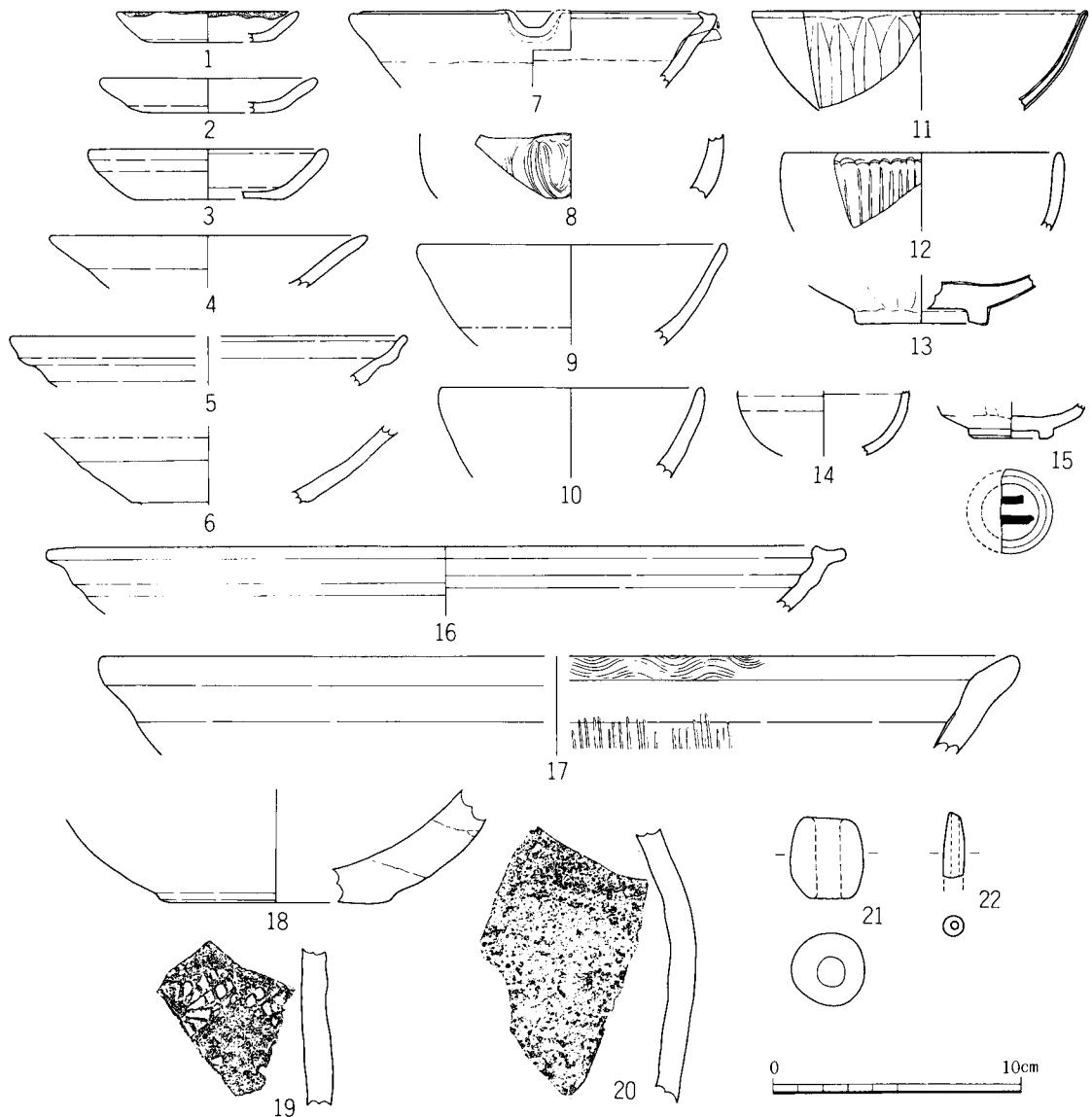
5～10は瀬戸焼である。5・6は灰釉の平碗で、5は釉が透明感のある灰オリーブ色を呈する。6は釉がオリーブ色を呈し、内面に目痕が残る。7は灰釉のおろし皿である。釉は透明感のあるオリーブ灰色を呈し、内外面上半に施されている。素地は灰白色を呈し緻密である。断面には補修痕が認められる。8は香炉の体部片と推定され、外面に張付蓮弁文がつくり出されている。釉はオリーブ灰色を呈し、素地は灰白色を呈し密である。断面に補修痕が認められる。9は越中瀬戸の丸碗である。内外の鉄釉は茶色を呈してうすくかかる。外面下半には露胎で茶褐色化を呈する。素地は灰色で密である。10は瀬戸、美濃焼の灰釉の丸碗である。釉は淡黄色を呈し、素地は



第25図 I区堀出土遺物実測図 1



第26図 I区堀出土遺物実測図2



第27図 I区包含層出土遺物実測図

淡黄褐色で緻密である。大窯のⅣ期に比定される。

11～13は青磁である。11は鎬蓮弁文碗である。蓮弁の幅は狭く柳葉形で、鎬も明瞭である。釉は透明感のある灰緑色を呈し、全体に厚く施される。素地は灰白色で堅緻である。12はヘラ描き蓮弁文の碗である。釉は透明感のある灰オリーブ色を呈し、全体に厚くかかる。素地は灰白石で緻密である。13は鎬蓮弁文の底部片である。高台径6.6cmを測り、高台断面は四角形である。釉は二次加熱により透明感のない明オリーブ灰色を呈する。素地は灰白色で緻密である。14・15は白磁である。14は小壺の下半部片で、上端は屈曲部で割れている。釉は透明感のある灰白色を呈する。15は壺の底部片である。釉は白色を呈し、外底面には「二」の墨書きがある。

16は瀬戸焼の灰釉盤である。口径30cmを測り、口唇部に隆帯を作り出す。釉は灰オリーブ色を呈し、素地は灰色で緻密である。17は珠洲焼の擂鉢で、胎土は小礫を含んでやや粗く、灰色を呈

する。焼成は良い。珠洲焼編年のV期に比底される。18は珠洲焼の壺の底部片である。胎土は灰黄色を呈し、粗い。断面2ヶ所に接合痕が認められる。19・20は加賀焼の甕の体部片である。19は花文に斜格子を組みあわせたスタンプ文が入る。これは那谷コテンノウダニ窯Ⅱ類101、湯上ユノカミダニ窯Ⅱ類101の両者に類似の押印である。胎土はにぶい赤褐色を呈し、砂粒を含むが密である。焼成は良い。20は胎土はにぶい赤褐色を呈し、小礫を含むが密である。焼成は良い。21・22は土師質の管状土錘である。21は完形品で直径2.9cm、孔径1.0cm、重量23.3gを測る。胎土は橙色を呈し密である。22は小型のもので直径0.8cm、孔径0.3cmを測る。

5、Ⅱ区井戸・土坑出土遺物（第28図、図版13）

1は第2号井戸から出土した中砥石である。現長12.6cm、幅4.7cmを測り、断面長方形を呈する。四側面が使用され平滑となっている。石質は白色の凝灰岩である。

2・3は第8号土坑から出土したものである。2は珠洲焼の甕の底部近くの破片で、胎土は灰色を呈し、砂粒をほとんど含まず密である。焼成は良い。タタキ目は幅3cmに10本である。3は土師質土器で、体部に横ナデによる稜線を残す。胎土は淡橙色を呈し密である。

なお、2号土坑からは、結桶のタガが出土している。幅は1.5cmを測り、用材は真タケもしくは孟宗竹と思われる。

6、Ⅱ区溝出土遺物（第29・30図、図版13）Ⅱ区で検出された11条の溝状遺構の中で、報告可能な遺物が出土した第1・2・4・5・8・9号の6条について報告する。

第1号溝（第29図—8・19）

8は青磁の碗である。釉は灰オリーブ色を呈し、貫入はない。素地は灰色で気泡を含みやや粗い。19は瓦質土器の火鉢で、胴部に雲形の窓が認められる。胎土は黒灰色を呈し、砂粒を含んで粗い。器面調整は外面がヘラミガキ、内面が荒いナデによる。

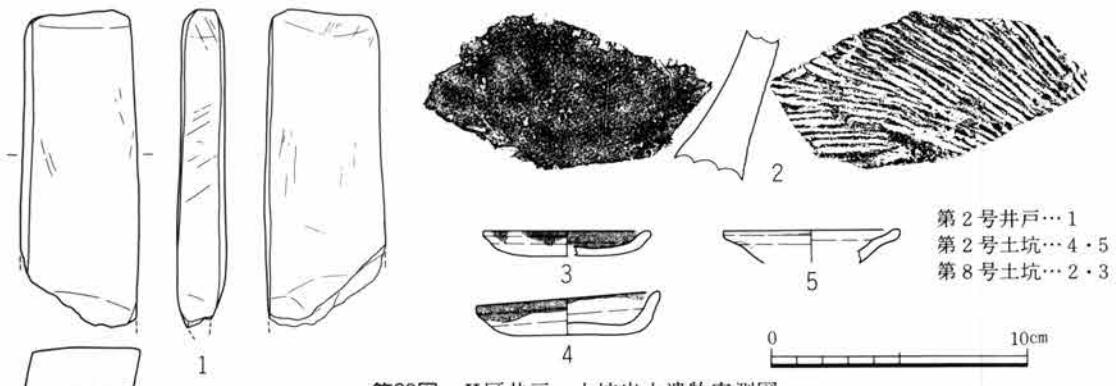
第2号溝（第 図—1・7・10~14・16~18・21）

1～4は土師質土器である。1は器壁が厚く端部をつまみナデしている。胎土は灰白色を呈し緻密である。2は体部は横ナデを施し、内底立ちあがり部に指圧痕を残す。胎土は浅黄橙色を呈し密である。3は器壁がうすく体部に強い横ナデ痕を残す。胎土は橙色を呈し緻密である。4は器壁が厚く体部に強い横ナデによる稜を残す。胎土は浅黄橙色を呈し緻密である。

5・6は瀬戸焼である。5は灰釉皿で、口径10cmを測る。釉はオリーブ黄色を呈し、口縁部に付け塗りされている。素地は灰白色でやや粗い。

7・10・12は青磁である。7は口径13.6cmの碗で、釉は透明感のない緑灰色を呈する。素地は灰白色でやや粗い。断面には補修痕を残す。10は小型の鉢の底部片であろう。釉は明緑灰色を呈し、疊付を含め全体に厚く施される。貫入はない。素地は灰白色で堅緻である。高台内面に砂目痕が付着している。12は香炉片で、釉は灰オリーブ色を呈し、外面から内面下半まで施される。素地は灰白色を呈し堅緻である。11は白磁の皿である。釉は透明感のない乳白色を呈し、素地は黄灰色を呈し密である。13は漆器碗の底部片。

13は漆器碗の底部片である。高台下半を失うが高台の高さは1.9cm前後と推定される。外面が黒漆、内面が朱漆塗りで、用材は横木取りである。



第28図 II区井戸・土坑出土遺物実測図

14は珠洲焼の擂鉢で、口唇部に波状文が施される。胎土は灰色を呈し緻密である。焼成はややあまい。おろし目は幅2.8cmに7条である。16は越前焼の鉢である。胎土は暗赤灰色を呈し、砂粒を多く含んで粗いが、焼成は良い。器面調整は内外面とも横ナデで、口縁端部に一条の沈線が巡る。17・18は瓦質土器の火炉である。17は口縁外面に型づくりの櫛子格子が巡る。胎土は褐灰白色を呈し粗い。焼成はあまい。内面には煤状のものが付着している。18は胴部に窓が認められる。胎土は褐灰色を呈し、砂粒を含んでやや粗い。焼成はややあまい。器面調整は外面がヘラミガキ、内面が荒いナデによる。21は箸である。径は0.6cmを測る。上端を欠損するが中央部は多角形に削られ、丸箸を思わせるつくりである。用材はスギと思われる。なお、同溝からはこれらの他の黒漆塗りの漆器片が出土している。

第4号溝（第29図—9・15・20）

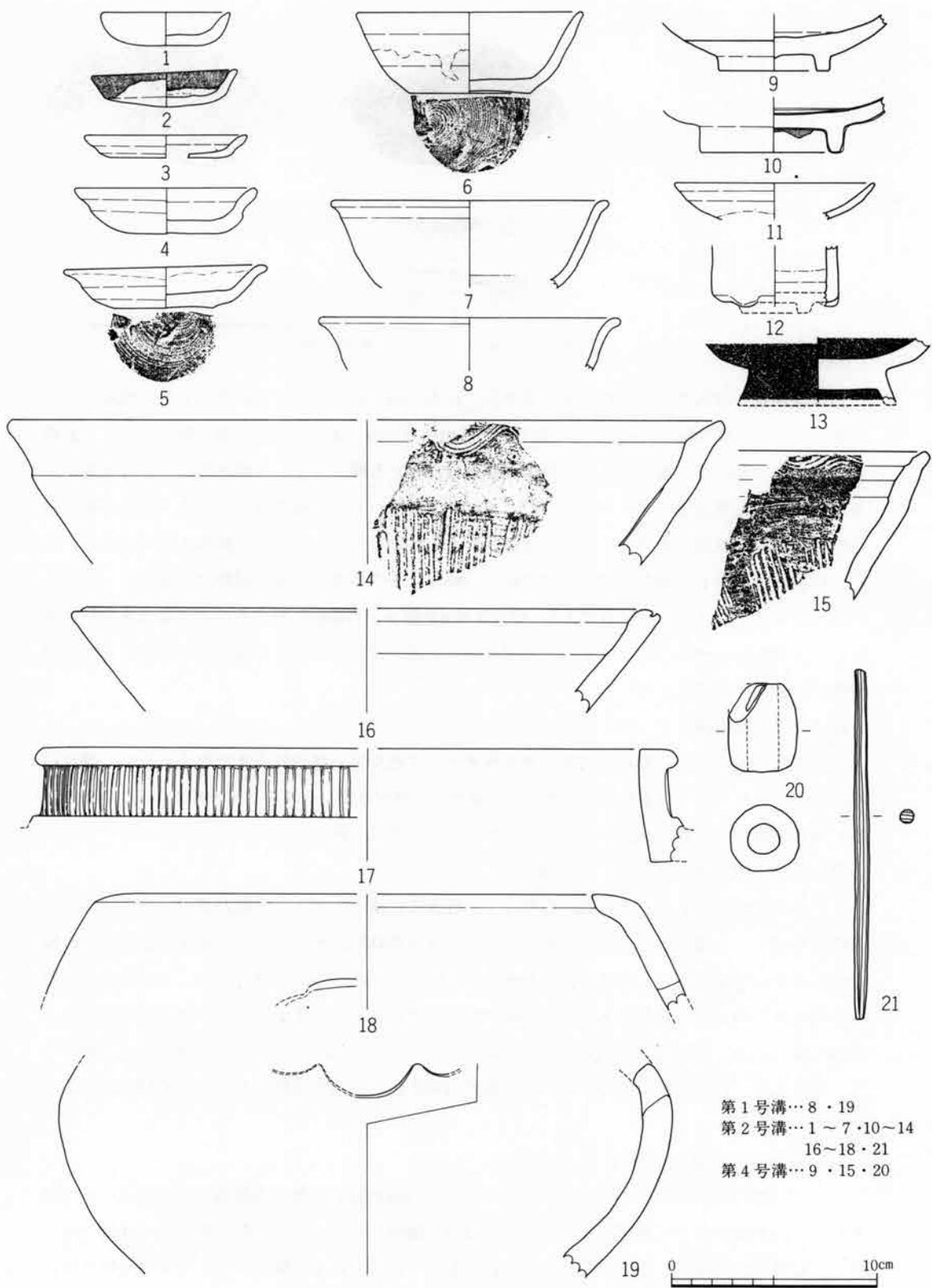
9は青磁の碗である。釉は透明感のある灰オリーブ色を呈し高台外面まで施されるが、畳付の釉は削りとられている。素地は灰白色を呈し緻密で、焼成は良い。おろし目は幅2.2cmに7条である。珠洲焼編年のVI期に比定されよう。20は土師質の管状土錘である。

第5号溝（第30図—4・6・9・10）

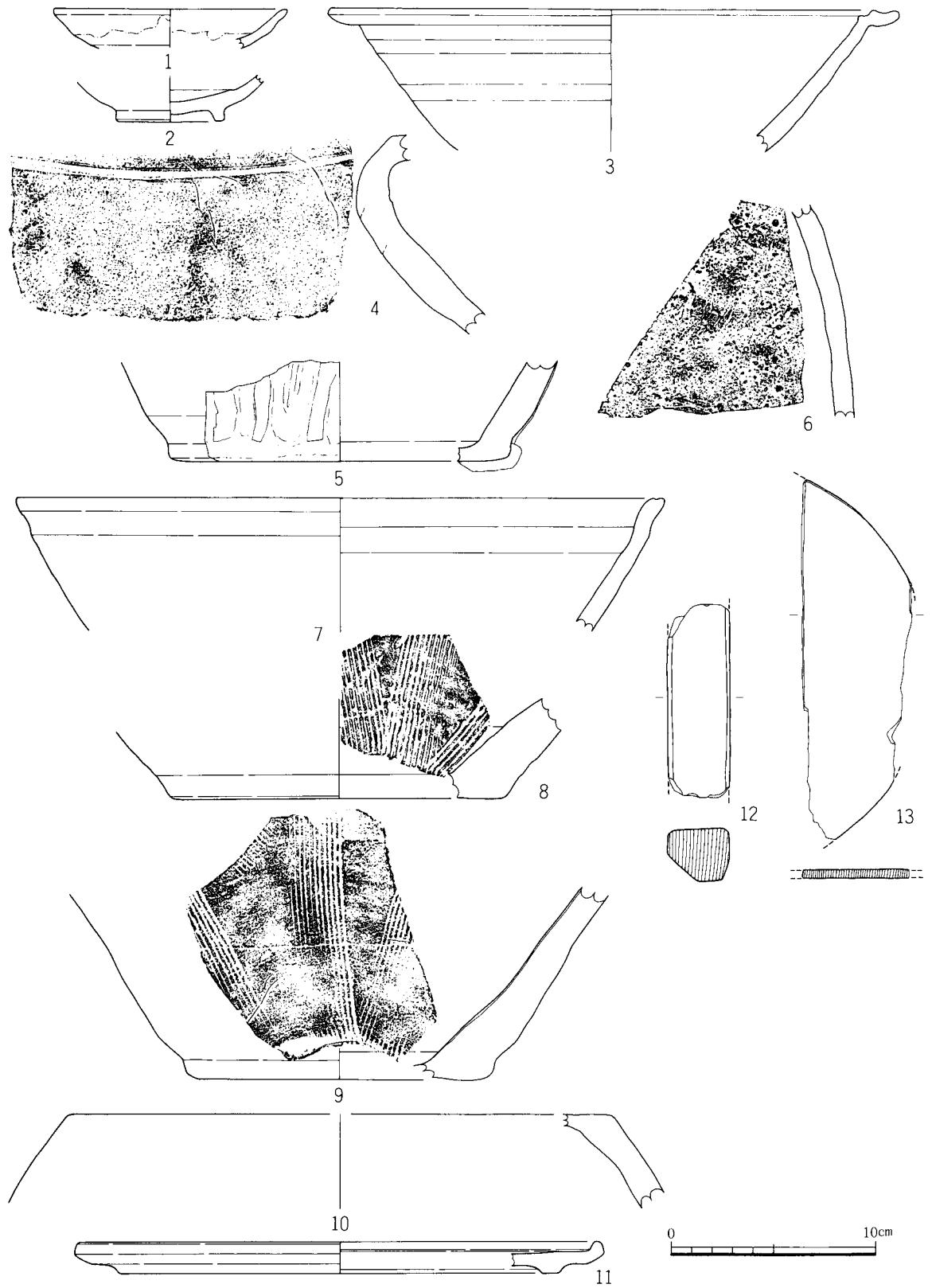
4・9は越前焼である。4は甕の頸部片で、外面には横ナデによる沈線が巡る。胎土はにぶい赤橙色を呈し、少量の砂粒を含むが焼成は良い。9は擂鉢で、胎土はにぶい茶褐色を呈し、砂粒の含みは少なく密である。焼成はややあまい。おろし目は幅2.7cmに11条である。6は信楽焼の胴部片である。胎土は灰白色であるが、外面はにぶい黒褐色化を呈する。表面には透明な吹き出しが多く見られる。器面調整は内外面とも荒いナデによる。内面の器面の凹みに漆状の付着物が入る。10は瓦質土器の火炉である。胎土は外面が明褐灰色、内面が暗灰色を呈し、砂粒を含んでやや粗い。

第8号溝（第30図—1～3・7・11～13）

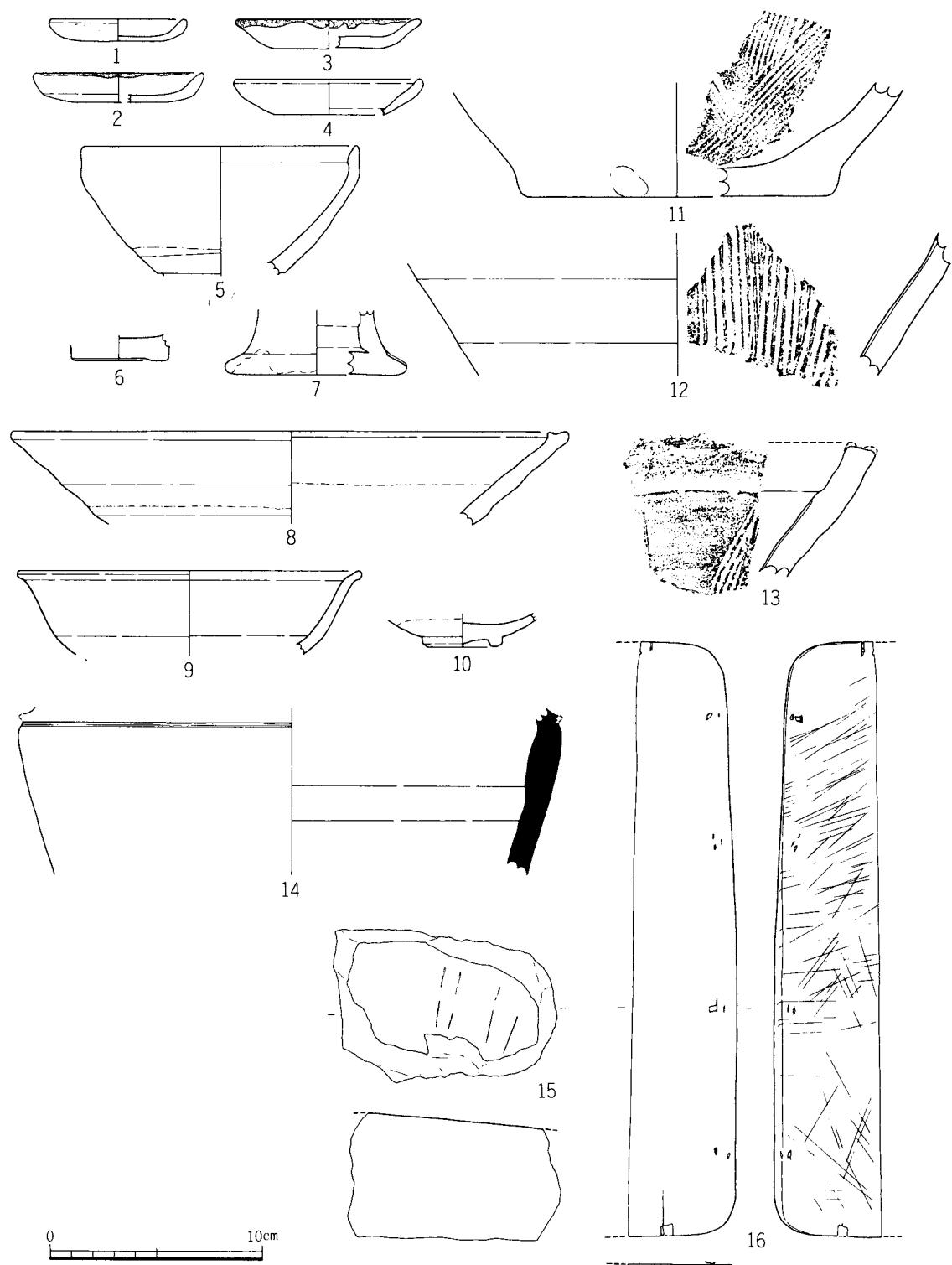
1・3は瀬戸焼である。1は灰釉の皿で、口径11.4cmを測る。釉は透明感のある灰オリーブ色を呈し、内外面中程まで施される。素地は灰白色で緻密である。3は灰釉の盤で、口径28.2cmを測る。口縁を外に折り、口唇部内側に低い隆帯を作り出している。釉はオリーブ黄色を呈する。2は白磁の皿である。釉は透明感のある明オリーブ灰色を呈し器面全体に施されるが、高台内面



第29図 II区溝出土遺物実測図 1



第30図 II区溝出土遺物実測図 2



第31図 II区包含層出土遺物実測図

や畳付は一部露胎している。7は越前焼の鉢である。口径32cmを測り、口縁端部に沈線が巡る。胎土はにぶい赤褐色を呈し、小礫を多く含んでやや粗いが、焼成は良い。

11は漆器の盤である。全面にうすい黒漆が塗られ、高台内面の削りは荒い。12は長方形体の木片である。裏側に鋸目が残るが、用途は不明である。13は曲物の底板で、推定径19.6cm、厚さ0.3cmを測り、用材はヒノキである。なお同溝からは、これらの他に鳥帽子側縁と推定される漆片が出土している。

第9号溝（第30図—5・8）

5は加賀焼の甕の底部片である。外面には灰オリーブ色の自然釉が流れている。胎土はにぶい赤褐色を呈し、砂粒を含むが密である。8は越前焼の擂鉢である。胎土は黄灰色を呈し、焼成があまい。おろし目は幅3.1cmに12条である。

7、Ⅱ区包含層出土遺物（第31図）

1～4は土師質土器である。1は口径6.3cmの小型の皿で、底部が薄く体部には指頭による圧痕が残る。胎土は灰白色を呈し、砂粒をほとんど含まず緻密である。2は体部に一段横ナデを施す。胎土は浅黄橙色を呈し密である。3は体部横ナデによりやや外反する。胎土は浅黄橙色を呈し、砂粒を含んでやや粗い。4は胎土は橙灰白色を呈し、砂粒をほとんど含まず密である。

5～8は瀬戸焼である。5・6は天目茶碗である。5は口径12.8cmを測り、釉は茶褐色を呈して素地は灰白色を呈し密である。6は底部片で底径4.6cmを測る。内面の釉は暗黒褐色で、外底には鉄化粧が施されている。素地は黄灰白色を呈しやや粗い。高台底部に3ヶ所の目痕が残り、断面には補修痕が認められる。7は灰釉の花瓶の台脚部片である。釉は暗オリーブ色を呈し底部近くで厚く釉溜りをおこしている。素地は灰白色を呈し粗い。8は灰釉の鉢で、口径26.4cmを測る。口唇部内側に断面三角の隆帯を作り出す。釉は灰オリーブ色を呈し、内外面中ほどまで施される。素地は灰色で緻密である。10は白磁の皿で、底径3.8cmを測る。釉は透明感のある乳白色を呈し、外面中ほどで止まる。素地は灰白色で密である。

11・12は珠洲焼の擂鉢である。11の胎土は灰色を呈し、砂粒の含みは少なく密である。おろし目は幅2.8cmに10条である。内面は摩耗し平滑になっている。12は胎土は灰色を呈し、おろし目は幅3cmに8条である。13は越前焼の擂鉢である。

14は須恵器で、長頸瓶の肩部肩である。胎土は黒灰色を呈し砂粒はほとんど含まない。15は石臼の下臼片である。上面には放射状の目あとの一部が認められる。石質は花崗砂岩質である。16は折敷の底板である。法量・作りとも工区・堀出土の折敷と同じで、裏面には細かい刃跡が多数認められる。用材はヒノキの柾目板である。

第5章 昭和62年度の調査 (徳光ジョウガチ遺跡・徳光シロド遺跡)

第1節 調査の概要

御手洗・出城地区県営は場整備事業徳光工区にかかる埋蔵文化財発掘調査は、他の事業工区と同様に前年度に実施した分布調査の結果をもとに、田面は盛土施工とし、水路の掘削によって埋蔵文化財に影響が生ずる排水路に限定して調査の対象とした。県松任土地改良事務所と協議を進め、昭和61度事業地内では4箇所で発掘調査を実施した。遺跡名は調査地の通称名から古屋敷遺跡、ジョウガチ遺跡、シロド遺跡、聖光寺遺跡と呼称した。徳光古屋敷遺跡の調査成果は第1章に、徳光聖光寺遺跡は第4章に記したとおりである。ジョウガチ遺跡は徳光集落のすぐ西側位置する。シロド遺跡はその北側約100mに位置する。いずれも遺跡の規模は小さく、密度も薄い。調査時点ではシロド遺跡をBトレンチ、ジョウガチ遺跡をAトレンチとした。11月初旬から開始雨の日した調査は雨も多く強い粘土の発掘作業に苦労したが、何とか12月中旬に完了した。

徳光ジョウガチ遺跡の発掘調査は、シロド遺跡の調査が終了に近づいた11月18日から開始し、12月16日に完了した。調査は排水路部分の延長約220m、幅2mの約440m²を対象とした。耕作土の下にシロド遺跡と同様に中世に堆積としたと推定される、厚さ10~20cmの黒色粘土層が確認された。その下は灰褐色の砂質粘土となっていたが、黒色粘土を綺麗に取り除くと直径3~5cmの斑点状のシミが一面に見られ、中世段階での水田跡であったと推定された。斑点状のシミは稻株の痕跡だったようである。当時、県内の発掘調査で明瞭な水田跡が確認された例はなく、担当した湯尻も水田跡の実際を見たことが無かったから、調査時に土を削りながら何でこんなにシミが多いのかなあと不思議に思ったものの、更に下層から弥生土器が出土したため、順次掘り下げて行くことにした。結果的には黒色粘土層からは土師質土器の小片若干が出土し、中世の耕作土であったと考えられるのである。

中世の基盤層である約10cmの灰褐色粘土を下げると、暗灰褐色土が確認され、調査区の北側ではこの層に弥生後期の土器片少量が出土した。更にこれを掘り下げると明るい灰色の粘土層が存在して条痕文土器が散発的に出土した。包含層は厚いところでも15cm程度で細かい炭粒を含んでいた。地山は白灰色の強い粘土層でこれを切り込んで、土坑が確認された。狭い調査区内で全体を把握できたものはないが、4基の土坑を発掘した。

徳光シロド遺跡は徳光集落の西北側に位置する小規模な遺跡で、ほ場整備事業に先立つ事前の分布調査によって確認された遺跡である。遺跡は県道を挟んで北東側に、または徳光集落のある南西側に広がると推定されるが明確ではない。発掘調査は昭和61年11月4日から11月18日まで実施し、シロド遺跡の調査は排水路によって影響を受ける延長70m、幅2mの約140m²の発掘調査を実施した。成果としては耕作土直下の黒色粘土層及びその下に確認される平行溝が数条確認され、中世の土師質土器など若干が出土しただけである。

第2節 遺構

ジョウガチ遺跡の調査は徳光集落の東端にあたり、集落側から10m単位で調査区を設定した。耕作土の下にシロド遺跡と同様に中世以降に堆積した厚さ10~20cmの黒色粘土層が確認され、先述のように中世以降の水田跡であったと推定された。中世の基盤である約10cmの灰褐色粘土を下げるに、暗灰褐色土が確認され、調査区の北側ではこの層に弥生後期の土器片少量が出土した。更にこれを掘り下げると明るい灰色の粘土層が存在して条痕文土器が散発的に出土した。徳光集落側から約70cmの南北方向の農道付近までの灰色粘土層から散発的に土器が出土したが、包含層は厚いところでも15cm程度で細かい炭粒を含んでいた。地山は白灰色の強い粘土層で遺構はこれを切り込んで存在していた。遺構は、なかなか分かりにくかったが7基の土坑と溝2条が確認された。しかし、狭い調査区内で全体の形状や規模の全容を把握できたものはない。

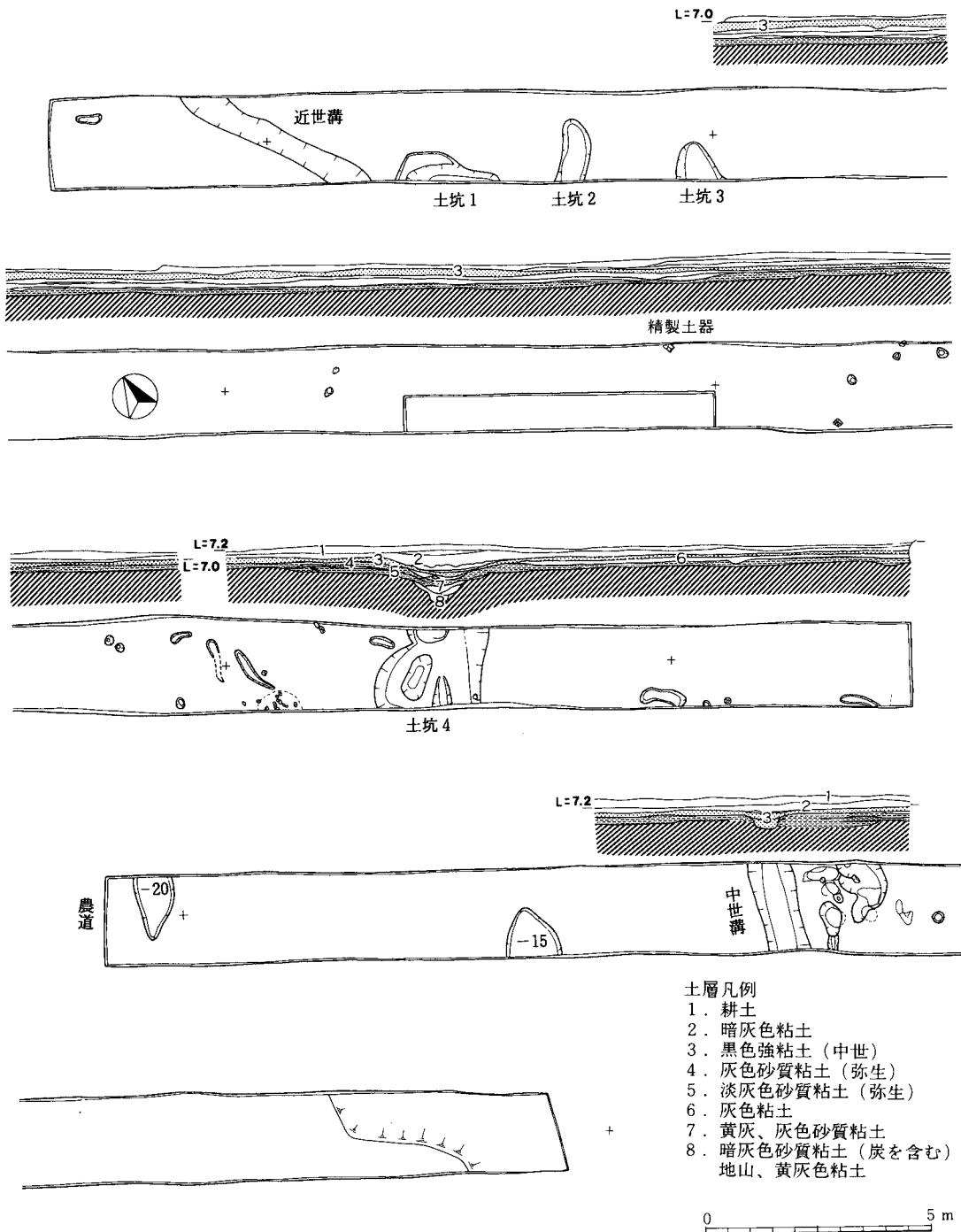
2条の溝の覆土は灰色の砂質粘土で耕作土直下の黒色粘土層を切って堀り込まれた溝で、中世以降の新しい時期の溝である。

第1号土坑は2区の南壁に沿って検出した土坑。約1/2程度の範囲を調査したと思われ、東西方向に長軸をおく橢円形の土坑で、全長212cm、幅36cm以上、深さ25~30cmを測る。覆土は炭化物粒を含む灰白色粘土で、若干の土器小片が出土した。第2号土坑も2区の南壁にそって検出した長橢円形の小型土坑。長軸約140cm以上、幅60cm、深さ約20cmを測る。遺物の出土はない。第3号土坑は2区の東端で南壁に沿って検出した土坑。調査区の外に伸びる長軸84cm以上、短軸約100cmの橢円形をすると推定される。深さ35cmで覆土は炭化物を含む白い灰色の粘土であった。3区~6区に地山直上から条痕文土器の破片が散発的に出土した。第34図1の精製土器も4区包含層からの出土である。

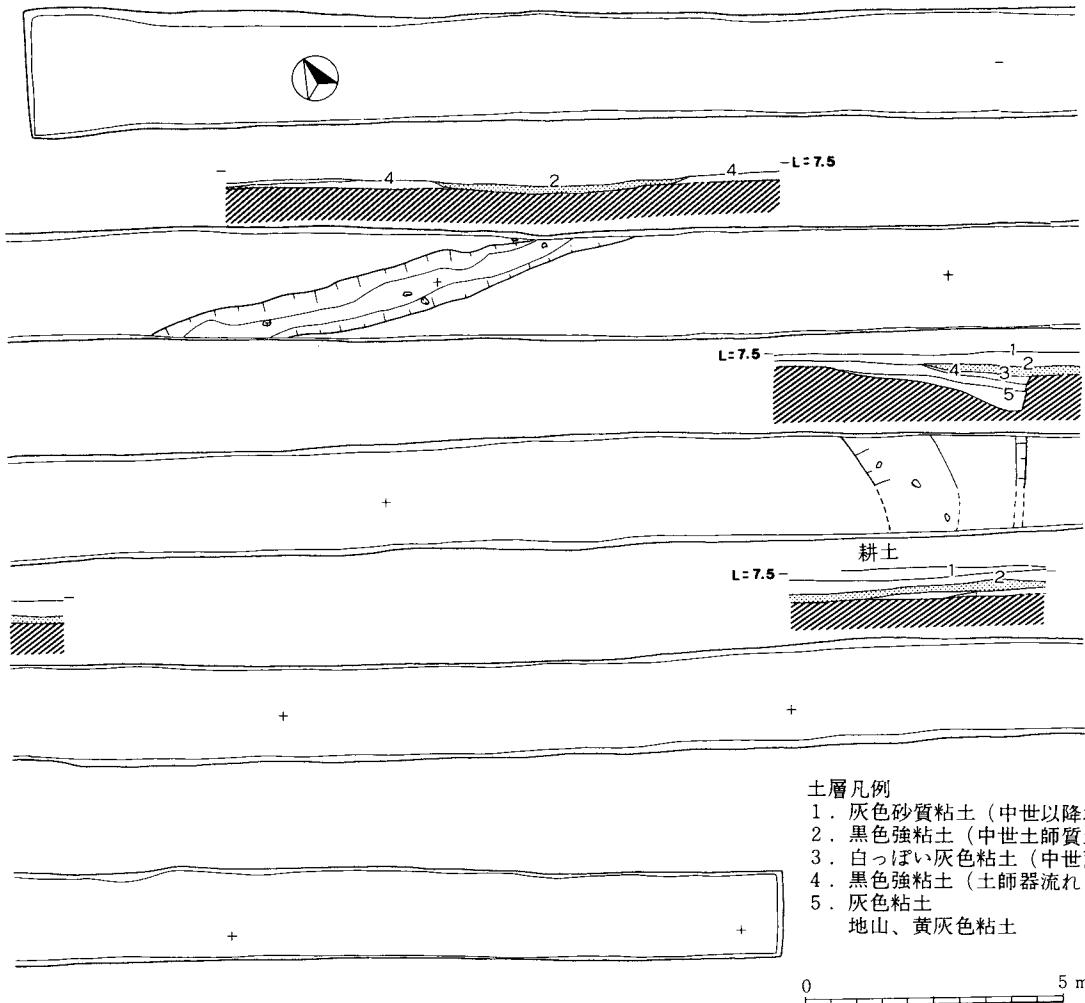
第4号土坑は長軸約160cm、短軸約140cmで、中央部は122cm×84cmの橢円形にくぼむ。深さは土坑の周囲は20cm程度くぼみ、中央部では約35cmを測る。覆土は炭化物を含む灰白色の粘土で土器の小片が出土した。第5号土坑は7区の北壁に検出した長軸約140cm、短軸約90cmの橢円形の土坑。深さは約18cmの浅い土坑であるが、検出時は土坑中央部の暗灰色粘土は中央程色が黒くなつて炭化物の量も増えていた。第6号土坑は8区の南壁に検出した長軸約100cm以上、短軸約124cmの橢円形の土坑。深さは約10cmと浅く、遺物の出土は無い。第7号土坑は9区の中世以降に掘られた溝に近接して検出した不整形の土坑。土坑としたが、地山である白灰色の強い粘土中にも炭化物を含む覆土は縞状につながって行き、地山の自然堆積時の間層を破った結果として、土坑の様に見えた可能性もある。南北約100cmの橢円形に炭化物の分布が認められた。

シロド遺跡では延長160mのトレーナーを設定したが、15~20cmの耕作土を除くと、中世の土師質土器を含む10~20cmの黒色粘土があり、10cmばかりの灰色粘土があつて白灰色粘土の地山となる。

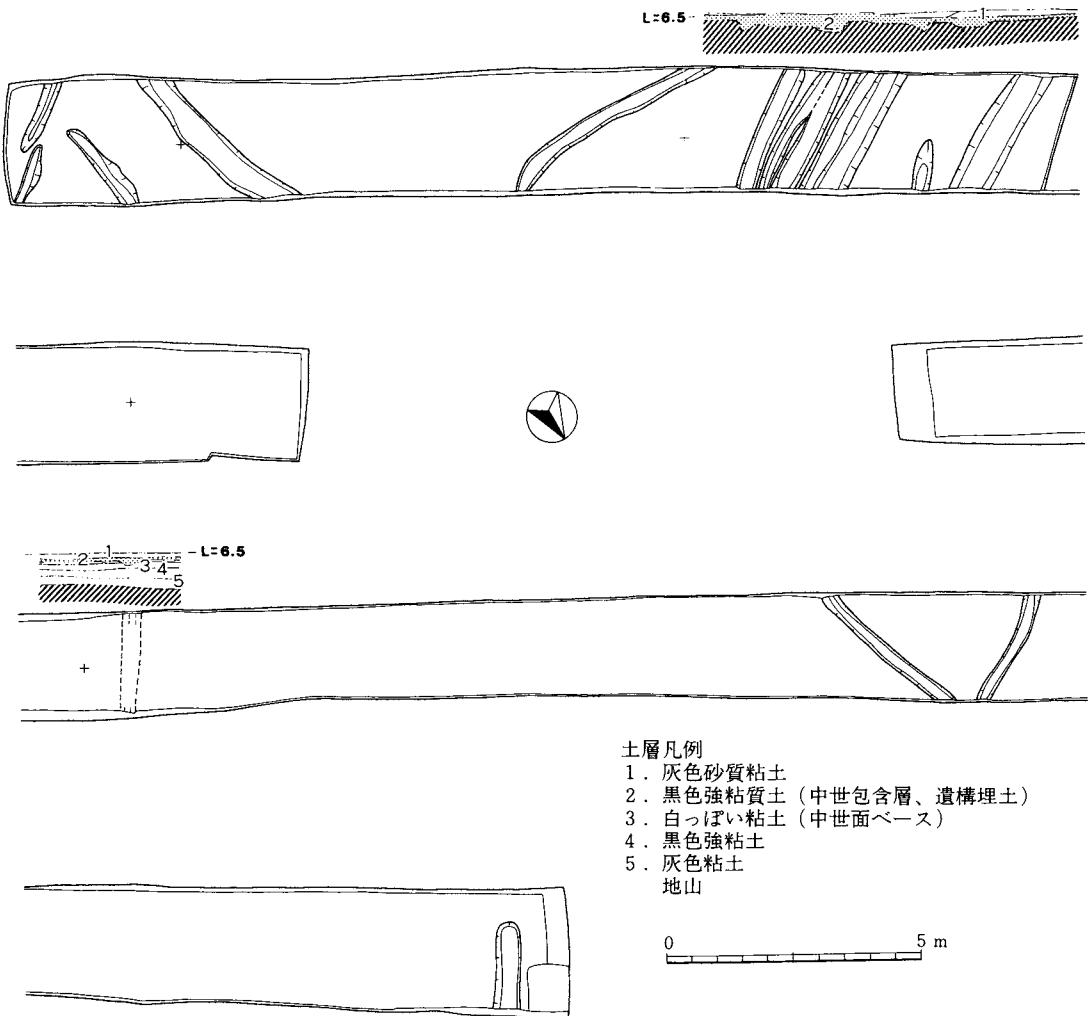
調査区の北端、約延長20mの範囲では遺構密度が高く幅20~50cm、深さ10cm前後の北西~南東方向に平行する1・2・5~11号の9条の細い溝が検出された。覆土は灰褐色の砂質粘土で中世



第32図 徳光ジョウガチ遺跡遺構実測図(1)



第33図 德光ジョウガチ遺跡遺構実測図(2)



第36図 德光シロド遺跡遺構実測図

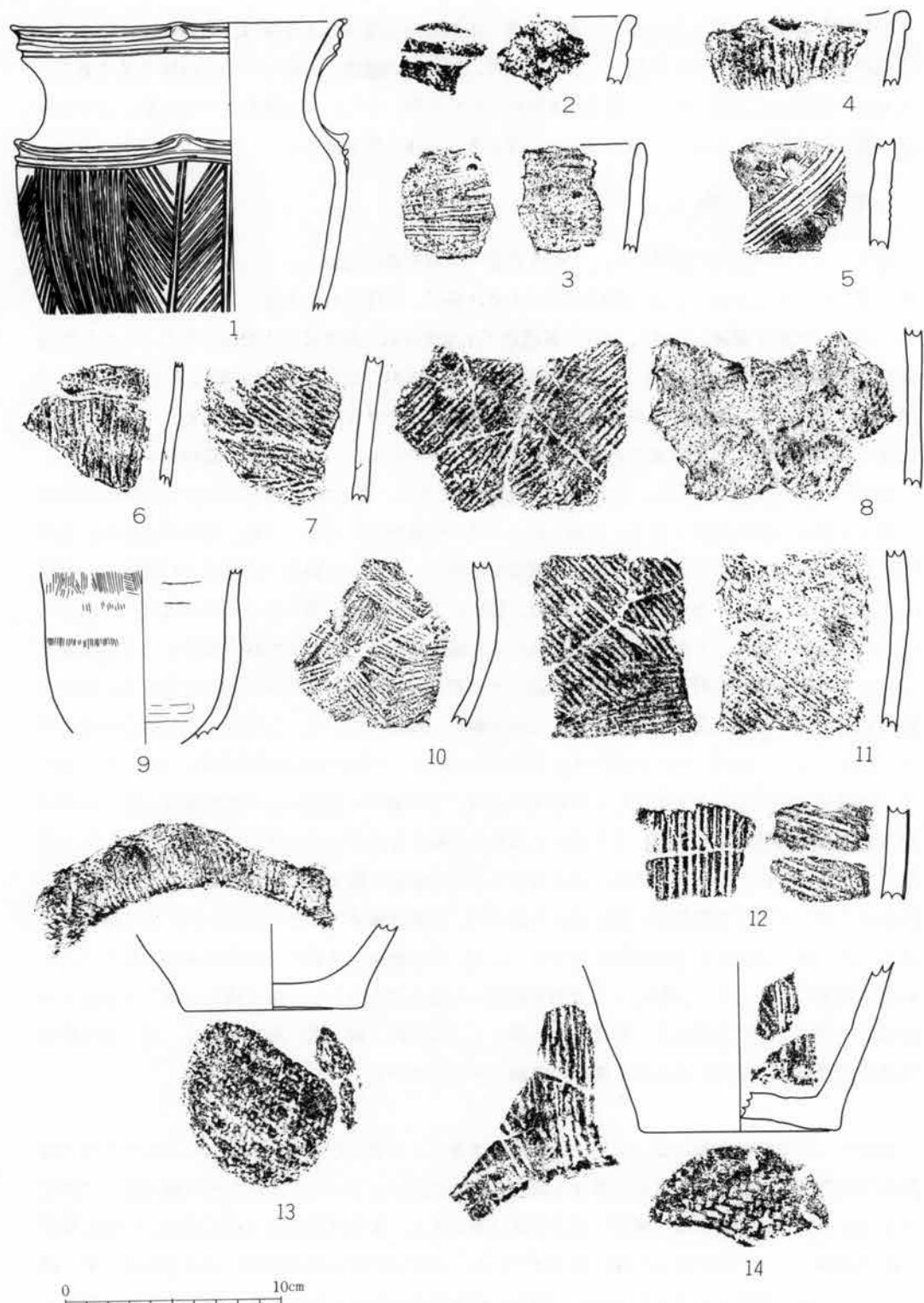
またはそれ以前の畠溝と思われた。逆に北東一南西方向に延びる4号溝は、幅約60cm、深さ10cm未溝の浅い溝で黒色の粘土が覆土となっており、灰褐色の畠溝より新しい中世段階の溝である。それから約20mは遺構が無く、覆土が黒色粘土の12号溝、さらに14m離れてハの字型に13・14号溝（覆土灰色粘土）がある。幅20cm前後、深さ数cmの浅い溝である。

第3節 遺物

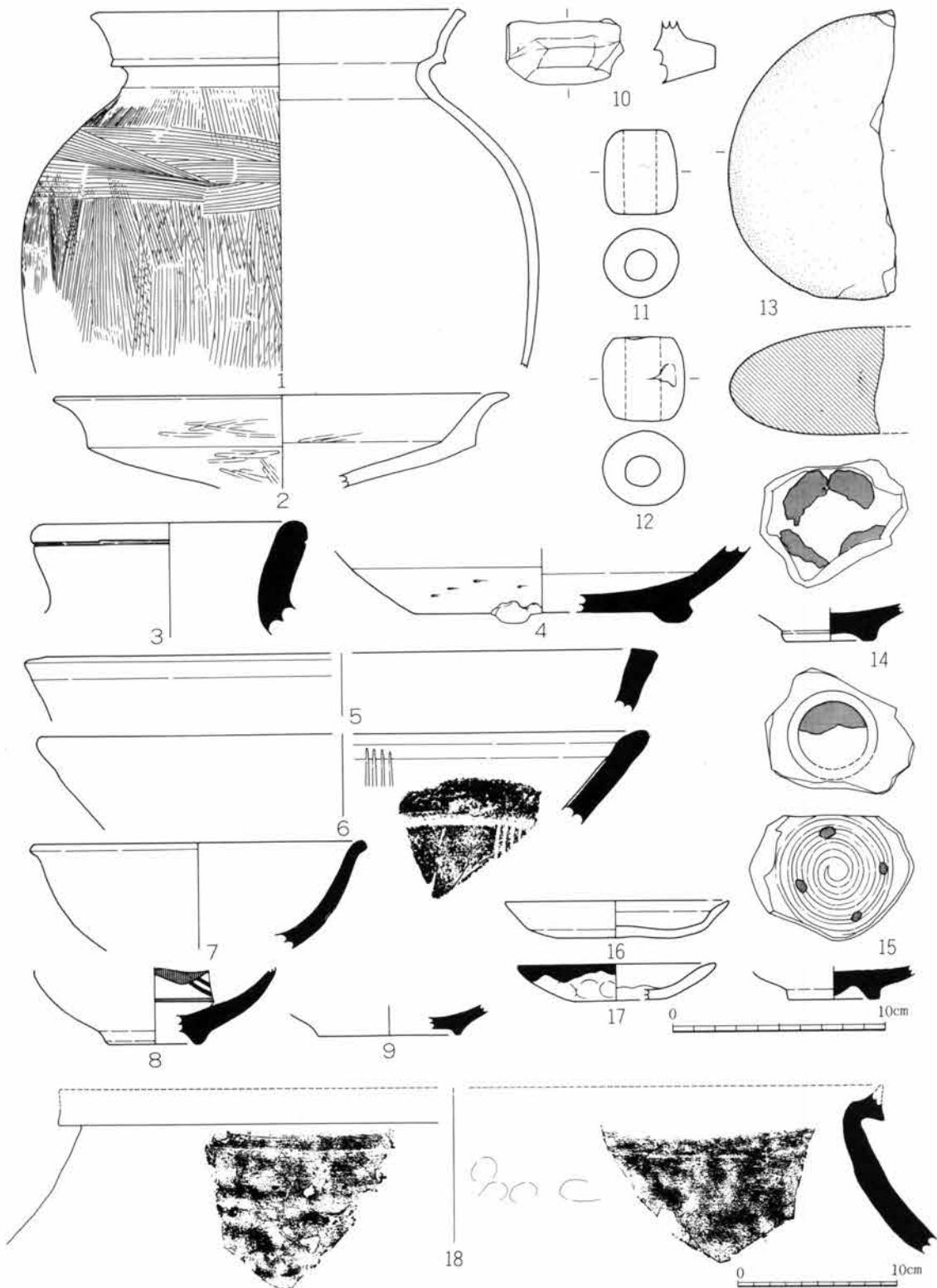
徳光ジョウガチ遺跡の調査によって弥生前期～中期初頭に比定されている柴山出村式土器の範疇に含まれる土器が出土した。柴山出村式土器は最近、松任市八田中遺跡（石川県立埋蔵文化財センター『八田中遺跡』1988）、松任市乾遺跡（社団法人石川県埋蔵文化財保存協会『石川県埋蔵文化財保存協会年報2』1991など）でも出土しているが、条痕文系の土器は各個体がバラエティーに富んでおり、なかなか形式としての実態をまとめきれない状況にもある。ジョウガチ遺跡土では坑や溝からも条痕文のある土器小片が出土しているが、遺構に伴う資料は少ない。

第34図1は包含層から出土した1/3程度の破片であるが、復元すると口径15cmの四単位の突起を持った波状口縁の精製土器で、口縁と肩に3条の沈線を巡らせる。口縁と肩に押圧を加えて四等分し、体部下半にも2本の平行線で文様帯を分割している。口縁部と肩部の平行沈線も四分割に割り付けした後に1条づつ描かれており、押圧による突起部を乗り越えることはない。体部下半はこの単位を更に二分割して、矢羽根状の平行線文様帯と上下の平行線文様帯を交互に配置している。胎土中には大粒の砂粒を含み、研かれた頸部無文帯や体部に炭化物が付着する。本例の様な施文構成は加賀市柴山出村遺跡出土土器と極めて類似しており、矢羽根と平行線の文様を交互に配置する全く同種の肩～体部下半の破片資料がある。（柴山鴻編纂委員会編『柴山鴻』1956）2は口縁部の小片で、2条の太い平行線文が巡る。3は細かい波状口縁の粗製深鉢小片。外面は横方向の条痕調整がみられる。4も恐らく波状の口縁となる小片で4区のPitから出土した。灰橙色をし、縦方向の条痕文がある。5は6条1単位の条痕を施文した破片。6～8・11は粗製の条痕文土器。9は小型精製壺と推定される破片で、外面は極めて細かい刷毛状具による調整痕が認められ、煤？と思われる炭化物が付着している。10は細かい条痕による整形調整を様々な方向に繰り返すことにより、文様としての効果を狙ったものであろうか。緩く曲がる破片は壺形土器体部の一部のようにも思える。12は外面に深くて（深さ約1mm）荒い条痕を施す。13・14は粗製深鉢の底部破片。二点とも底面に網代の痕跡をとどめている。

徳光シロド遺跡の調査によって出土した遺物は多いとは言えないが、第37図に示したように弥生時代後期、古代、中世、近世の様々な時代の遺物が出土している。1は有段口縁の甕で口径17cmをはかる。口縁の造りは丁寧で、段の外部は突出する。体部外面は縦に刷毛調整した後に頸部を横に調整して、内面は削って薄く仕上げている。2は口径21.6cmの高杯。3は須恵器の壺口縁。4は中世の瀬戸焼鉢の底部とみられ、三箇所に粘土を張り付けて台としている。5は珠洲焼のすり鉢、6は越前焼のすり鉢で6には卸し目がある。7は口径15.6cmの青磁碗、淡い緑青色をした釉は緻密である。8は近世の染付けの碗、器表に淡い青色をした線模様がある。割れ口を漆で

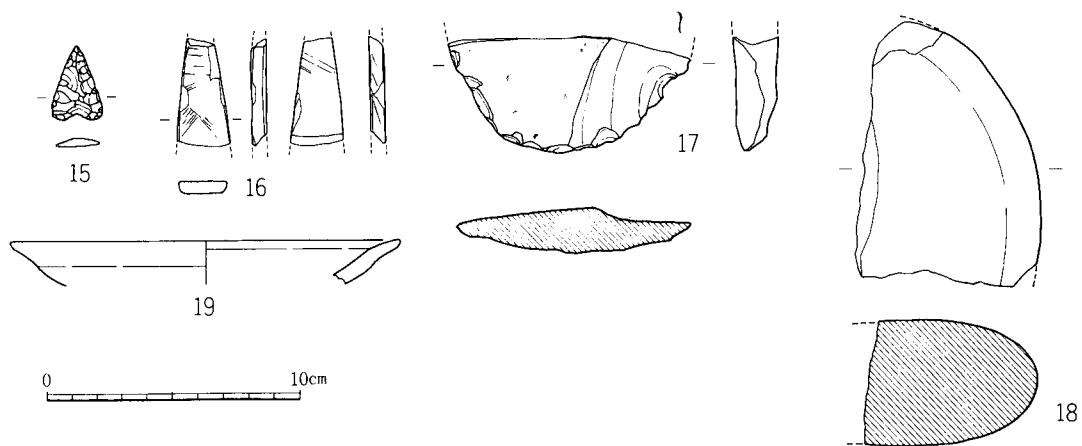


第34図 德光ジョウガチ遺跡出土遺物実測図(1)



第37図 德光シロド遺跡出土遺物実測図

繋いで補修した痕跡がある。9は底径3.8cmの瀬戸焼の皿。10は瓦質土器で火鉢の把手と思われ、長方形の突起がある。表面は黒く断面は灰色をしている。11・12は土師質の土錐。11は35g、12は46gの重さを計る。13は最大径13.8cmの川原石を磨石として利用したもの、石の中央部が滑らかになっている。14・15は近世の陶磁器、いずれも内面に砂目痕が認められる。16・17は土師質土器、16は口径10.6cm、17は口径9.2cm、高さ4.6cmを計り、口縁部に油煙痕がある。18は口縁端部を欠くが復元口径約54cmの加賀焼の甕である。1・2の弥生時代後期から古墳時代にかけての土器はA区～B区の、白灰色粘土の中世遺構面の下にある約10cmの灰色粘土から出土した。4～7、16～18の中世の遺物は、耕作土直下の黒色粘土またはその下の灰色粘土層から出土している。



第35図 德光ジョウガチ遺跡出土遺物実測図(2)

第6章 昭和63年度の調査（平木D遺跡）

第1節 調査の概要

県営は場整備事業の御手洗・出城地区徳光工区は、松任市徳光町の集落を取り囲む水田約73haが事業範囲である。この徳光工区の県営は場整備事業は、前年の昭和62年度に大幅に進捗したことで、昭和63年の春には徳光工区の北東部約10haと東部約7haの二箇所を残すだけとなった。

この徳光工区を所轄する石川県松任土地改良事務所は、昭和63年度の県営は場整備事業として、徳光工区内に残る二箇所の未工事区域17haを選定したが、この二箇所の事業予定には、それぞれ過年度の分布調査により新規の遺跡が発見されていた。そのため、当センターと松任土地改良事務所との協議で、工区内の北東約10haの事業予定地に施行される排水路予定地内の排水路については、遺跡（北安田北遺跡）への影響が少ない仮排水路とし、その調査を次年度に行うことで合意した。

これにより昭和63年度の発掘調査は、工区北東部の事業地に計画された排水路の予定地で行った。調査範囲は幅2m、延長約350mで、面積約700m²とした。現地における発掘調査は昭和63年7月7日から同年7月26日にかけて実施した。調査に係る費用は、県農林水産部耕地整備課の負担および文化庁の補助による。

発掘調査の結果、排水路東端で事業地の東側を南北に走る市道に並行する1～6区を中心に、弥生時代後期の溝14条・土坑・ピット等の遺構が検出された。11区以西から34区までは、水稻耕作に関係したと考えられる浅い溝状遺構や小ピットが散見された。これらの状況から本遺跡は、弥生時代後期の小規模な集落遺跡の周辺部と推測された。

また、本遺跡の名称は、発掘調査から報告書作成にいたるまで、全て徳光遺跡としてきたが、市道を挟んで隣接する平木工区での平成元年の分布調査と平成2年の平木D遺跡の発掘調査によると、遺跡の中心は市道より東方に広がる平木D遺跡側にあり、本遺跡調査区は平木D遺跡の一角に位置することが明らかとなった。そのため徳光遺跡として識別するより、平木D遺跡に包括した上で報告したい。

第2節 遺跡の位置と層序

平木D遺跡は、松任市徳光町地内から同市平木町地内にかけて広がる小規模な集落遺跡である。周囲は手取川扇状地の北西部にあたる水田地帯で、弥生時代後期から古墳時代前期に営まれた小規模な集落遺跡が群在する地域として知られ、本遺跡もその一つに数えられている。

遺跡は標高10m前後の水田下に広がり、西方の日本海までは1.1kmと近距離に位置する。海岸には北の安原海岸砂丘へ続く小砂丘が認められ、砂浜海岸ながらも長年の日本海の侵食により直線的な海岸線を呈する。また、徳光町周辺は手取川扇状地の扇央稜線（鶴来町鶴来駅から徳光町で結ぶ線）と海岸線が接合する地点でもあり、本遺跡の北を流れる野本川や南を流れる大川など



第38図 調査区位置図

の小河川は、かつてこの付近を流れていた手取川支流の川筋が残ったものと考えられている。現在両河川とも扇状地の用水網である七ヶ用水の支線として整備されている。

本遺跡の基本層序は、扇状地の標高5～10mの地下水自噴地域に分布する遺跡の多くで認められ堆積土層と同一のもので、概ね次のとおりである。

第1層は現在の水田耕作土で褐灰色砂質土層、第2層は旧耕作土で灰色粘質土層、第3層は遺物包含層で黒褐色粘質土層、第4層は地山で遺構が検出された1～8区にかけては淡黄色砂質土層であるが、9・10区では粘質土層へと変化し、11区より西方では地山が降下するのにともない粘土質が強まる。また、第3層も11区より西方では遺物を包含しない黒色粘土層へと変化する。

第3節 遺構と遺物

1 遺構

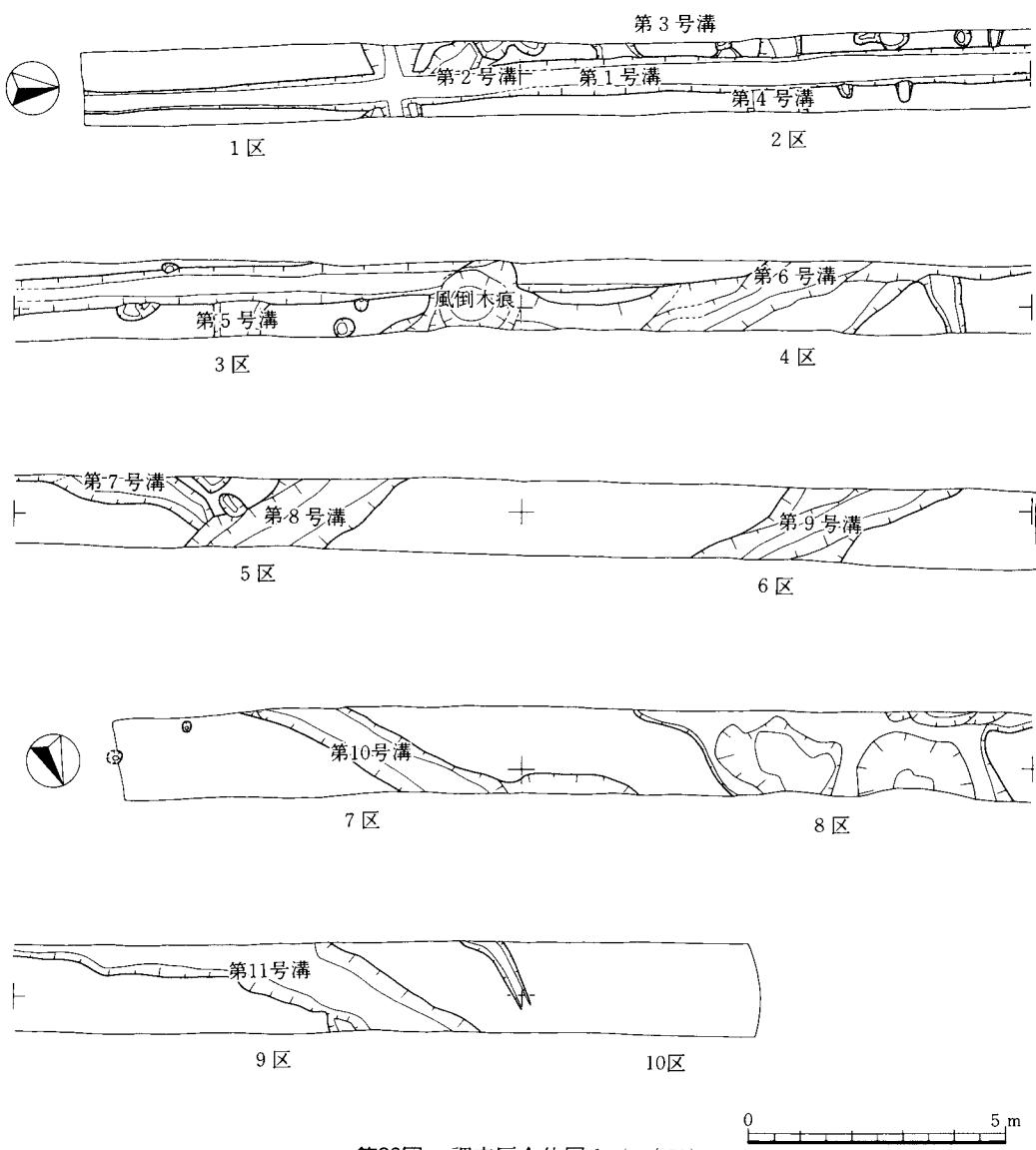
本遺跡調査区から検出された遺構は、1～6区が9条の溝とピット、7～10区が浅い溝2条と土坑状遺構が主なものである。第1～11号溝を中心報告する。

第1号溝（第43図）

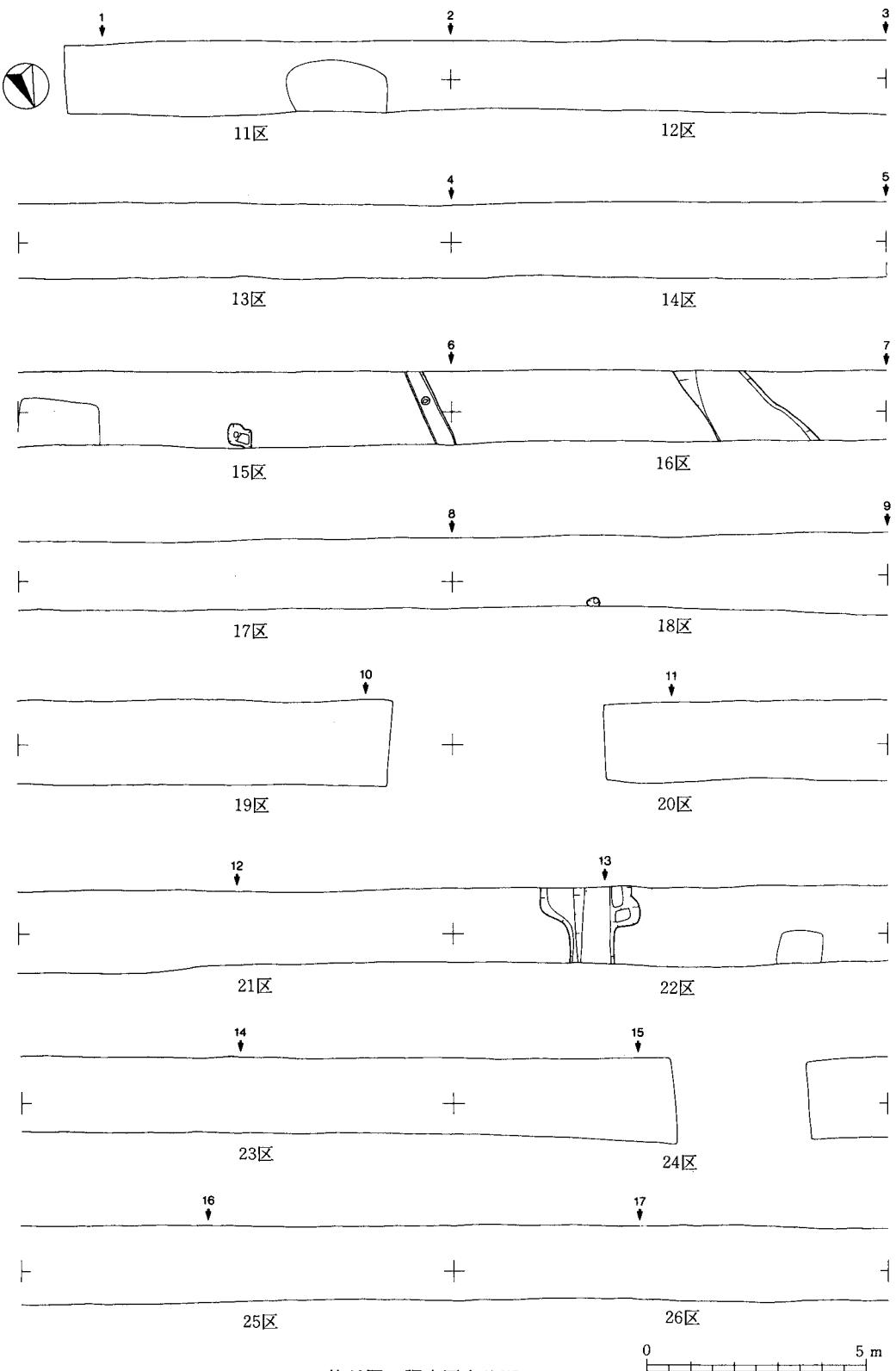
1～4区にかけて南北に走る溝である。上幅50～70cm、深さ20cm前後を測る。覆土は1区で交差する旧水田排水溝と同じ濁灰色粘質土で、近代以降の溝と考えられる。

第2号溝（第43図）

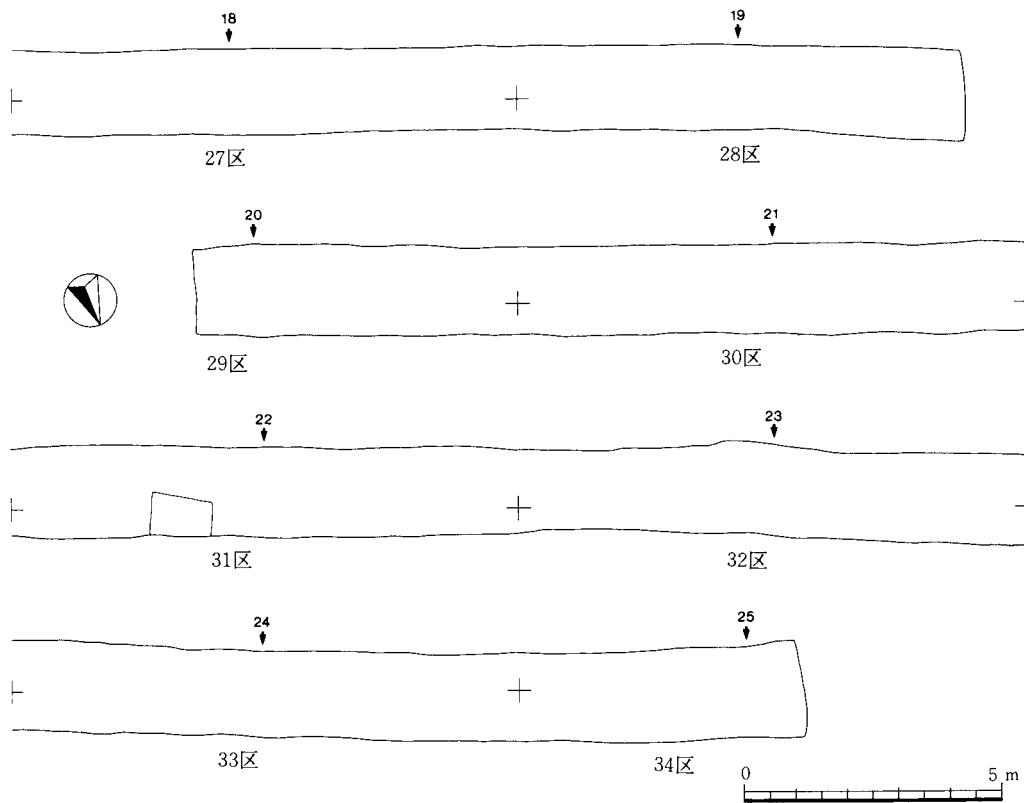
1区北側に位置する溝であるが、第1号溝と旧水田排水溝によって切り込まれている。覆土は



第39図 調査区全体図 1 (1 / 150)



第40図 調査区全体図 2 (1 / 150)



第41図 調査区全体図 3 (1 / 150)

濁灰褐色粘質土で、周囲のピットと同一である。

第3号溝（第43図）

2区南側に位置する浅い溝で、上幅78cm、深さ7cmを測る。不整形で土坑の可能性もある。

第4号溝（第43図）

2区中央に位置する東西方向の溝である。上幅は110cm前後と広いが、深さは7cmと浅い。覆土は暗黄灰色砂質土が均一に堆積している。北側に分布するピットと同時期の溝と考えられる。

第5号溝（第43図）

3区中央に位置する溝状遺構である。上幅100cm前後ながらも浅く、覆土は包含層に近い暗灰色砂質土層で、本遺跡の中でも後出的な遺構である。

第6号溝（第44図）

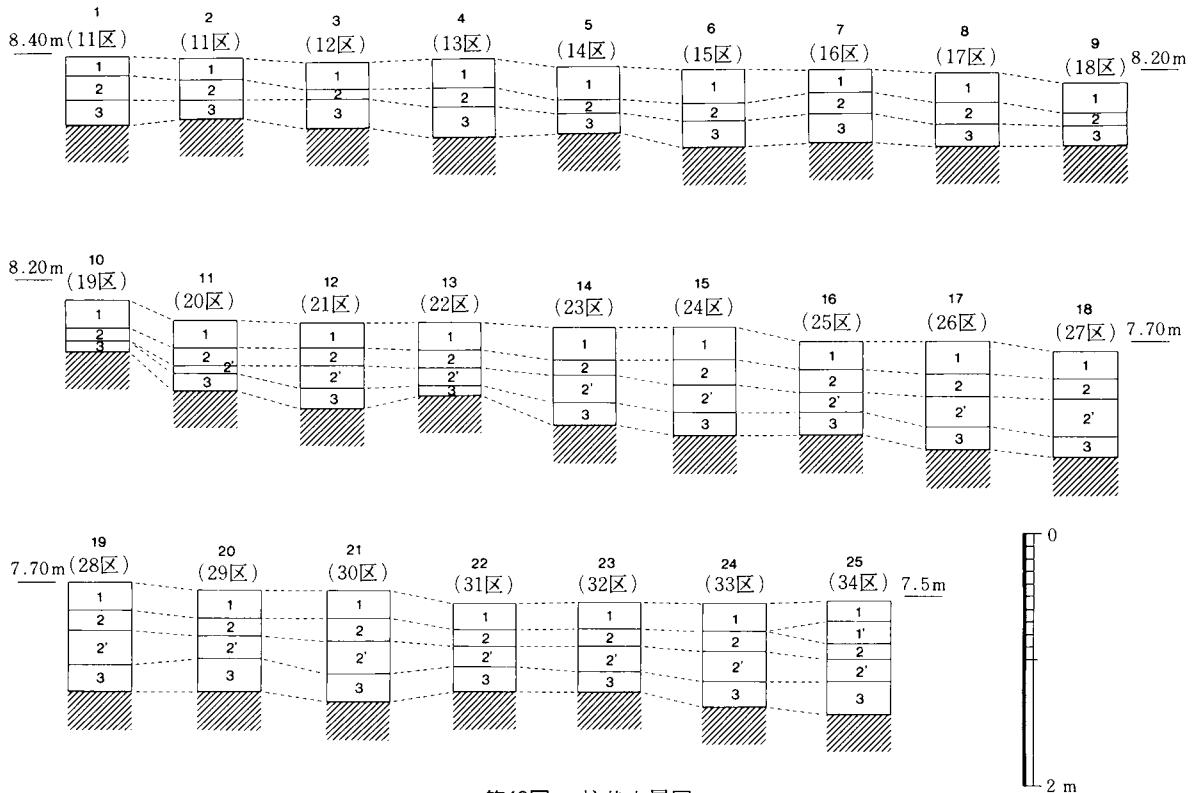
4区中央に位置して調査区を斜行する。上幅100~120cmと変形するが、深さは20cm前後を測る。底は平坦で、標高7.8mと一定している。覆土は地山土の二次堆積が北側に認められるが、主体は灰色砂質土層である。

第7号溝（第45図）

5区の南側に位置して第8号溝と切り合う。上幅も一定せず、深さも8cmと浅い。

第8号溝（第46）図

5区中央に位置して調査区を斜行する。上幅150cm、深さ30cmで安定した形状の溝である。底も



第42図 柱状土層図

平坦で、覆土は両側に地山土の二次堆積が認められる。主体は濁黄灰色粘質土層である。覆土や形状の点で、第6号溝に似ている。

第9号溝（第44図）

6区の中央に位置して調査区を斜行するが、その方向は4区の第6号溝に近いものである。上幅は80cm前後、深さ25cm程で安定している。覆土は地山の二次堆積が北側に認められるが、主体は灰色粘質土層と暗灰色粘土層である。覆土堆積と溝底の状況から、本溝は滯水性の強い溝であったと考えられる。

第10号溝（第45図）

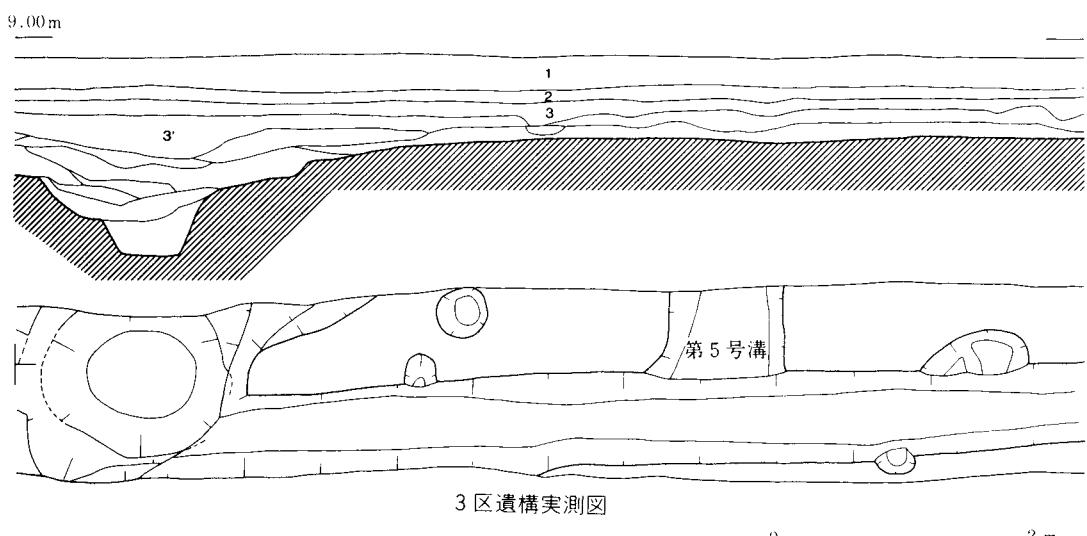
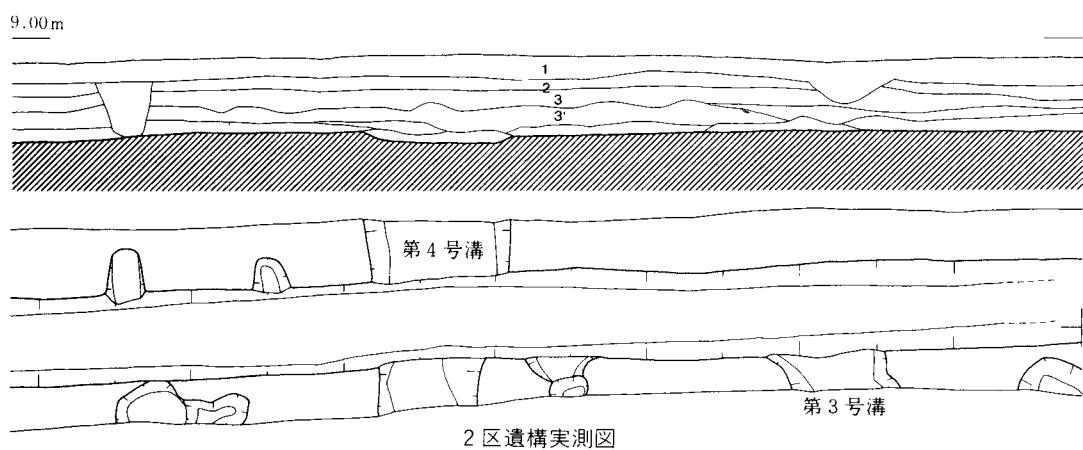
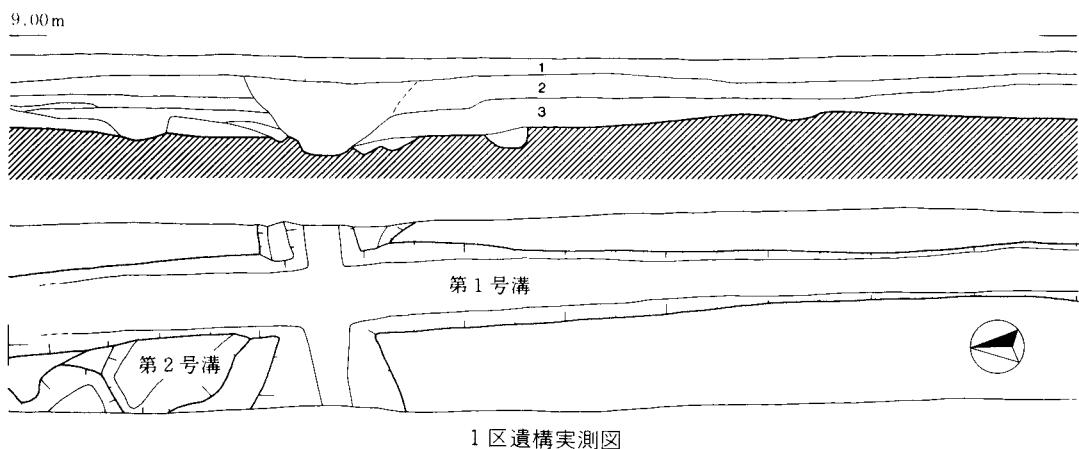
7区の西側に位置して斜行するが、その方向と覆土から5区の第8号溝の延長部の可能性が高い溝である。規模は上幅90cm前後、深さ20cm前後を測る。覆土は北側から地山の二次堆積と考えられる黄灰色砂質土層が流れ込むが、主体は濁黄灰色粘質土層である。第8号溝に比べて深さが10cm浅くなるが、それは溝底の標高が上がることによる。

第11号溝（第45図）

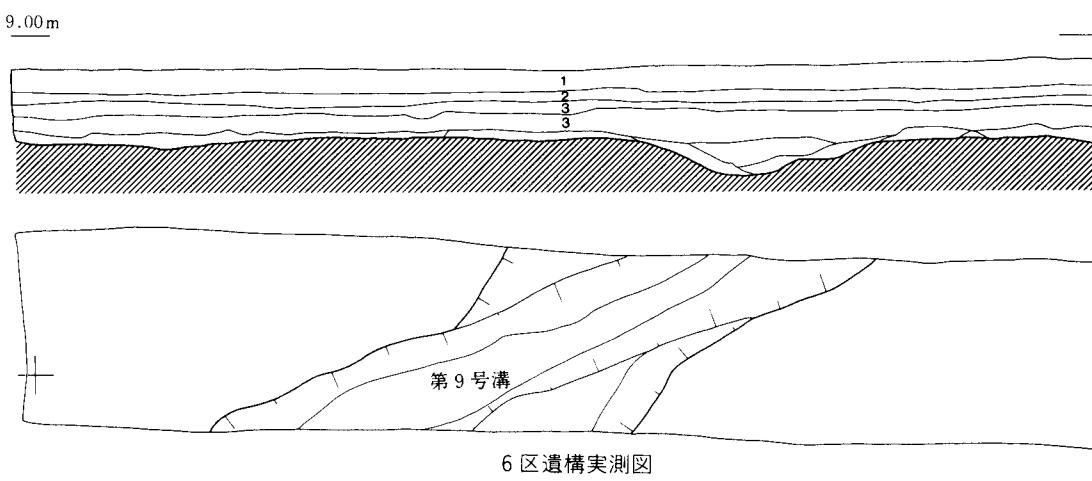
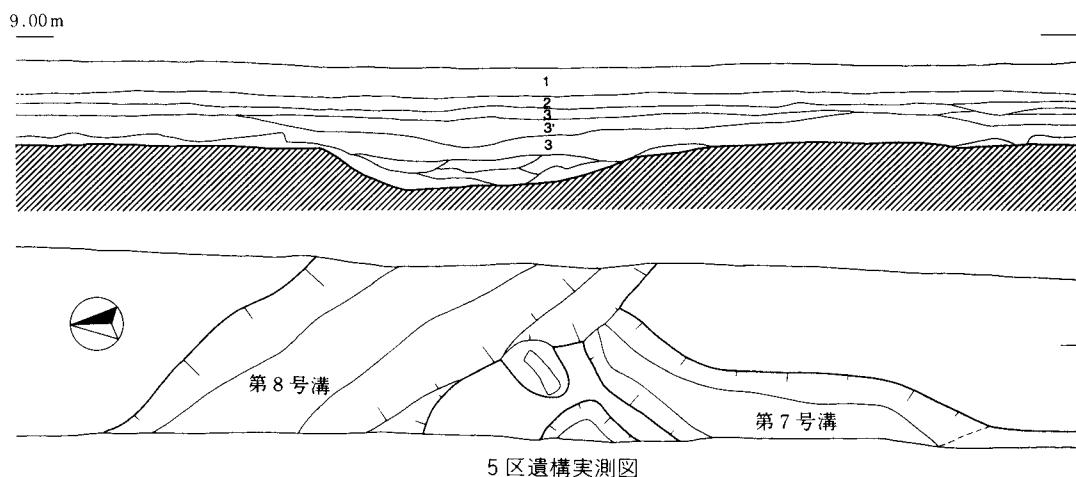
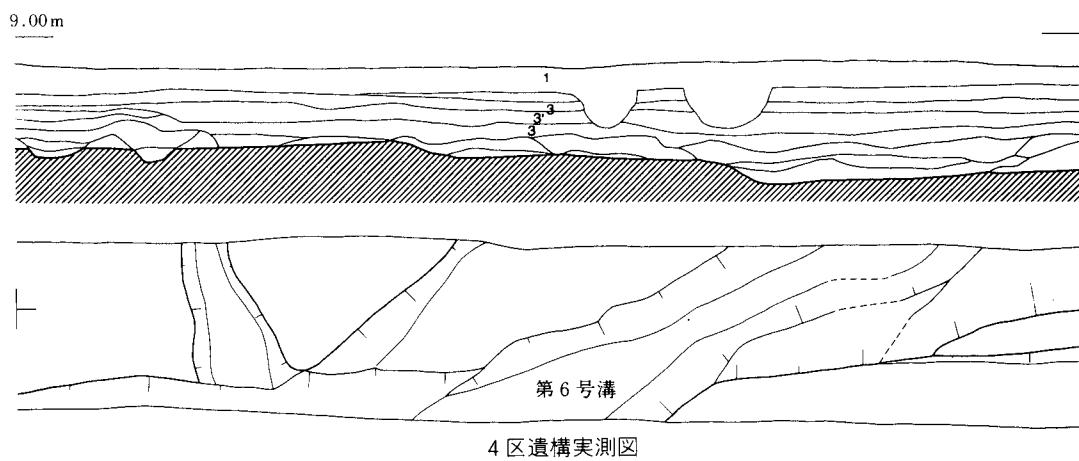
9区に広がる浅い溝である。規模は最大上幅150cmと広いが、深さは10cm前後と浅い。覆土は濁明黄灰色砂質土の単一層である。

溝以外に検出したものとして、2・3区のピット群、3区の倒木痕、8区の土坑状遺構がある。

2・3区のピット群は、径30~50cm、深さ10~20cmの規模を測るピットで、覆土の状況からし

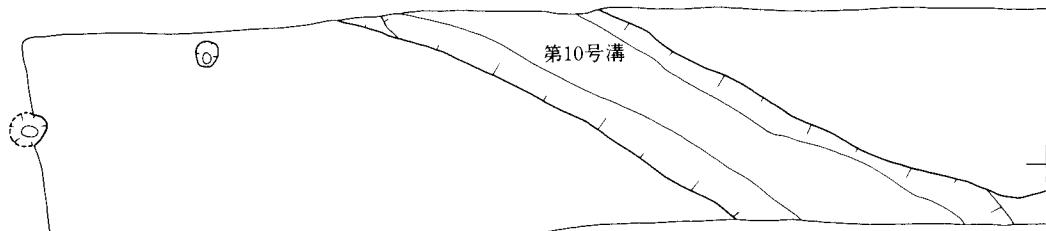
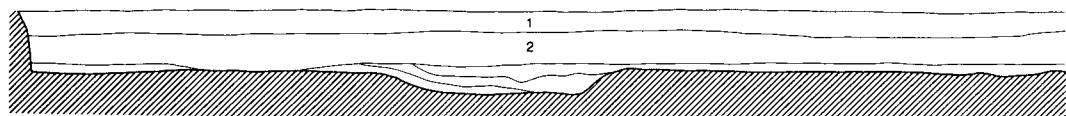


第43図 遺構実測図 (1/60)



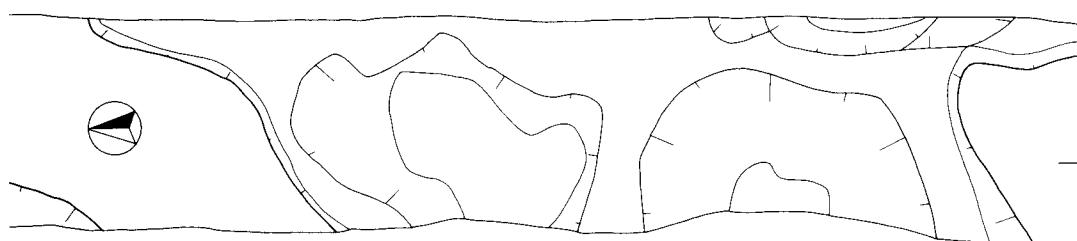
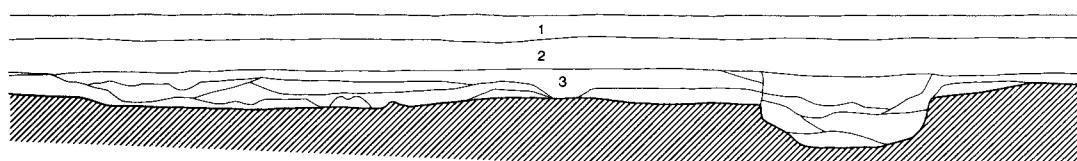
第44図 遺構実測図 2 (1/60)

8.80m



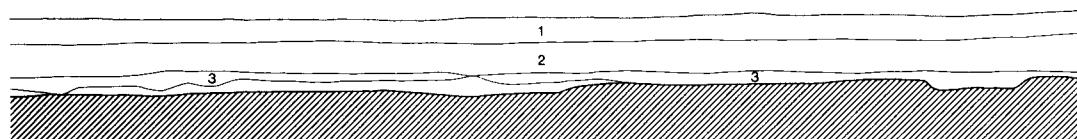
7区遺構実測図

8.80m



8区遺構実測図

8.80m



9区遺構実測図



第45図 遺構実測図 3

ても建物の柱穴以外の性格のピットと考えられる。また、3区の倒木痕は深さ70cmで、土層の状況から南西方向へ転倒した木根の跡と考えられる。

8区の土坑状遺構は2基ある。第1号は長径248cm、深さ50cmの規模を測るが、全体的に形状が不整形である。第2号は長径230cm、深さ60cmの規模である。2基とも覆土の状況が倒木痕に似ていることから倒木痕の可能性が高い遺構である。

2 遺 物 (第46図 図版22)

今年の平木D遺跡の発掘調査では出土した遺物は、コンテナ1箱と少ない。その内容は、弥生時代後期の甕・壺・高坏・器台などに、室町時代の瀬戸焼・越前焼などを加えたものである。

1は6区南側出土の高坏の坏部で、口径15.6cmを測る。口縁外面の三条の凹線文は弱く、外面のケズリや内面のミガキなどの調整は荒い。胎土は浅黄橙色を呈し、砂粒の混入が多い。

2は4区出土の甕で、口径15cmを測る。胎土は浅黄橙色を呈し、砂粒の混入が強い。3は3区出土の甕で、口径20.6cmを測る。胎土は浅黄橙色を呈する。3区からは同時期の甕類の破片が出土している。4は7区の第10区溝出土の甕底部片で口径17.6cmを測る。胎土は灰黄褐色を呈する。5は1区出土の甕で、口径15.4cmを測る。胎土はにぶい橙色を呈する。口縁内面の整形は荒く水引痕状に器面が波打っている。外面は上端までススが付着している。1区の包含層中からは、同種の甕が3点程出土している。6は5区の第8号溝から出土した甕で、口径24.4cmを測る。胎土は灰白色を呈する。口縁内面には弱い指押さえが残る。7は第10号溝出土の甕底部片で、底径4.2cmを測る。胎土はにぶい赤褐色を呈する。8は1区出土の甕底部片で、底径5.8cmを測る。胎土はにぶい橙色を呈し、その色調と質感から同区出の5と同一個体であった可能性が高い。

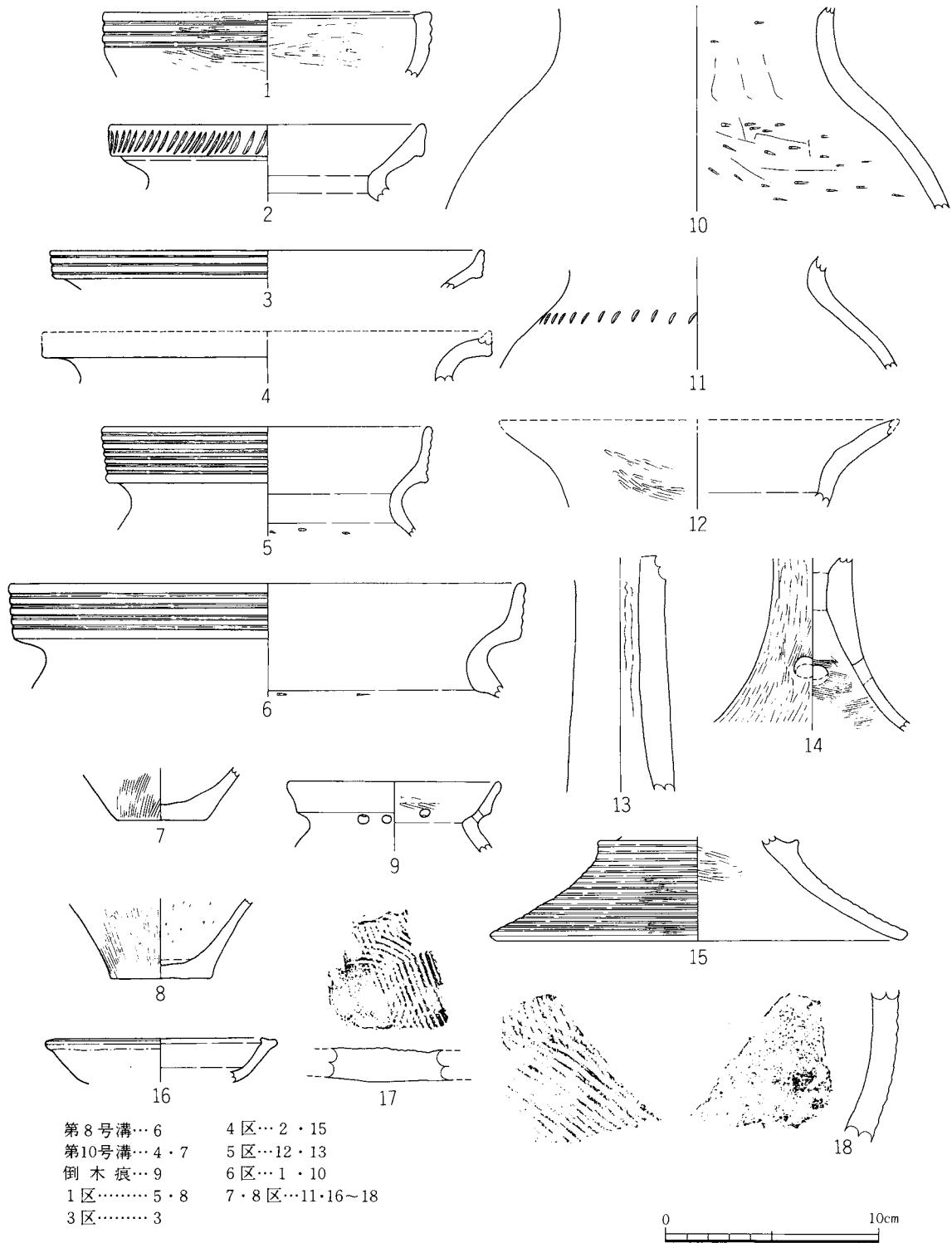
9は3区の倒木痕から出土した小型の壺で、口径10cmを測る。胎土は浅黄橙色を呈する。頸部の穿孔は、径0.5cmの小孔であるが、右側は貫通せず丸い窪みとなっている。外面体部に赤彩痕が認められる。10・11は中型の壺である。10は6区出土の壺肩部片で、頸部径13cmを測る。胎土は浅黄橙色を呈し、精良な質感である。外面のミガキも丁寧であるが、内面の調整は荒い。11は8区の土坑状遺構から出土した肩部片で、頸部径12cmを測る。胎土は浅黄橙色を呈する。内外面の調整は10と比べると良好である。

12は5区の出土で、器台の器受け部の可能性が高い。口径と口縁端部の形状が不明のうえ、内側の器面が荒れている。内外両面に赤彩が残る。胎土は黄橙色を呈する。

13・14は高坏の脚部である。13は棒状の脚部で、最小径4.2cmを測る。上端は坏部との接合面で剥離している。胎土は淡黄橙色を呈する。14は調査期間中に徳光海岸で表採したものである。脚部の最小径3.8cmで、径1.4cmの円孔が3箇所に入る。

15は4区出土の器台形土器の脚部である。外面の擬凹線は密に入り赤彩されている。胎土は淡橙色を呈し、精良な土である。

16～18は7・8区から出土した中世の陶器である。16は瀬戸焼の灰釉おろし皿である。口径11cmと小型ながら、胎土は灰白を呈し焼成も良い。17は越前焼の攝鉢の底部である。胎土は灰白色を呈し焼成は不良である。おろし目は9条まで確認することができる。18は珠洲焼の甕の体部である。胎土は灰色を呈する。外面のタタキは、3cm幅で7条を数えるだけで荒い。



第46図 平木D遺跡出土遺物実測図

第7章 平成元年度調査（北安田北遺跡）

第1節 調査の概要

平成元年度調査は、松任市徳光町東側の通称“オオカワ”と呼ばれる水田部でおこなった。

事業対象地区は昭和63年秋に分布調査を実施し、対象地区東側を中心として遺跡の存在が確認された。その結果をもとに関係機関と協議を進め、田面および用水路部分は盛土施工により遺跡の保護を図ること、遺跡が影響を受ける排水路部分を対象に発掘調査を実施することになった。発掘調査は平成元年9月22日～10月31日にかけておこなわれ、対象面積は480m²（幅約2m×長さ約240m）である。また、遺跡名として、従来まで「徳光遺跡」と呼称してきたが、整理を進めた結果、調査区東側に隣接する北安田北遺跡の一部であることが判明した。そこで本報告以降は遺跡名の下に字名を付して、「北安田北遺跡オオカワ地区」と呼称する。

調査区は、農道等によるトレントの切れ目を目安に、東側から順にA～Eトレントと呼称し、さらにBトレントを1～10区に区割りしている（第48図）。また調査区主軸線は予定排水路中心線と一致し、その方位はN-68.5°-Wである。

調査の結果、AトレントおよびBトレント1・2区は、過去の耕地整理等によりベース面を含め大きく削平を受けており遺構は確認できなかった。Bトレント3区では、古墳時代後期を中心とする時期の竪穴住居跡、掘立柱建物跡各1棟を検出した。Bトレント3～9区では、溝4条を検出したにとどまり、地山の傾斜を考え合わせれば遺跡の中心部から離れていく。またBトレント10区以西では、急激にベース面が下がり、沼状地形を呈すると考えられる。

次に基本土層層序だが、上層から第1層耕土、第2層包含層（黒灰色～暗灰色粘質砂）、第3層ベース土（灰黄色砂質土）となり、Bトレント7区以西ではベース面が急激に下がるため、ベース土の上に粘質土や砂が複雑に堆積する。ベース面はBトレント7区以東で標高8.5～9.0mと安定しているのに対して、7区以西では急激に下がり、Eトレントで標高6.9mを測る。また遺跡周辺は扇状地形が西側にむけて緩やかに傾斜し、現水田面での標高は調査区東端で9.4m、西端で8.2mを測る。

なお、調査は川畠が担当、調査員として藤重啓の、調査作業員として本田次雄、村田一昭、吉田与四次、神保花子、中島清子、中村一子、野崎美代（以上、徳光町）、村西良雄（千代野町）の協力を得ている。また、屋内での整理作業には松田英博、田畠弘、藤重啓、長谷川啓子の協力を得ている。記して、深く感謝したい。

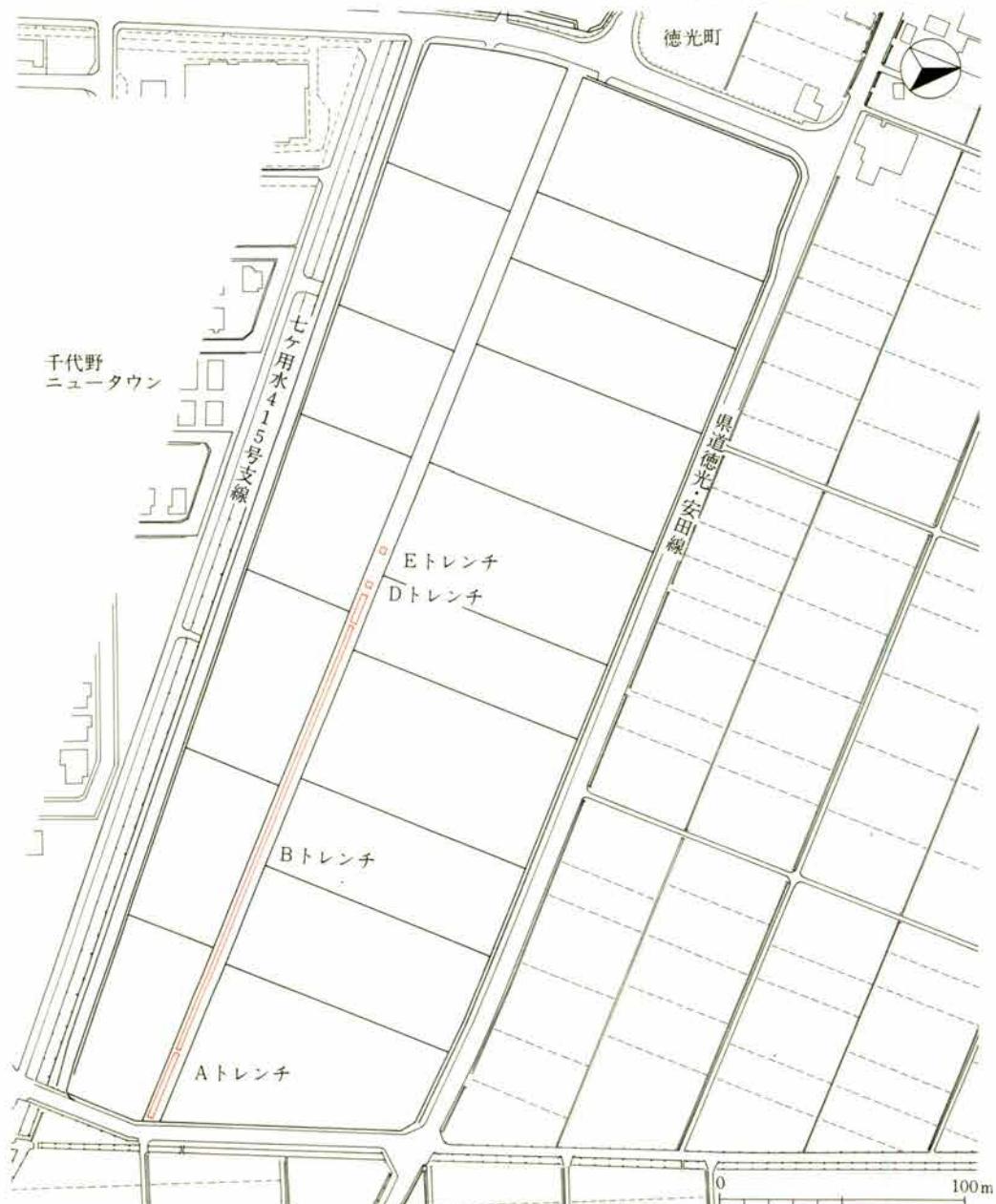
第2節 遺構（第48～51図）

Bトレントで竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡1棟、溝4条を検出した。

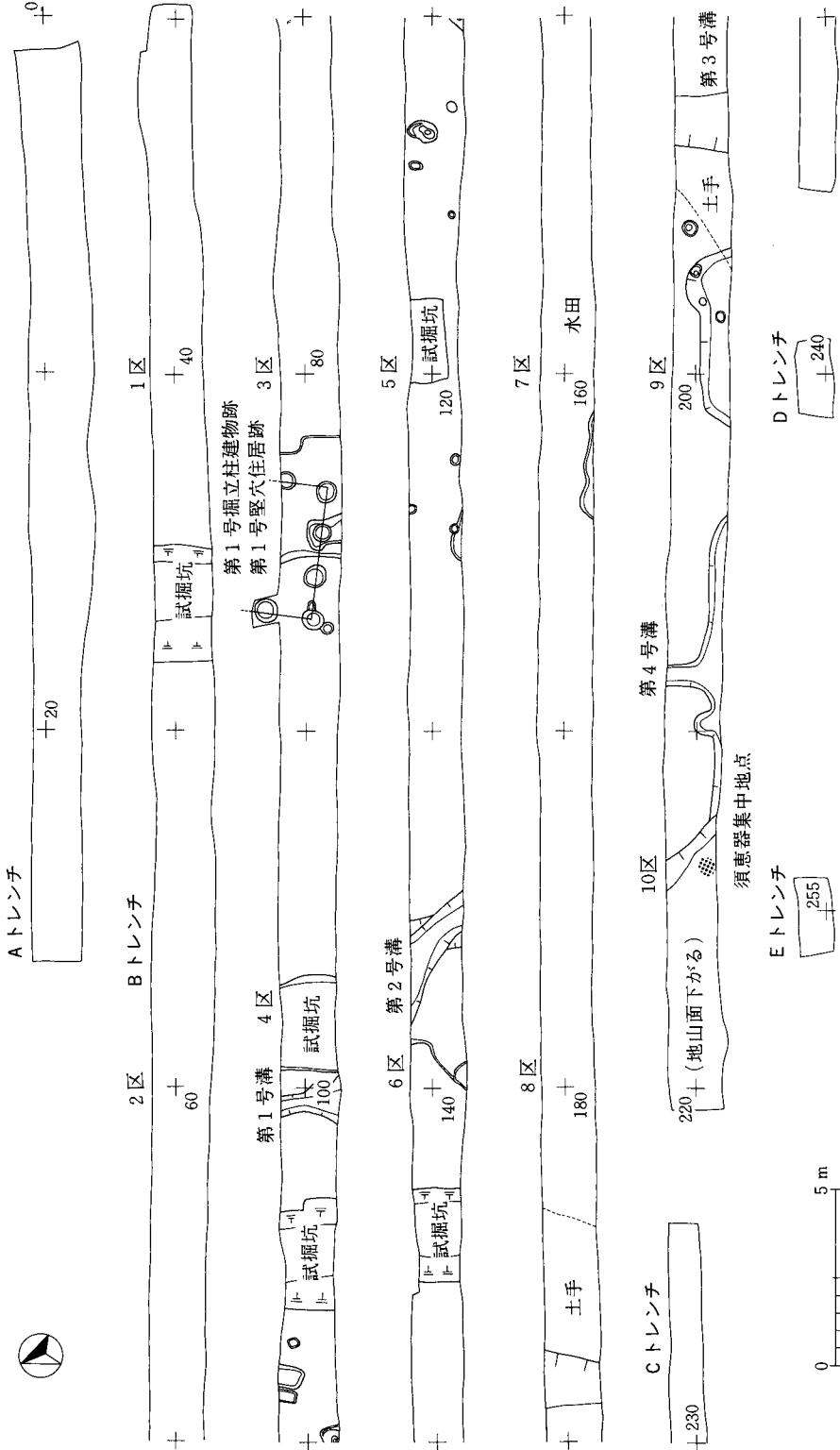
第1号竪穴住居跡 既存の排水路で大半が損壊を受け、明確には検出できなかった。特に東側の壁の立ち上がりは不明瞭で、平面図は断面等から復元したものである。第50図では、82m地点

調査区南壁断面で地山が立ち上がる箇所を壁の立ち上がり部分と考えた。方形を呈すると思われ、調査区南壁断面で深さ約20cmを測る。覆土は上層より濁暗灰黄色粘質土、濁灰色弱粘質砂となり、床面近くはしまりがよい。なお、床面で焼土は確認できなかった。

第1号掘立柱建物跡 断面から第1号竪穴住居跡より後出する。3間×1間以上に復元でき、主軸方位はN-67°-Wである。柱穴掘り方はやや崩れた円形を呈し、直径50~70cm、深さ約40cmを測る。柱間寸法は約120cmと比較的そろっている。覆土は上層より暗灰色粘質土、濁乳灰色粘質土、暗灰色粘質土が堆積し、南東端の柱穴でそれぞれ12cm、8cm、5cmの厚さを測る。遺物としては柱穴覆土から摩耗した古墳時代後期に位置付けられ、土師器甕片が少量出土した。

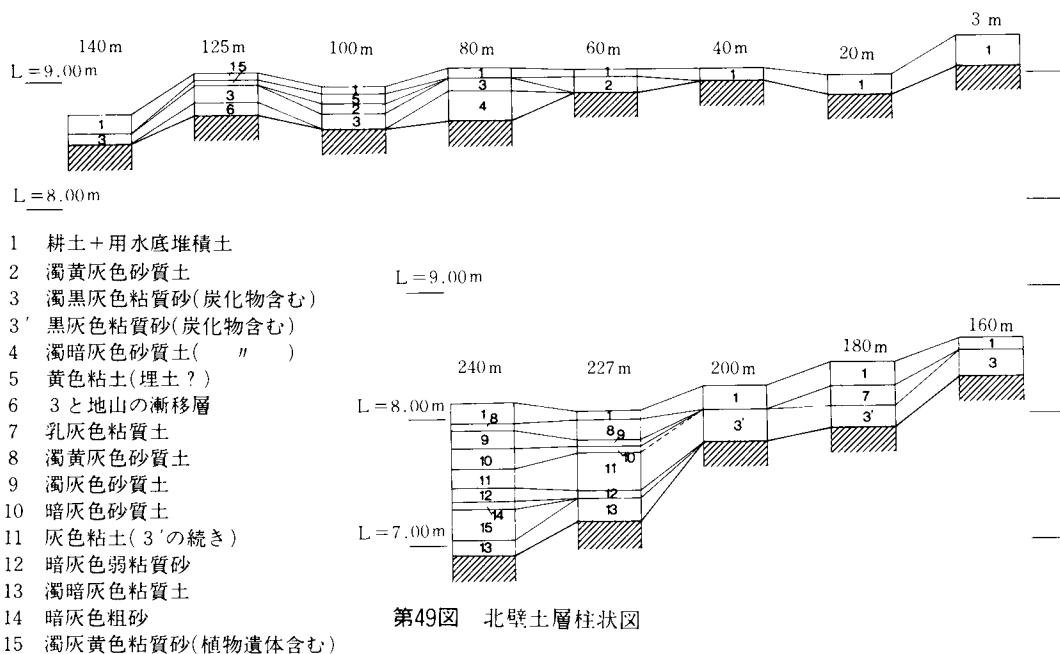


第47図 調査区位置図 ($S = 1/3000$)

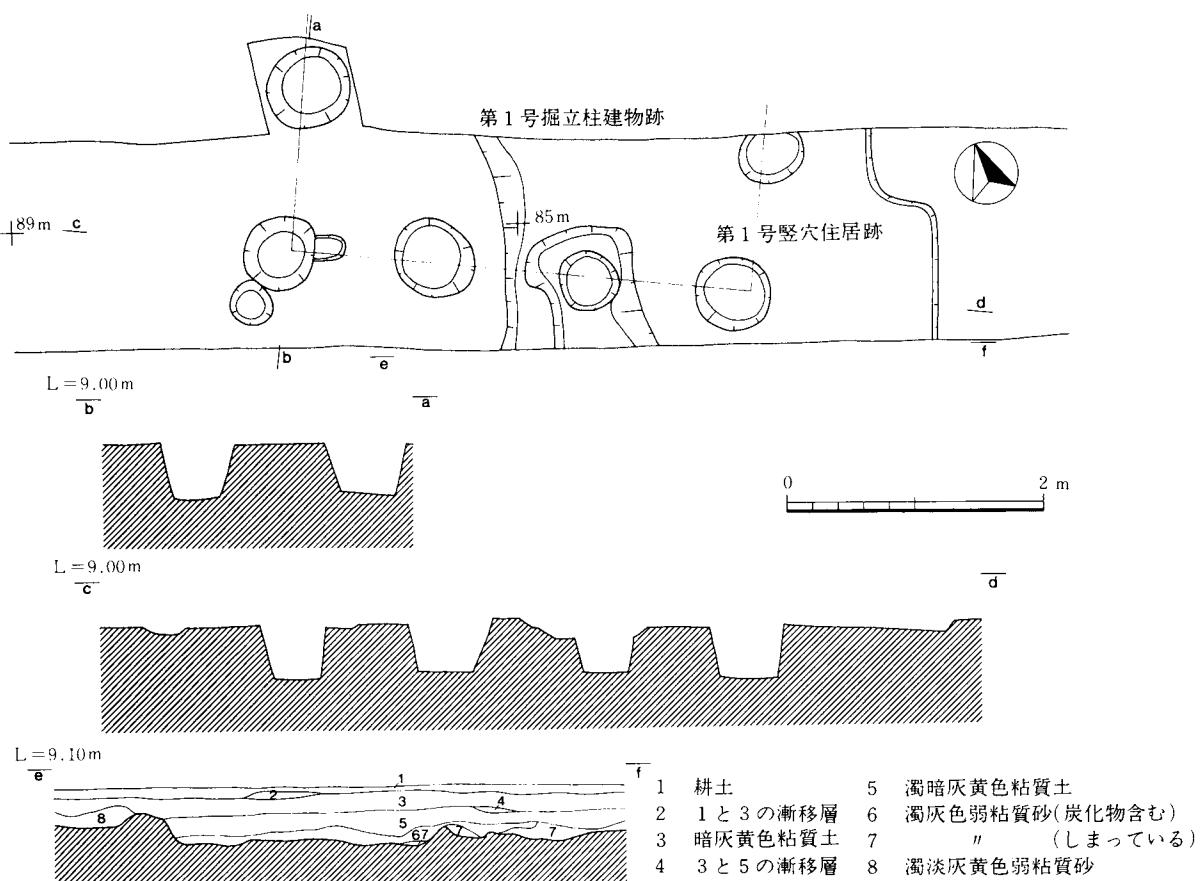


第48図 調査区配置図(S=1/200)

第1号溝 調査区にはほぼ直交して流れ、南側で幅が拡がる。調査区北壁で幅約60cm、深さ5～7cmを測り、覆土は灰色砂質土の単層である。出土遺物なし。



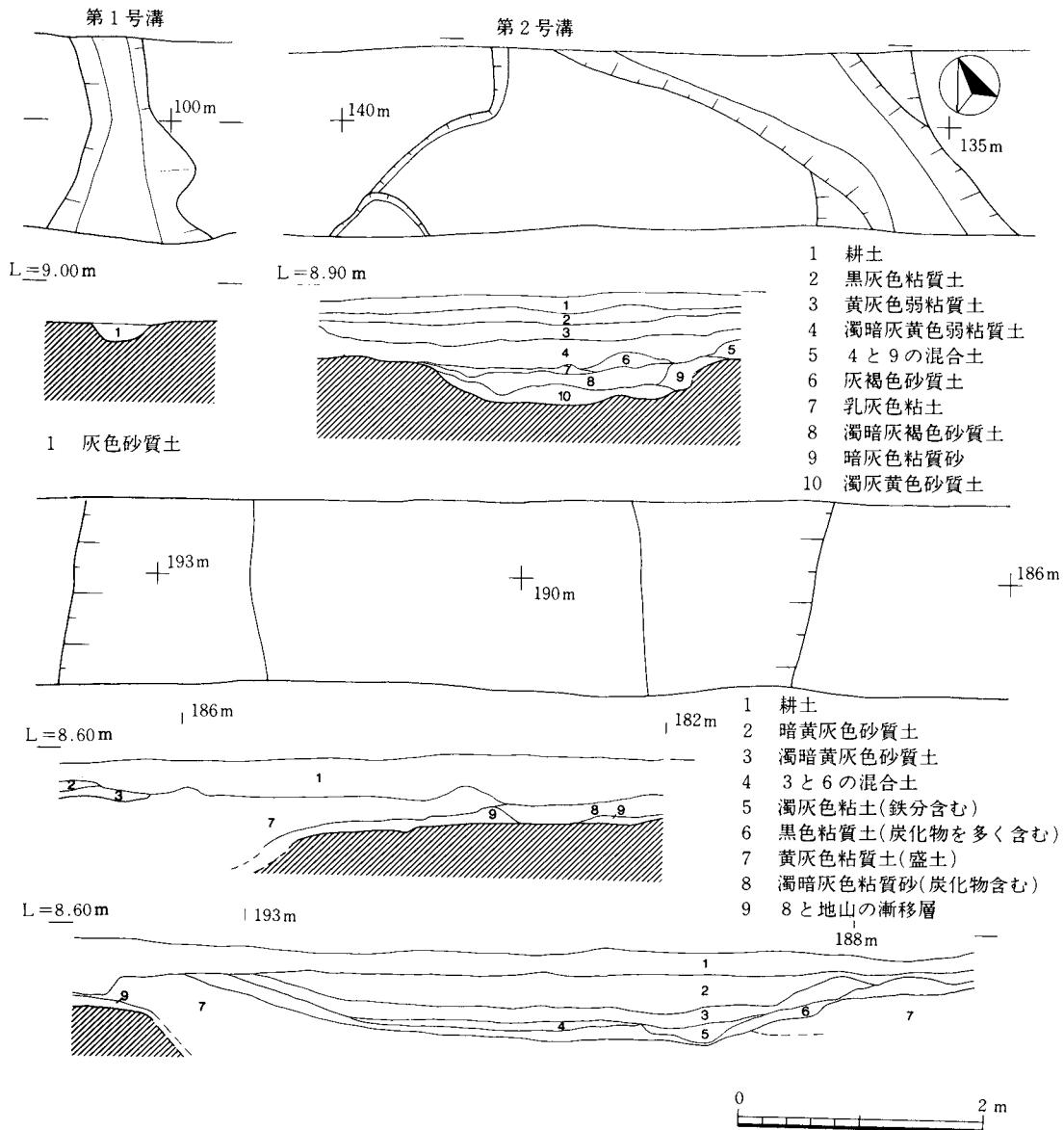
第49図 北壁土層柱状図



第50図 Bトレンチ遺構実測図(1)(S = 1/60)

第2号溝 ほぼ南北方向に流れる。北側で幅が拡がり、調査区北壁で幅約250cm、深さ約30cmを測る。覆土は上層より濁暗灰色砂質土、暗灰色粘質砂、濁灰黄色砂質土である。出土遺物はなく、時期は不明である。なお、第2号溝西側の地山面がやや落ち込んでおり、溝に伴うものと考えられる。

第3号溝 調査区にはほぼ直交して流れる河川跡と考えられる。耕土直下から掘りこまれ、かなり新しい時代まで存続したようだ。本来は上幅約9mの河川であったものを、黄灰色粘質土で大規模に河幅を狭めて、両側に土手状の盛土をおこなっている。その後、土砂が自然堆積し、最後は濁暗黄灰色砂質土で完全に埋められる。埋められた時期は明治時代以降の耕地整理の時と考えられる。河幅を狭めた時点の溝の規模は北壁断面で上幅約6.2m、下幅約3.2m、深さ0.4~0.6m



第51図 Bトレーンチ遺構実測図(2) (S = 1 / 60)

を、また西側土手状盛土は幅約1m、高さ約0.2m、東側土手状盛土は幅約4.5m、高さ約0.2mを測る。なお、本来の河川跡は調査区幅の制約から底まで完全に掘り切っていない。

第4号溝 ゆるやかな落ち込みをもち、10区以西に流れる。深さ約8cmを測り、覆土は明灰色粘質土の単層である。出土遺物なし。

なお、図化できなかったが、Bトレンチ6～8区第3号溝東側にかけて、写真図版25にみると、地山土に濁褐灰色の不定形な小ピットが集中して検出された。小ピットは幅5～10cmを測り、その配列には規則性は認められない。これらは稲株の植わった痕跡と考えられ、土層の堆積状況から他の遺構とほぼ同時期の水田跡と想定できる。調査区幅の制約から畦等が検出できなかつたため、断定は避けたい。

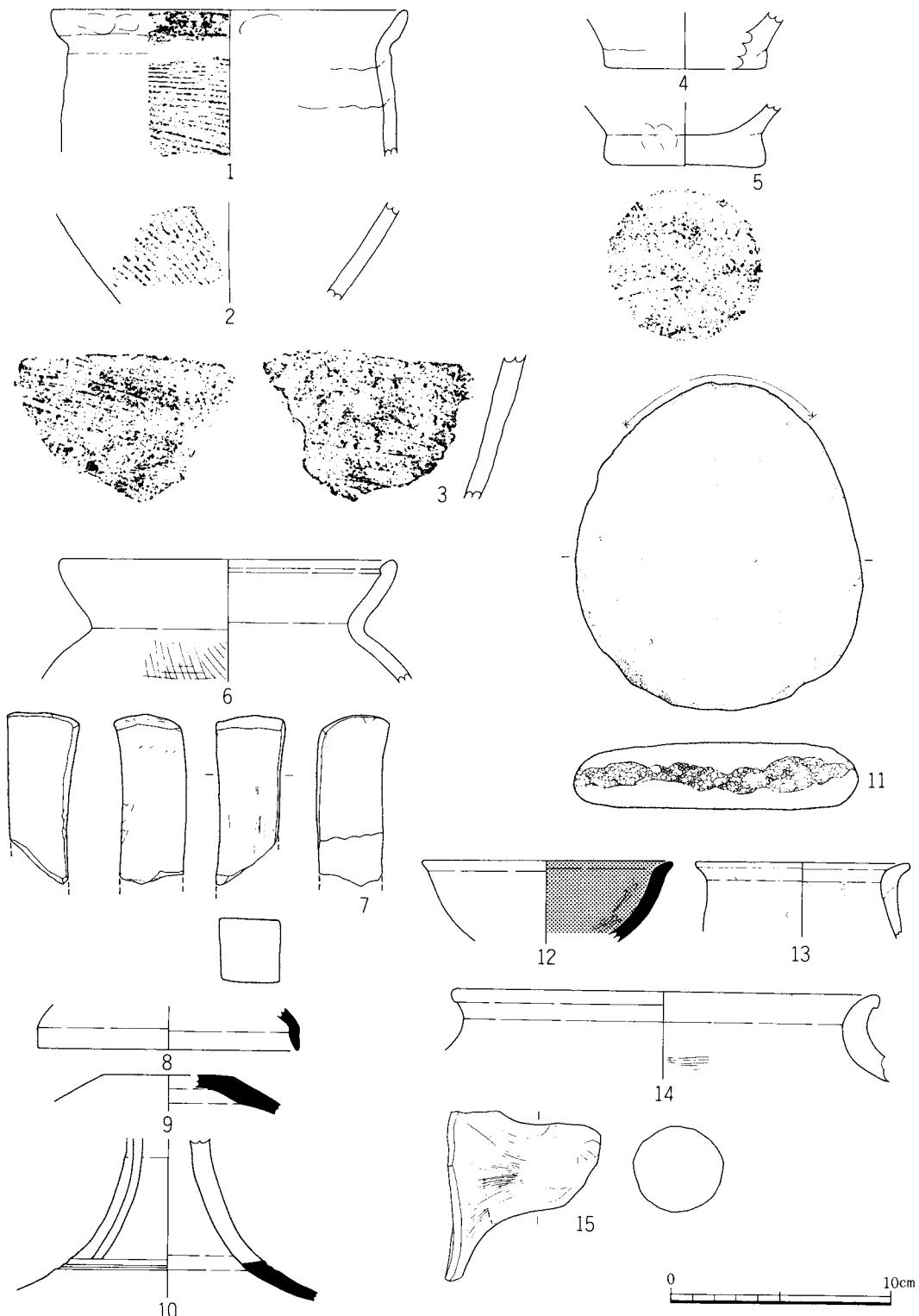
第3節 遺物（第52～53図）

遺物はいずれも包含層から出土している。1～5は縄文土器である。1は深鉢で口径16.2cmを測る。口縁部外面に指頭圧痕が残り、胴部内外面に条痕文を施す。胎土中に海綿骨片を含む。3は灰褐色を呈し、内外面ともハケ調整。また外面には煤が付着する。4は深鉢底部で底径7.4cmを測る。5は鉢底部と思われ、底部台状を呈する。底部外面にナデ調整を施す。6は布留系の土師器甕で口径15.0cmを測る。口縁端部をかなり丸く仕上げ、胴部外面に粗いハケ調整を施す。7は白色癡灰岩製の砥石で残存重量116gを測る。側面全てが研ぎに使用されている。石質から中砥ぎ用と考えられる。8、9は須恵器坏蓋である。8は口径11.8cmを測り、天井部と口縁部の境で屈曲する。9は灰白色を呈し、天井部外面にナデ調整を施す。10は須恵器高坏で、脚部は緩やかに開き、三方にスカンが入る。またスカシ下方に2条の沈線を加える。11は中央部がやや摩滅することから、磨石と考えられる。側面に敲打痕が残る。重さ887gを測る。12は土師器塊で、口縁部はやや外反し、内面に黒色処理をおこなう。13、14は土師器甕である。13は口径9.8cmを測る小甕で、口縁部は短く外側に開く。14の口縁部は短く外反する。また器肉は厚い。15は土師器の把手で、浅黄橙色を呈し、外面に煤が付着する。16～18は10区の沼状地形肩部付近から一括して出土した須恵器甕である。合計4個体存在し、うち3個体を図化した。16、17の口縁部は外側に肥厚するのに対して、18は内側に肥厚する。また16、17は頸部外面にカキメ調整を施し、胴部内面に同心円タタキA類、外面に平行タタキの後カキメ調整を加える。以上、時期を整理すると、1から5、11は縄文時代晩期末の下野式の新しい段階に、6は古墳時代前期漆町編年11群を中心とした時期に、8～10、13～15は古墳時代後期、6世紀後半に位置付けられる。

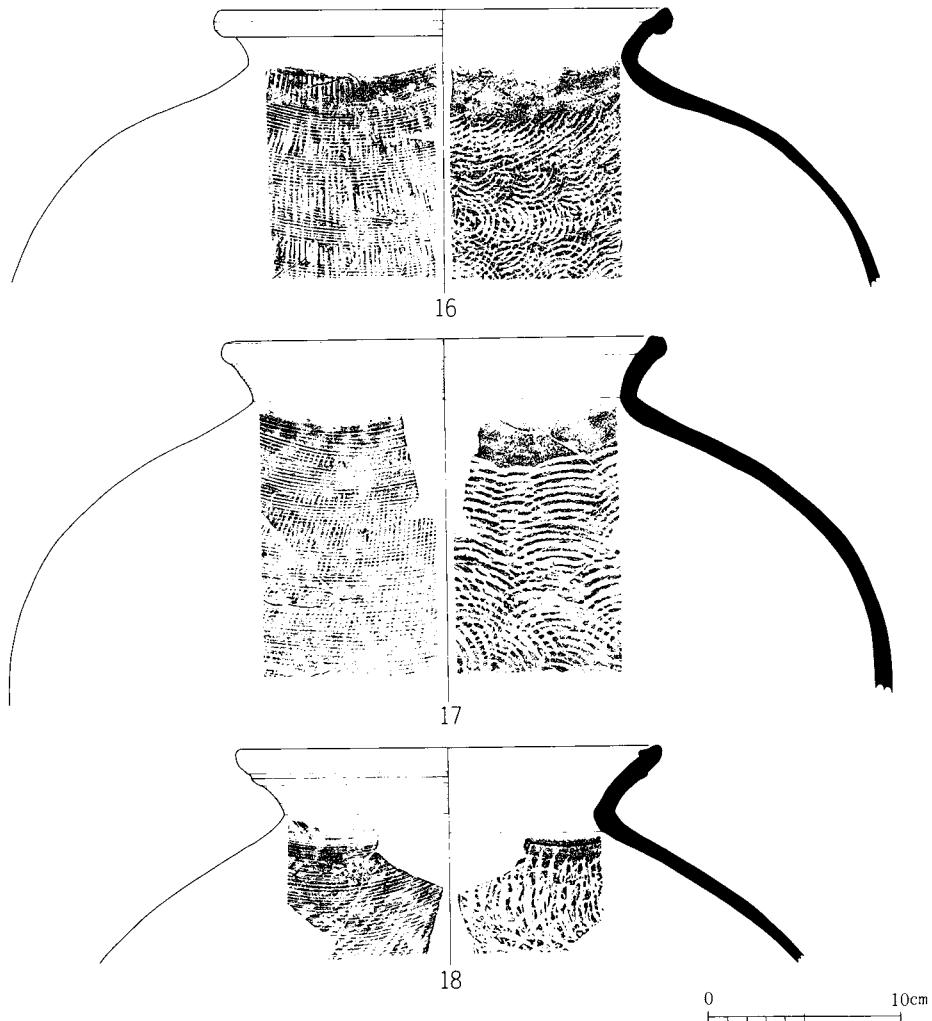
第4節 小結

最後に限られた範囲の調査であるが、得られた資料について若干整理をおこないたい。

まずBトレンチ10区沼状地形から一括出土した須恵器甕だが、かなり特殊な出土状況といえる。これらは元位置を保ち、一括投棄されたと想定され、いわゆる水辺の祭祀との関係を指摘できる。⁽¹⁾水辺の祭祀については、出原恵三氏が分類をおこない、6世紀代の祭祀形態は①須恵器甕を伴うこと、②須恵器が圧倒的に多いこと、③祭祀遺物をほとんど伴わないことが特徴であると述べて



第52図 A・Bトレンチ出土遺物(S=1/3)



第53図 Bトレンチ出土遺物実測図($S = 1/4$)

いる。また中村淳磯氏は、水辺の祭祀は「集落や水田等を水害から守り、豊饒を祈る水靈信仰や広義の農耕祭祀」であり、「各集落で普遍的」にみられ、6世紀代には「斉一性を失って個性化する」と考えられている。⁽²⁾今回の出土例も器種構成等で差異をもつものの、多様性をもった段階でのひとつの祭祀形態と把えておきたい。

次に、本地区は東側から居住域、水田、沼状地形と、地形に制約を受けた土地利用が復元可能である。本地区が島状地形の西端に位置し、古墳時代の集落の立地、景観を考える一助になろう。

また、北安田北遺跡全体で考えれば、従来の遺跡の始まりの時期を半世紀近く遡ることになるが、その位置付けは、周辺の遺跡群全体を視野において論ずるべきであろう。今後の課題としたい。

註

- (1)出原恵三「祭祀発展の諸段階—古墳時代における水辺の祭祀」『考古学研究』第36巻第4号 考古学協会
1990
- (2)中村淳穂「大阪城跡発掘調査出土の新羅土器綠釉蓋と谷部出土の遺物群について」『大阪文化財研究』第2
号 財団法人大阪文化財センター 1991

図 版

(遺物写真の番号は挿図の番号と一致する)

写 真 図 版 目 次

空中写真	図版 1・2
昭和61年度の調査（徳光古屋敷遺跡）	図版 3～5
昭和62年度の調査（徳光聖光寺遺跡）	図版 6～13
昭和62年度の調査（徳光ジョウガチ遺跡）	図版14～16
昭和63年度の調査（平木D遺跡）	図版17～22
平成元年度の調査（北安田北遺跡）	図版23～26



松任市徳光町と周辺(昭和63年4月)

1 / 10,000



(1) 遺跡の位置(A徳光ジョウガチ遺跡 D平木D遺跡)



(2) 遺跡の位置(B徳光聖光寺遺跡 C徳光古屋敷遺跡 E北安田北遺跡)

図版3 昭和61年度の調査（徳光古屋敷遺跡1）



(1) 調査区全景（北から）



(2) 第1号竪穴住居跡（西から）
拡張部の状況



(3) 第1号竪穴住居跡（北から）

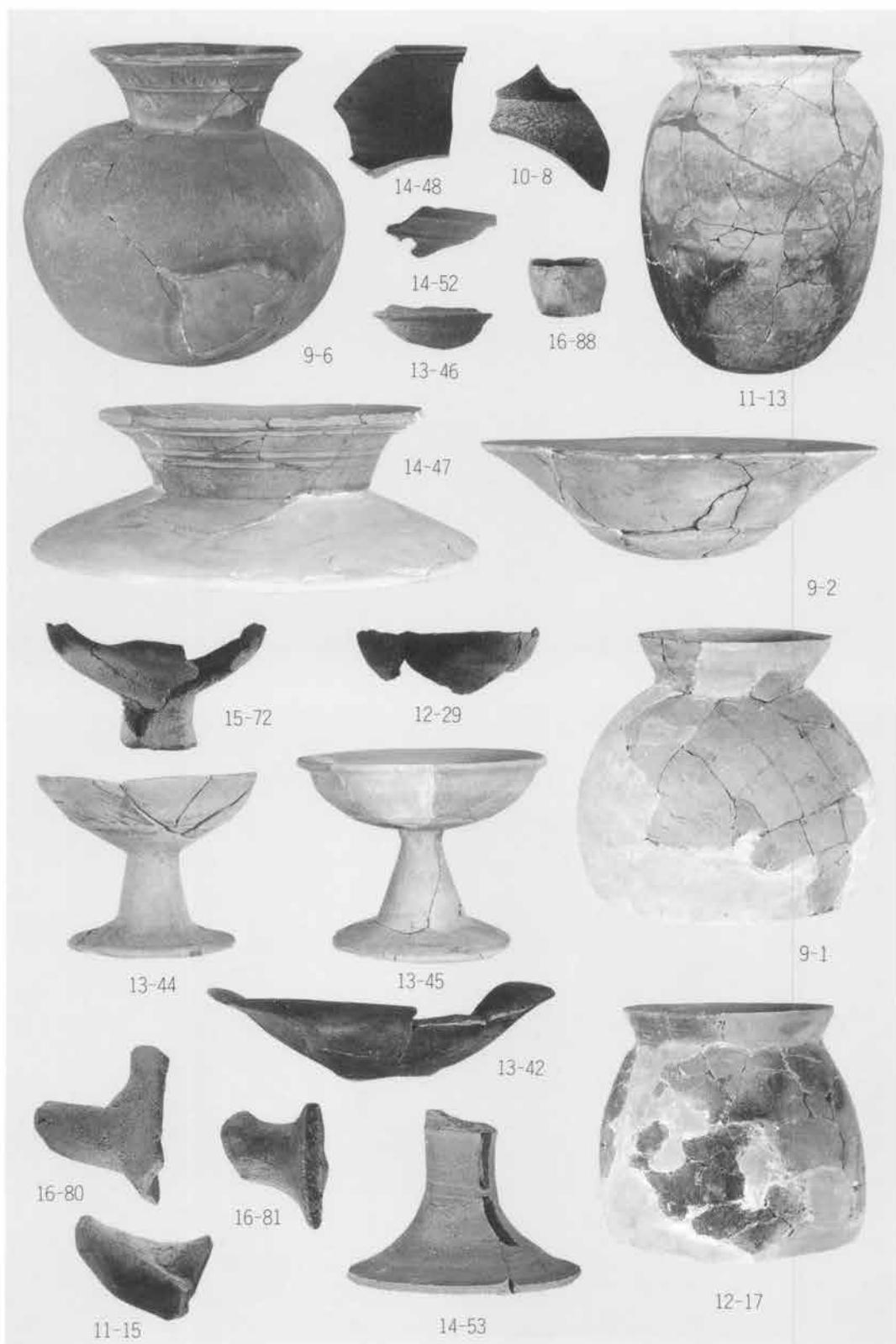


(1) 第2号竪穴住居跡床面（北から）



(2) 須恵器出土状況（西から）

図版5 昭和61年度の調査（徳光古屋敷遺跡3）



出土遺物

図版6 昭和62年度の調査I（徳光聖光寺遺跡1）

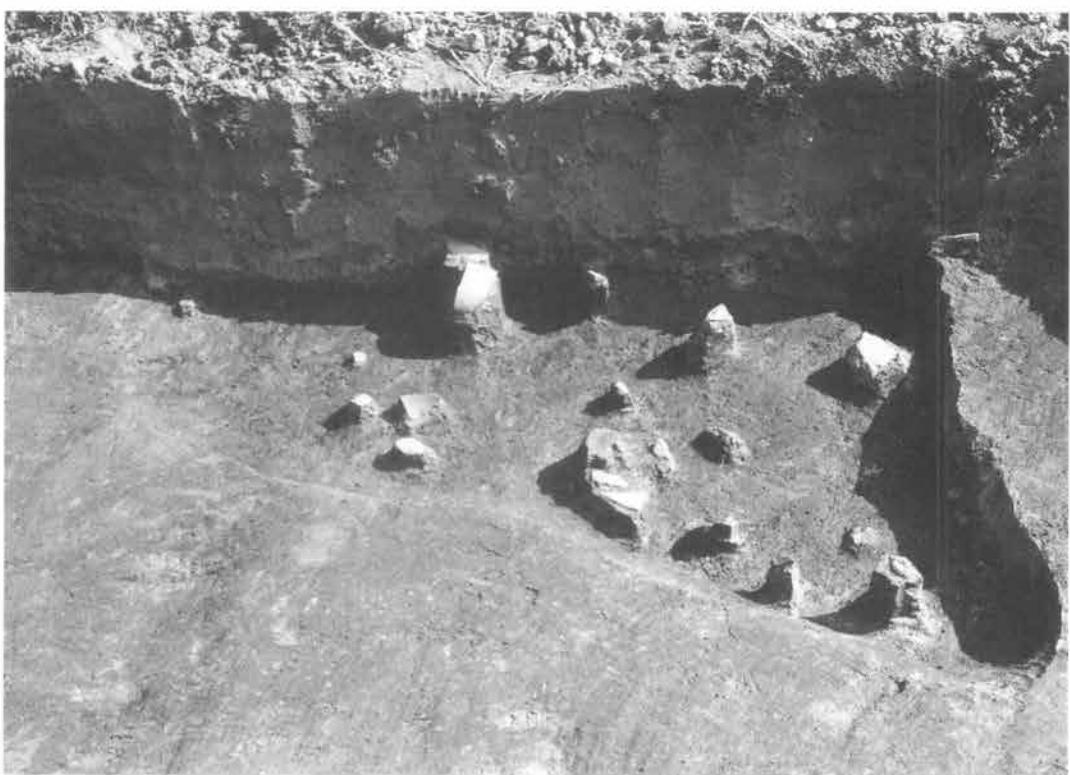


(1) I区全景（南から）



(2) I-0・1区全景（東から）

図版7 昭和62年度の調査I（徳光聖光寺遺跡2）



(1) I区第5号土坑（西から）



(2) I区第6号土坑（西から）



(1) I 区第 7 号溝（北から）



(2) I 区第 8 号溝（西から）

図版9 昭和62年度の調査I（徳光聖光寺遺跡4）



(1) II区全景（北から）



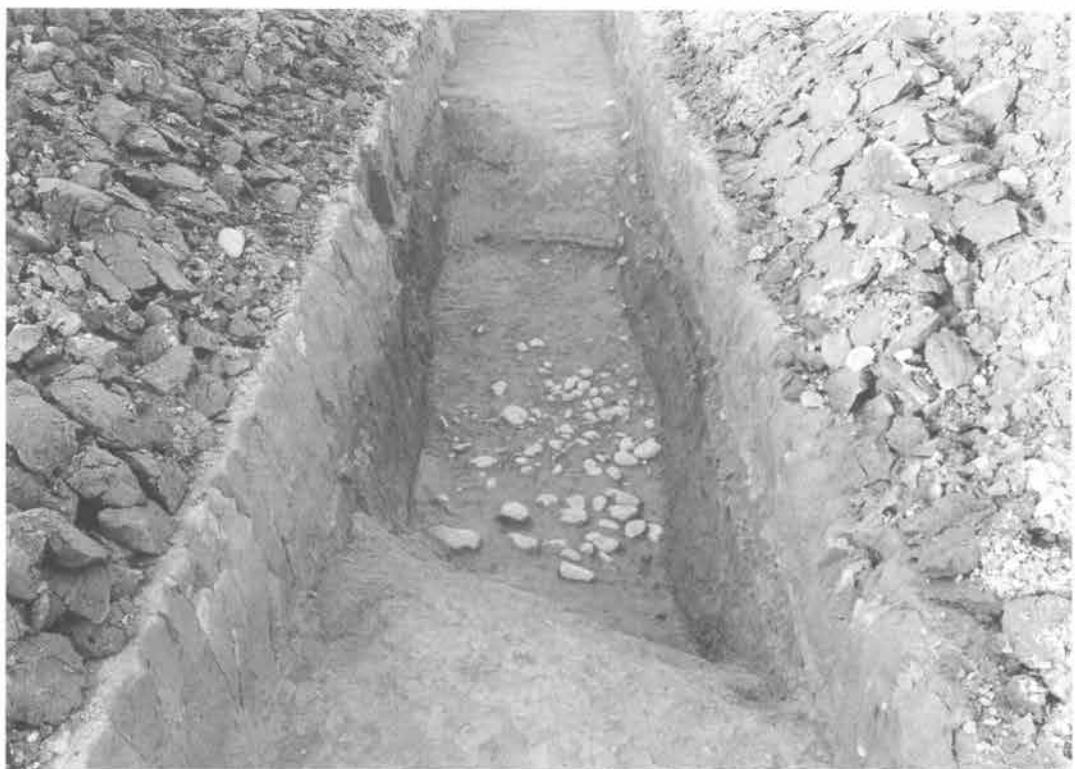
(2) II区第2号土坑（東から）



(1) II区第4号土坑(南から)



(2) II区第4号溝(北から)

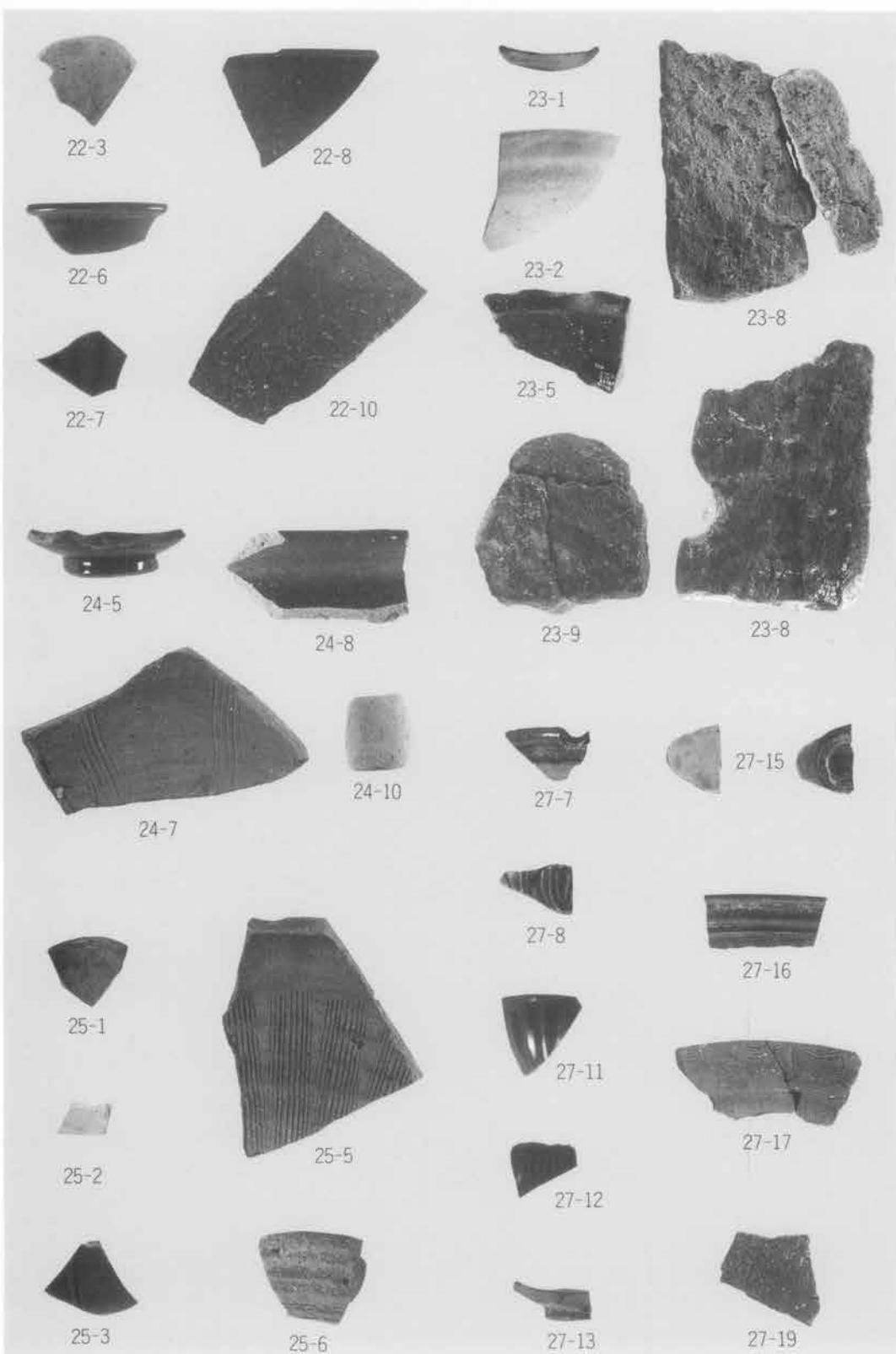


(1) II区第8号溝（南から）



(2) III区全景（北から）

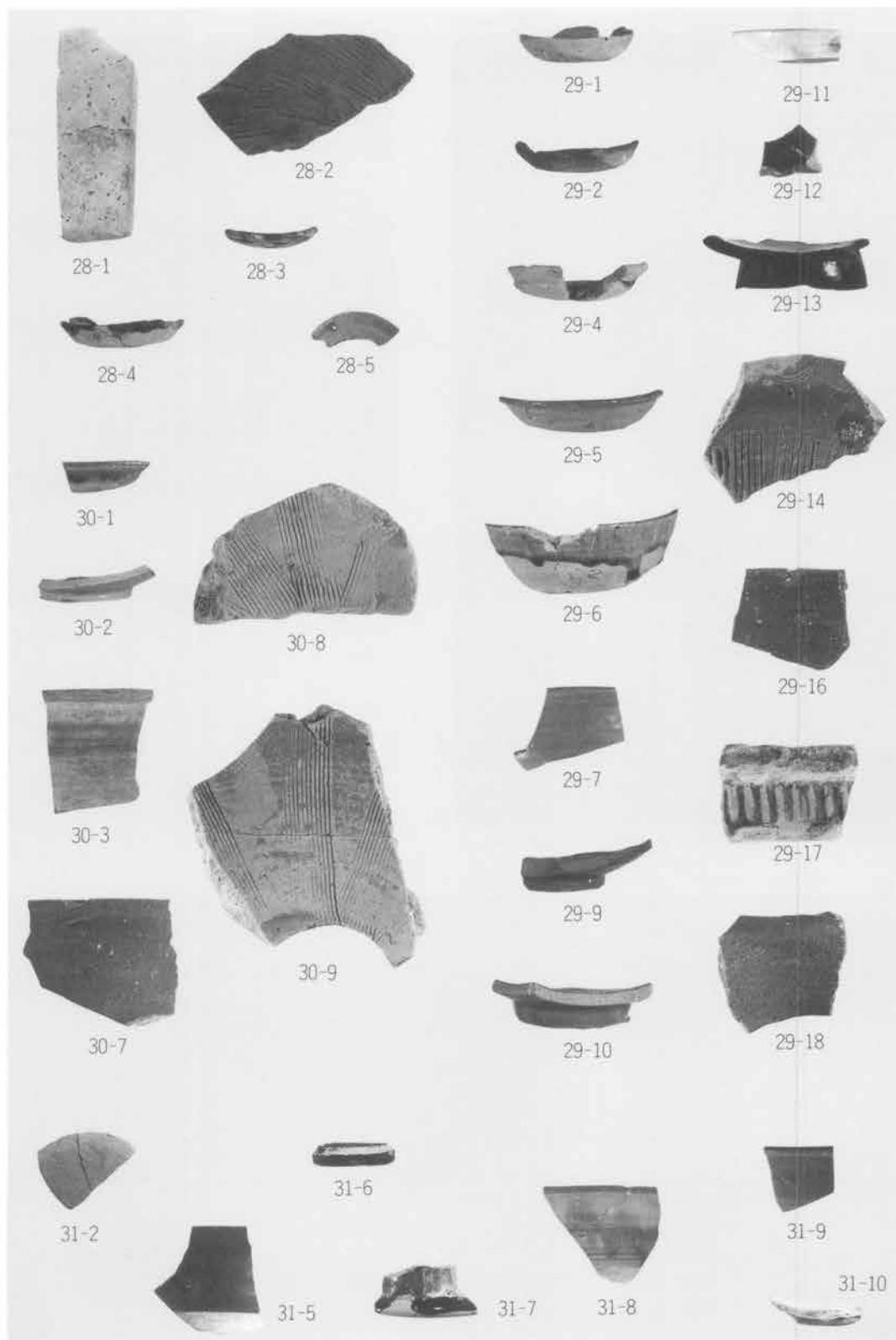
図版12 昭和62年度の調査I（徳光聖光寺遺跡7）



出土遺物(1)

1 / 3

図版13 昭和62年度の調査I（徳光聖光寺遺跡8）





徳光ジョウガチ遺跡南半部調査状況（南から）



弥生土器出土状況



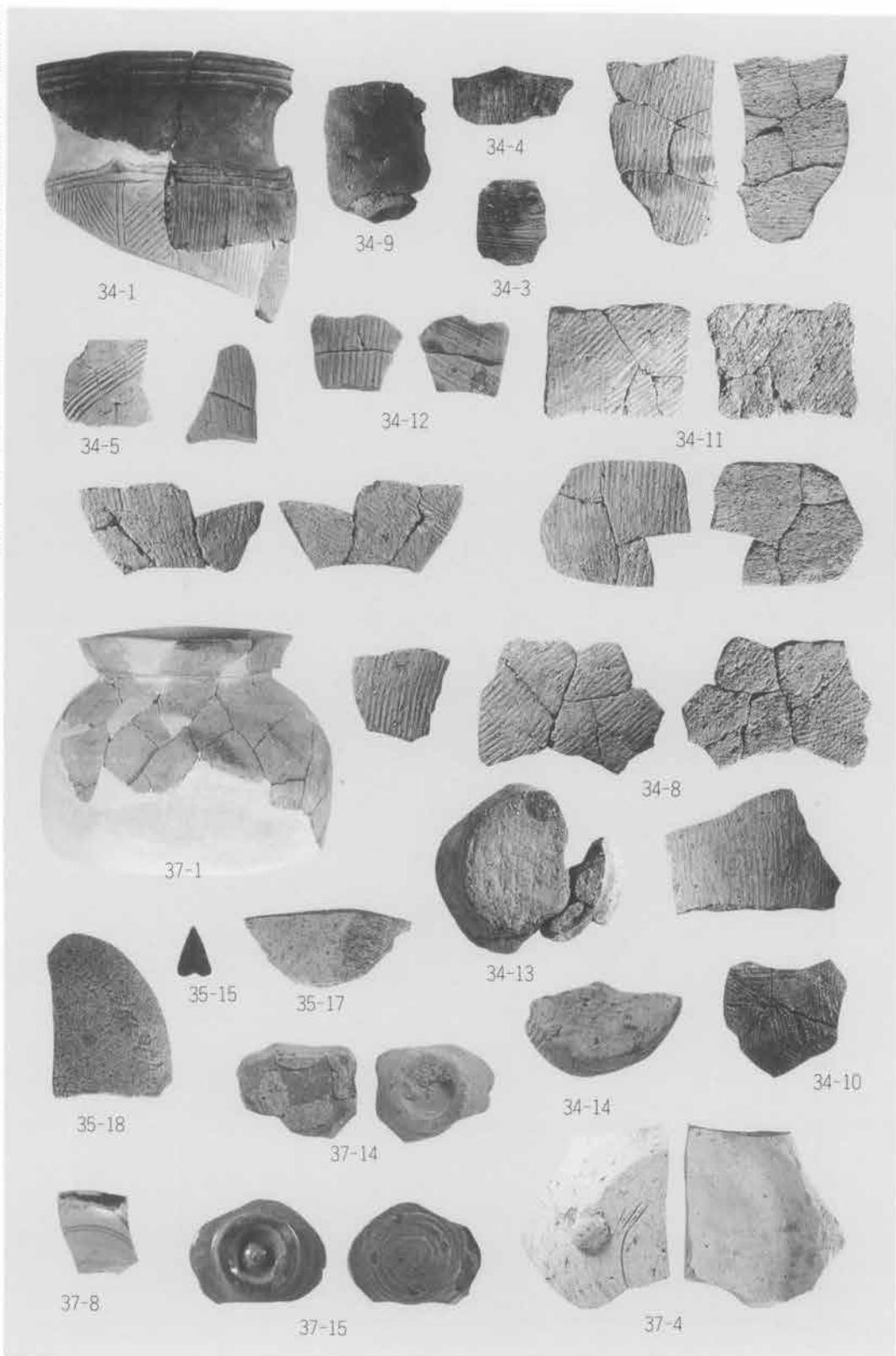
弥生の土塙調査状況（西から）



(1) 徳光シロド遺跡調査全景（北から）



(2) 徳光シロド遺跡溝調査状況



出土遺物



(1) 1～6 区全景（南から）



(2) 1～6 区全景（北から）



(1) 7~10区全景（西から）



(2) 11~34区全景（西から）



(1) 1・2 区全景（北から）



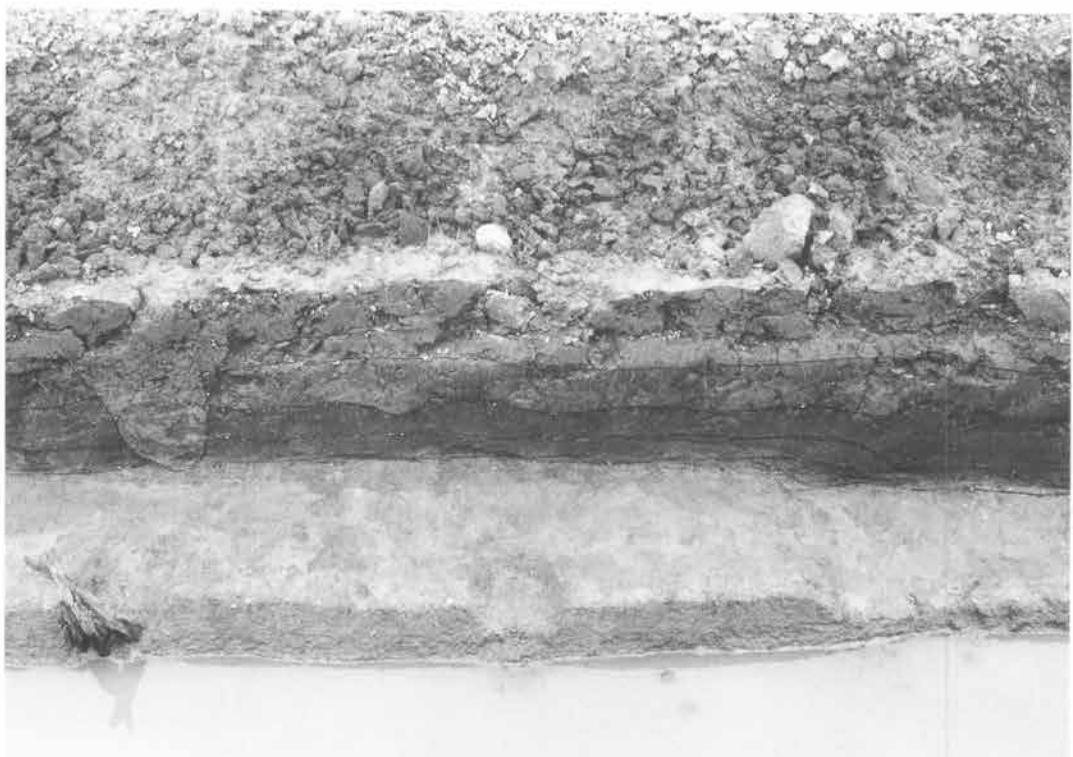
(2) 第 8 号溝（西から）



(1) 第10号溝（西から）



(2) 8区土坑状遺構（西から）



(1) 土層断面（2区東壁）



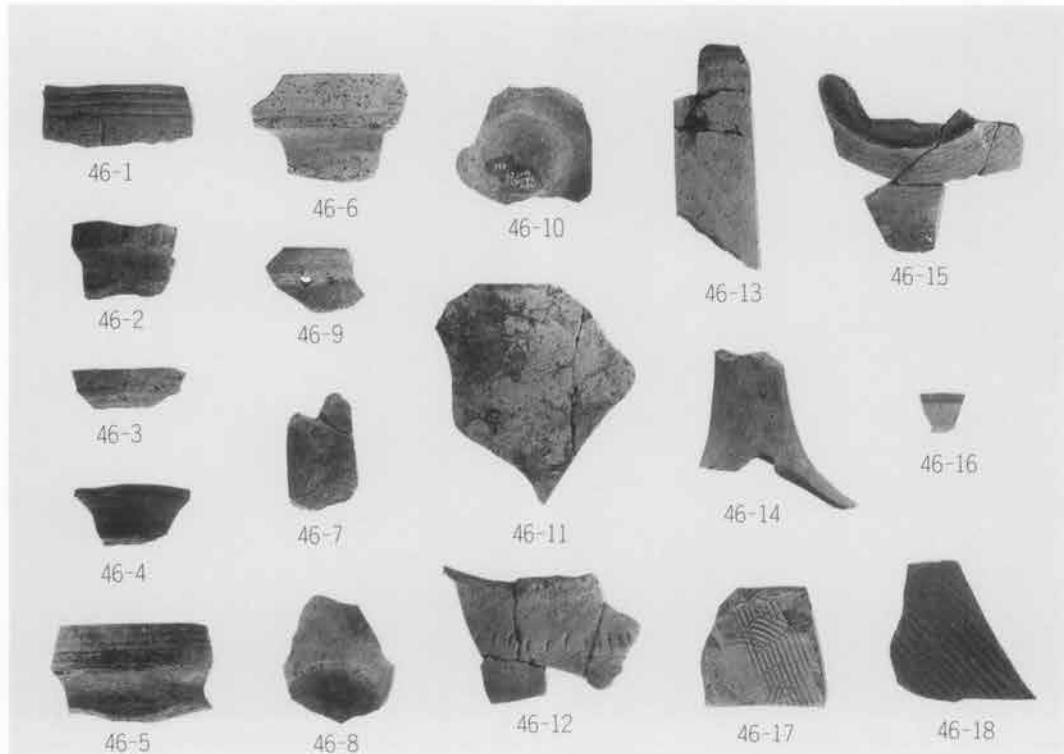
(2) 11~19区全景（西から）



(3) 29~34区全景（東から）



(1) 作業風景（北から）



(2) 出土遺物



(1) 表土除去作業風景（東から）



(2) 完掘状況（東から）



(1) Bトレンチ第1号掘立柱建物（西から）



(2) Bトレンチ第2号溝（西から）



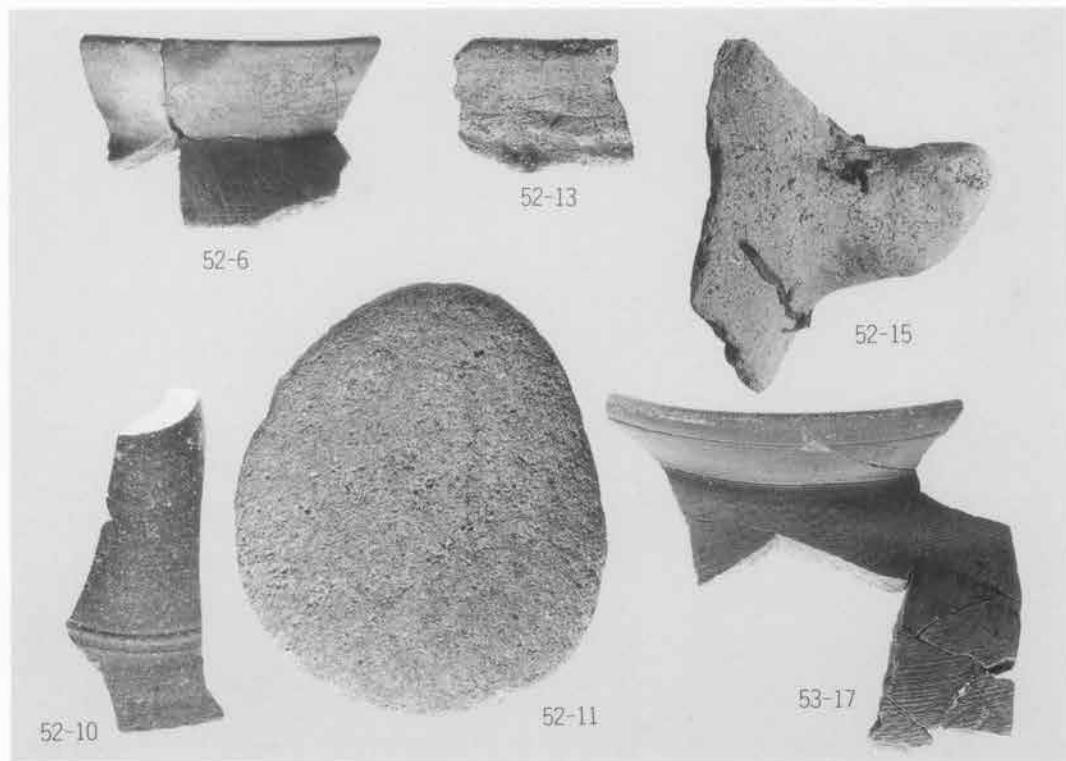
(1) Bトレンチ第3号溝（西から）



(2) Bトレンチ耕作痕検出状況（東から）



(1) B レンチ10区鞍部



(2) 出土遺物

徳光

—県営は場整備事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告書—

編集 石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町4丁目133番地
TEL(0762) 43-7692
発行 平成4年3月
印刷 北國書籍印刷株式会社